

2007 年度 卒業論文

主査 浦野 正樹 先生

題目 「沖縄 “エキゾチズム” イメージの再検討

“ノスタルジア”に見出される

まなざしの変容に向けて」

第一文学部総合人文学科 社会学専修 4 年

学籍番号 1C040524-5

氏名 齊藤 あゆ美

目次

序章 沖縄に対する問題意識	3
第1章 沖縄におけるエキゾチズムとは	5
1.1 エキゾチズムという概念 エドガーによる定義	5
1.2 沖縄の特殊性とエキゾチズムの再定義	8
1.3 沖縄の異国性を表象する3つの要因	12
第2章 沖縄エキゾチズム “異国エキゾチズム”	15
2.1 観光リゾートとしてのイメージ(1): 観光業の現在	15
2.2 観光リゾートとしてのイメージ(2): 観光イメージの誕生と変遷	19
2.3 観光リゾートとしてのイメージ(3): 開発への批判的視点とイメージの考察	25
2.4 芸能に長けた地域としてのイメージ(1): 芸能イメージの変遷と現状	29
2.5 芸能に長けた地域としてのイメージ(2): 芸能イメージのメカニズム	33
第3章 沖縄エキゾチズム “ノスタルジア”	37
3.1 癒しの島としてのイメージ(1): 「癒し」が求められる現代社会	37
3.2 癒しの島としてのイメージ(2): 沖縄の「癒し」の要素とノスタルジア	40
3.3 癒しの島としてのイメージ(3): 沖縄に希求される原点回帰のイメージ	43
第4章 イメージによるまなざしの功罪	47
4.1 東京を経由するイメージとリアリティ	47
4.2 イメージとエキゾチズムの身体化	51
4.3 イメージに隠蔽される現実と県民意識	56
第5章 エキゾチズムの展望	63
5.1 異国エキゾチズムの描き出す“外部”	63
5.2 ノスタルジアの語り出す“内部”	66
5.3 メディアに見出される可能性	70
終章 沖縄エキゾチズムの今後に向けて	74
論文構成図解	76
参考文献・参考資料	77

序章 沖縄に対する問題意識

「沖縄」と聞いて、初めに何を思い浮かべるだろうか。青い海や白い砂浜などの美しい風景だろうか。歌や踊りの文化息づく伝統性だろうか。もしくは、芸能人が多数出身して活躍している地域だということだろうか。独特の食文化や人の温かさ、昔ながらの風景などといった、“癒し”を誘発する要素だろうか。それとも、戦争体験や米軍基地など、様々な分野で問題視されるような現実であろうか。

このように沖縄という空間は、人々の意識の中に、たくさんの「沖縄像」を描き出す。そしてそのどれもが、沖縄にまつわるイメージとして、広く普及されているものである。沖縄にまつわるイメージは、“沖縄らしさ”というような表現で、私たちの意識の中に深く溶け込んでいると言える。私自身、無意識の内にこうした数々のイメージを頭の中に思い浮かべて、沖縄を語ろうと試みていることがしばしばあることに気付かされる。

なぜ、沖縄にはイメージの要素となるものが多く存在するのだろうか。私たちが沖縄に目を向けるとき、その視線は沖縄という空間に何か“特別”なものを感じているように思われる。その“特別視”は、沖縄に対する人々の注目が近年とりわけ高まってきていることを背景に、ますます強まってきている意識であると言えるだろう。では、沖縄が特別な存在として感受されるには、一体どのような理由があるのだろうか。

沖縄と言えば、観光地としての人気をコンスタントに保っている地域として名が高いが、その人気は、沖縄がサンゴ礁をたたえた美しい海を中心としたリゾート空間を作り出しているということを発端とする。それは、沖縄が戦後、アメリカの統治下にあって、1972年に本土復帰してから現在に至るまでの間、年月をかけて作り上げてきたものであり、その35年の間で、リゾート地としての沖縄の位置付けは、疑いの余地のないほど確固たるものとなった。沖縄への観光客数も、1972年には44万人であったものが、右肩上がりの上昇を続け、2005年には550万人に至った。そのうち沖縄への修学旅行者数も、最近では年間40万人を越えている。しかし沖縄の魅力を表現しているものは、海の美しさにとどまらない。それが、ここでの冒頭に挙げたような数々のイメージ像に象徴的に表れている部分である。

沖縄は歴史的に、「日本の中の異国」と言われてきた。それは、沖縄が本来、「琉球王国」という、日本とは別国家としての歴史的背景を持つことに起因する。現在、沖縄に対して特別な存在としてのまなざしが向けられているのは、その「異国性」に理由があると言えるだろう。「異国性」それはすなわち、自分の日常の空間では見聞き・体験のできない領域にあるもののことを指す。エドガー・ポープ(2005)は「異国情緒」を、「エキゾチズム」という言葉で表現する。「エキゾチズム」は普遍的な文化現象として捉えられているが、沖縄における「エキゾチズム」も、日本本土とは異なる歴史に裏付けされた普遍的現象と考えることができる。そしてその「エキゾチズム」は、歴史・文化・社会・政治等、あら

ゆる側面において、沖縄の異国性を印象付ける効果となっている。そのうち、沖縄の魅力として語られる側面は、文化・自然環境などについて抱かれる部分のイメージが大きな要素となっている。

沖縄の産業は、現在、小売・サービス業などの第三次産業が中心であり、観光業は県経済にとって大きな支えになっている。とりわけ1972年の本土復帰以降、日本における沖縄への渡航が自由化されると、沖縄はリゾートとしての魅力を全面に押し出し、その特殊性を観光業に向けて有利に活用させてきた。しかし、そうした観光地としてのコンスタントな人気の背景で、影に隠れてしまっている問題というものがある。沖縄には山積している。経済的に未自立の現状、本土の約2倍という失業率の高さ、米軍基地の存在による県民生活の圧迫、自然環境の破壊など、問題は様々であるが、これらは基地問題から派生的に生じているものが殆どであると言える。

日本本土の住民が沖縄に目を向けるとき、そこには現状に先行するイメージの視線が介在する。そして、そのイメージの視線はしばしば、沖縄の魅力として捉えられる「明るさ」の部分に偏って照射されがちだ。そのため、沖縄へのまなざしにイメージが介在するということは、沖縄が抱える様々な問題から目をそらさせてしまう要因となり、現実の負の部分との認識に乖離を生んでしまうことにつながるのである。こうした状況を作り出しているイメージとはどのようにして生み出され、現状にどのような問題の影を落としているのか。また、エキゾチズムという概念はどのような性質を持ち、沖縄に対して向けられる様々な視線を形作る上で、どのような影響力を持っているのだろうか。本土復帰を契機として、沖縄のイメージを形作る多くの情報が露出されてきたことの因果を紐解きながら、エキゾチズムという概念のあり方について検討していきたい。その上で、イメージの視線の存在が研究分野において批判的な見解を受けていることの原因を省察する。さらにその省察を通して、沖縄という空間の現状と将来について、エキゾチズムという概念をプラスの効果として捉えるためには、どのような思考の再検討が可能であるのか。以上を問題意識として、本論文の目的としたいと思う。

第1章 沖縄におけるエキゾチズムとは

1.1 エキゾチズムという概念 エドガーによる定義

はじめに、表題にも挙げた「エキゾチズム」という言葉に関して、その定義付けを確認しておきたい。「エキゾチズム」という概念は、本論文を進めていく上で、議論の要となる概念であり、問題意識の出発点ともなっているものである。本章ではエキゾチズムの概念を説明するとともに、沖縄という地域の特徴を鑑みて、その内容の捉え直しを図ることを目的としたい。

はじめに、「エキゾチズム」という語は、エドガー・ポープが論文「エキゾチズムとポピュラー音楽のダイナミズム 大陸メロディを中心に」の中で使用している語である。彼はその中で、エキゾチズムを一言で「異国情緒」と言い換えている。「異国」に対する概念や感情は多種多様であるが、多くの文化や時代において、異国や異国の事物には何か特別な魅力があると感じられてきたようである。そうした意味において、「エキゾチズム」とは普遍的な文化的現象として捉えることができるが、文化を対象とした学問分野においては、「exoticism」という言葉は軽蔑的表現として普及されているという。それというのも、エキゾチズムは非現実的なファンタジーであり、帝国主義と共犯するものであるとして見なされる傾向が強いからである。このような見方は、エドワード・W.サイードの影響で様々な学問に普及したと言われているが、これに対してエドガーは、このような考えはエキゾチズムの一部分に過ぎず、エキゾチズムは異文化交流の1つの要因として、良いとも悪いとも言えないものである、と反論する[エドガー 2005: 162-163]。確かに、人種差別や帝国主義のプロパガンダにエキゾチズムの概念が利用されるという見方もあるが、彼の見解は異文化理解の出発点としてエキゾチズムを語るものである。その主張は音楽的領域に限って繰り広げられているが、本論文においては、中立的な立場からエキゾチズムの概念を規定しているという意味で、彼の解釈を一般論に落とし、文化的領域全般に応用する形で論を進めていきたい。

エドガーは、エキゾチズムとは、特定の受容者に「“外国”の概念を表象し、その表象に楽しい気持ちを連想させる」ものであると定義している[エドガー 2005: 163]。それは、“外国”を表象する事物と、その表象によって“外国”を連想させられる概念や気持ちとの心理的つながりを意味する。すなわちエキゾチズムとは、“外国”を意味する事物そのものを指すというよりも、その事物を“外国”のものとして「楽しい」などといった明るさに特化した印象を抱く意識との結びつきのことを表す。エキゾチズムは事物に潜在するものではなく、人の意識に「“外国”らしさ」として認識されることによって、初めて成り立つものだと言えるだろう。

さて、ここで「外国」という概念が登場するにあたって、必然的にその対極として「自

国」の存在が意識されることが考えられる。「自国」とはすなわちエキゾチズムを意識する者にとってエキゾチックではない空間を意味する、自身の日常生活空間と考えることができる。そこで、エキゾチズムとは認識の上においてどのような位置付けにあるのかということ を明らかにしておくことが必要であろう。エキゾチズムが人の意識の中でどのように認識され、そのメカニズムはどのようなものであるのか。エドガーによる定義を図式化し、それをもとに解説を加えていきたい。彼によるエキゾチズムの定義を図で表すと、次のようになる。(図-1)

図-1

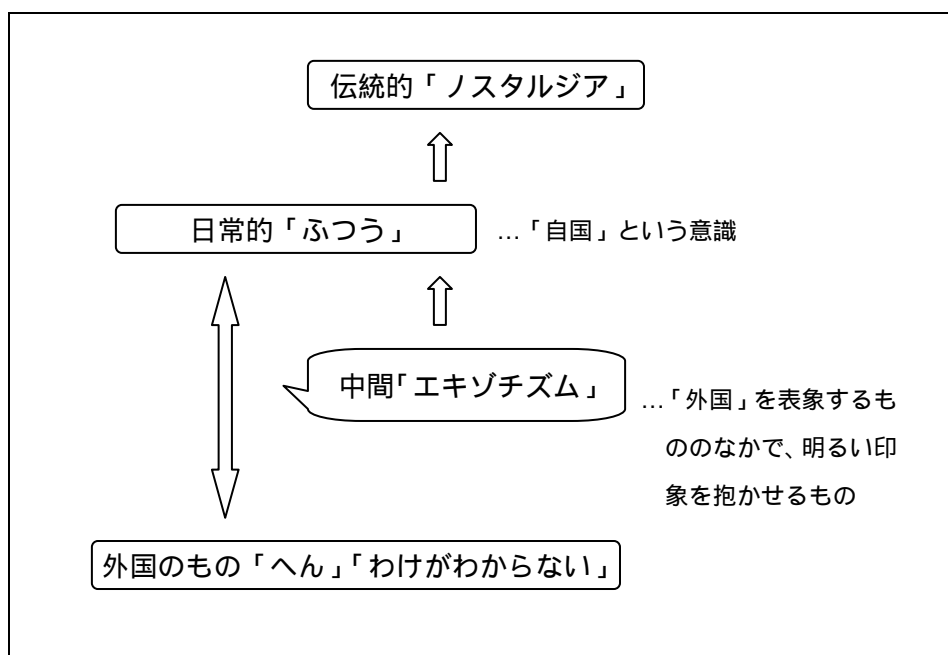


図-1では新出の概念や言葉もいくつか登場しているが、これから順に説明を加えていきたい。前提として「自国」の存在が必要となるエキゾチズムへの意識は、図のように、日常的な事物を「ふつう」として捉えるまなざしが出発点となると考えられる。自身の生活空間にありふれた事物を「ふつう」としたとき、その対極に位置付けられるのが、外国・異国の事物に対する「へん」「わけがわからない」といった印象である。これは、日常とは一切切り離された空間にあるものに対し、理解不能であるという認識が与えられたものを言う。

エキゾチズムはこの二者の間にある、「理解不能でもなく日常的でもないもの」に対する意識のことを指す。いわばグレーゾーンにあるエキゾチズムは、各人の意識によって位置付けを与えられるものであるため、どこに線引きを加えるかの判断は難しい。エドガーの言葉を借りれば、エキゾチックなものとは単なる「異国のもの」ではなく、「異国を魅力的に思い浮かばせるもの」として感受され得るものである[エドガー 2005: 164]。

エキゾチズムという概念の存在は普遍的であるが、何をエキゾチズムと捉えるかの線引きは常に流動的である。エキゾチックなものには、外国の事物が受容される過程のなかで、年月を経て日常空間に溶け込み、慣れ親しまれていくという現象が往々にして見られる。これは「エキゾチズムの普通化」と言われる現象である。例えば、現在「漢字」や「洋服」と言っても、それらを「中国の字」や「西洋の服」として改めて意識することは少ない。これは、これらの事物が現在では日常的なものとして認識されていることによるものである。もともとエキゾチズムとして捉えられていた事物が、異国的であるという側面における魅力を喪失した時、それは日常のものとして受容されたことを意味し、このような現象が起きると言えるだろう。つまり、エキゾチズムは普通化することによって、「ふつう」へと位置付けを変えることになるのである。

更に、もともと「ふつう」と捉えられていたものに、“伝統的である”という価値観が付与されたものを「ノスタルジア」という。日常そのものが年月を経て変化していくなかで、以前日常的とされていた事物に歴史的価値が備わり、新たな魅力を創出するという形である。ここでも例を出すと、例えば「着物」は、明治～大正時代頃までは日本人に馴染みの深い日常的な服装であったが、洋服が普及したことにより、着物は“日本らしさ”を象徴するものとして、特に意識されるようになった。そうした結果、着物は日本の伝統性を強調するノスタルジアとしての魅力を持つことになったのである。また、このプロセスでは同時に、「洋服」がエキゾチックなものから日常的なものへと位置付けを変えていく動きが起こっている。すなわち、エキゾチックなものが日常へと変化していくことにより、その反動で、それまで日常的であったものが伝統的事物としての価値を見出され、ノスタルジアへと変化していくという、2つの位置付けの変容が同時進行で行われているということが言える。このように、エキゾチズムは「ふつう」へ、「ふつう」はノスタルジアへ、という変遷を辿って形を変えるものであることから、ノスタルジアも時間的に離れたエキゾチズムの一種として捉えることができる。それは、エキゾチズムが「ふつう」なものとは空間的な距離を伴う異質性であると考えられるのに対し、ノスタルジアが「ふつう」とは時間的な距離をおくことによって伝統性としての魅力を創出するというふうに捉えられるからである。エキゾチズムが空間的・地理的に離れた事物への憧憬であるとするれば、ノスタルジアはその伝統性が魅力となっている点で、時間的に離れた事物への憧憬である。そうした意味で、「エキゾチズム」という言葉には2つの意味付けが存在すると言える。すなわち、広義のエキゾチズムの中に、狭義のエキゾチズムとノスタルジアが内包されているということになる。

このように、エキゾチズムを取り巻く概念は、「ふつう」を基準に、以上のようなメカニズムをとる。では、こうした概念を、沖縄を取り巻く事象に当てはめて考えるとどのように議論が展開され得るのだろうか。

1.2 沖縄の特殊性とエキゾチズムの再定義

前節でエドガーの定義するエキゾチズムの概念を説明したことを受けて、ここでは沖縄を特殊なものとして知らしめている特徴を挙げながら、その内容とエキゾチズムの概念とを結びつけて考えたい。沖縄とエキゾチズムを結びつけて考察するということは、沖縄にエキゾチズムと捉えられ得る、日常的「ふつう」とは一線を隔した事物が存在するという仮説が前提としてあることを意味する。沖縄が日本の一地域であるにもかかわらず、特殊なものとしてまなざされることには、どのような理由があるのだろうか。それは沖縄の持つ特徴が、他の地域では見ることのできない独自性を持っているからに他ならない。では、どのような側面が沖縄という存在そのものを特殊たらしめているのだろうか。沖縄の特殊性を表象する特徴として、大城（2005）が端的にまとめたものが次である。

亜熱帯のサンゴ礁の離島県 琉球王国に象徴される独自の歴史 現代に受け継がれた琉球王朝文化の伝統 沖縄戦の体験と平和思想 アメリカ統治体験と現在の基地問題
--

[大城 2005: 178]

これら から までの特徴をカテゴリー付けしていくと、 は自然・気候、 及び は歴史、 は文化、 は政治・経済、 というようになる。これらがあらゆるジャンルを網羅して沖縄という存在の特殊性を印象付ける役割を担っており、またその特徴は潜在的である。では、これらの特徴がエキゾチズムの概念とどのように関係してくるのだろうか。エキゾチズムとは沖縄の特徴のこういった側面において浮き彫りにされてくるのか。

前節でエキゾチズムの概念について定義を示した際、「異国を魅力的に思い浮かばせるもの」、また「“外国”の概念を表象し、その表象に楽しい気持ちを連想させるもの」と述べた。しかしながら、沖縄は実際には外国・異国ではなく、位置付けとしては日本の一地域である。そのため、日本の内部にありながらにして異国性が見出されるという現象を、より沖縄という地域の特徴に特化して説明を加えていく必要がある。そしてそれは、沖縄の特殊性に合わせてエキゾチズムの概念の捉え直しを図るものでもある。なぜ、沖縄は日本国内の地域でありながら、異国性に根ざしたエキゾチズムを表象する空間として語られていくのだろうか。

エキゾチズムには広義の意味と狭義の意味があるということを前節で述べた。そして広義のエキゾチズムの中に、狭義のエキゾチズムとともにノスタルジアの概念が含まれるということも並べて説明した。エドガー（2005）は、このノスタルジアの部分について、これを「国内エキゾチズム」とも言い換えている。「国内エキゾチズム」という言葉であるが、

これに関しては「エキゾチズム」という語自体が「異国を魅力的に思い浮かばせる」という意味を内包しており、それを「国内」という言葉と組み合わせることは一見矛盾することのように思われる。また、沖縄が日本「国内」であるということと、そこに見出されるのが異国性に根ざされた「エキゾチズム」であるということも、表現上誤解を生みやすいと考えられる。ここで改めて、沖縄の特殊性とエキゾチズムの概念との関係性を明示しておく必要があるだろう。国内エキゾチズムについて、エドガーは次のように述べている。

エキゾチズムの受容や普通化によって以前に普通であったものが特別視され、しばしば「伝統的」などと呼ばれノスタルジアとしての価値を持つようになる。ここでいう「ノスタルジア」とは自分の国や文化の「昔」の姿や「純粹」なイメージへの憧れであり、地理的よりも時間的に離れたと想像する「異国」に対するエキゾチズムの一種である。そう考えれば外国からのエキゾチズムが大量に受容されると、それに対照するエキゾチズム（ノスタルジア）が生まれることになる。[エドガー 2005: 164-165]

前節の最後で、エキゾチズムは空間的に離れたものへの憧憬であるのに対し、ノスタルジアは時間的に離れたものへの憧憬であると述べた。そのことの詳細な説明は次節でも述べるが、これについて端的に説明されているのが上記の引用であろう。すなわち、ノスタルジアとは、時間的に離れたものに対する「距離感」によってかもし出されている。自分の国や文化について、そこに「昔らしさ」や「純粹さ」を見出し憧れの対象とする。それは、エキゾチズムのように、日常空間の絶対的外部にあるものとは異なり、自身の内部に源を持つものである。かつて確かに存在していたが、年月を経ていつの間にか日常から失われていったものに対する郷愁。それは、時間的に離れたものへの一種の「違和感」であり、それが憧憬のまなざしを向けられる対象となっているという形である。そのため、事物そのものの異国性における「異質性」を問うエキゾチズムとは、対象となる客体の位置付けが異なるのである。エキゾチズムはこのようにノスタルジアとの比較の上において考えられると、空間的に離れたものへの憧憬であると同時に、そこに求められるものは自身の内部には存在し得なかったものへの関心・好奇心なのであると言える。

このような解釈を加えると、エキゾチズムやノスタルジアのあり方が、単に「外国（異国）」・「国内（自国）」という単位では括れなくなってくる。国というものは確かに枠組みとして明確であるが、エキゾチズムとノスタルジアの位置付けの違いは、距離感として国よりももっとミクロでもありマクロでもある、複雑さを伴ってくる可能性がある。しかし、そのように国という単位を取り払って考えた時、エキゾチズムと沖縄との関連性が自ずと見えてくるとも言えるであろう。なぜなら沖縄のあり方が、「日本の中の異国」という矛盾した表現で表されている現状があるからである。国単位で見たときには日本内部に組み込まれる沖縄という個体が、エキゾチズムとして名指した時にその特殊性に裏付けられる形で、新たな距離感を持ってまなざされるのである。

とはいえ、沖縄の特殊な面を「異国性」と表現することには確かに裏付けとなる背景も存在する。沖縄の特殊性を表象する特徴として挙げた5項目についての具体的な考察は後に行うが、この5項目が特徴として沖縄に潜在するということの歴史性に目を向ければ、沖縄の「異国性」という表現にも納得ができる。すなわちそれは、沖縄が明治時代における琉球処分までの間、琉球王国という別国家としての体裁を執ってきたという事実に起因する歴史性である。ここで琉球王国の歴史について詳細な言及をすることは控えるが、要点はその文化や民俗性が、日本とは別国家の歴史の内に、生まれ成熟してきたということである。そしてまた、特徴の ・ に挙げたような近現代の中に見られる特殊性でさえ、本来別国家であった、という事実に理由付けられると言える。沖縄が太平洋戦争において日本唯一の地上戦場となったということ、その後アメリカの統治下に置かれ米軍基地が現在も多く存在するということは、単純に日本本土と離れた島嶼地域であったという偶然から起こったことではない。「異国」という体裁のもつ政治性が根底にあったということも可能性として大いに考えられると言える。この政治性などに関する具体的な検討は続く章から引き継ぐとして、ここで言えることは、沖縄は現在、形式としては日本国内の一地域であるが、そこに潜在する特殊性は日本本土にとっては「異国性」としてまなざされるに値する歴史性を、性格として持っているということである。だから、沖縄の特殊性を名指すのに「異国」という概念はやはり必要となってくるものであり、それがノスタルジアとの比較において考えられる、エキゾチズムの要素となってくるということが言える。

これまでの議論を踏まえ、ここで改めてエキゾチズムの定義の見直しを図りたい。私が考えるエキゾチズムとノスタルジアの定義は以下のようである。

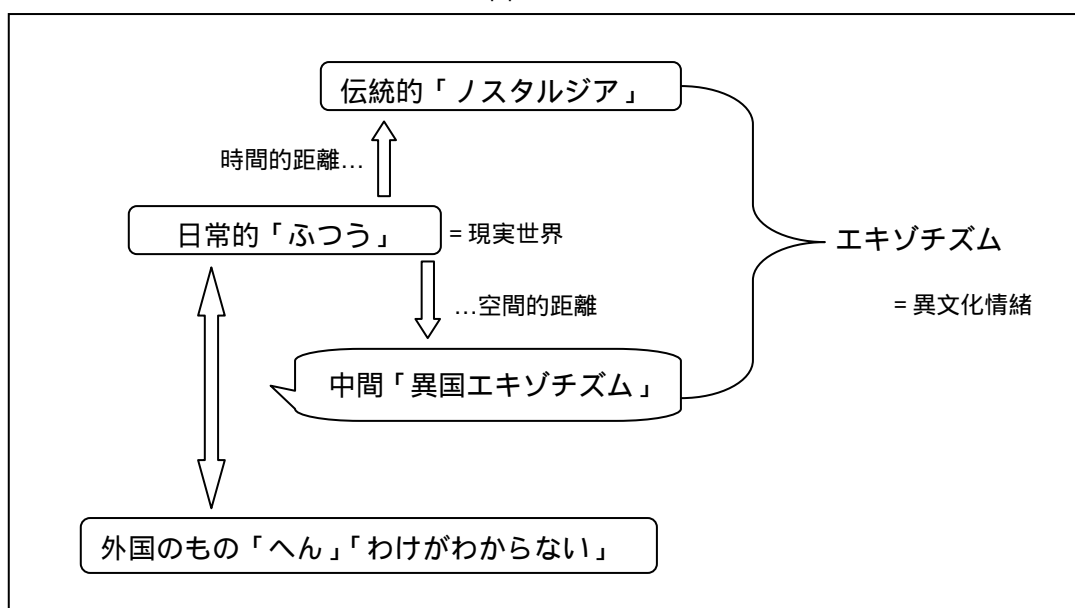
<p>エキゾチズム = 異文化情緒</p> <ul style="list-style-type: none">・ 異国エキゾチズム：空間的に離れたものへの憧憬。日常の外部に存在するものの異質性を表象する。・ ノスタルジア：時間的に離れたものへの憧憬。経験の内部から喪失されたものへの郷愁を表象する。
--

エキゾチズムは、広義において狭義のエキゾチズムとノスタルジアを含む。しかしここで広義のエキゾチズムと狭義のエキゾチズムの混乱が起きないように、狭義のエキゾチズムに関しては、異国性が前提となることから「異国エキゾチズム」と名付けた。異国エキゾチズムは、エキゾチズムの中でも特に異国文化に対するエキゾチズムを言う。また、これに对照するのが「ノスタルジア」である。これは、異国エキゾチズムに見られるような異国性は持ち合わせていないが、日常とは距離のあるものへの憧憬という点で、大きくエキゾチズムの中に括ることができる。

異国エキゾチズムとノスタルジアを包括するエキゾチズムの概念は、「異国」ということに特化せず、日常世界から離れたものへの情緒という意味で、「異文化情緒」とイコールで結ばれるものとする。ここでなぜ「異国」の読み替えが「異文化」であるかという、そこに感じ取られるものが「情緒（その事物に接したときに感受される、特有の趣きや味わい）」であるからである。そうした意識を起こさせるものとして端的に挙げることができるのが、文化的領域なのである。さらに、そうした「異文化情緒」という表現を受けて、大枠である「エキゾチズム」は、「“現実と異なる存在”としての概念を表象し、その表象に楽しい気持ちを連想させるもの」、ならびにエキゾチックなものとは、「異文化を魅力的に思い浮かばせるもの」として感受され得るものであると再定義する。すなわち、「異なる存在」として指し示す際に狭義のエキゾチズム（新しい定義においては「異国エキゾチズム」となるもの）とノスタルジアを結ぶ際の限界となっていた「国」という構成単位を広義のエキゾチズムからは排除した。

この定義において、異国エキゾチズムとノスタルジアとの違いは、日常世界（エドガーの定義において、「ふつう」と名指されたもの）からの距離がどのような部分に見出されるのかということである。すなわちその距離の時空間における違いである。異国エキゾチズムは、「異国」という言葉が示すように、空間的（地理的）に日常世界からは一線を隔したものである。対してノスタルジアは、自身の経験の内部に記憶されたようなものについて抱かれる郷愁を意味する。それはすなわち、日常と「異質」ではないものの、既に日常から失われて過去のものとなってしまったという意味で、現実の日常世界とは距離を置くものである。ここで言われる距離とは、時間的なものを指す。ここまでの再定義を図示したものが、図-2である。

図-2



このように、エキゾチズムの概念の定義を、エドガーのそれを基盤に置きながら、沖縄という地域の特殊性を鑑みたときにそれに適用できる形としてここに再定義した。本節で定義し直したエキゾチズムと、異国エキゾチズム・ノスタルジアの概念を用いて、今後の議論を進めていきたいと思う。そこでまず、沖縄エキゾチズムとして、その特殊性を表象する特徴として本節冒頭に挙げた大城（2005）のものを元に、次節から検討を行いたいと思う。

1.3 沖縄の異国性を表象する3つの要因

前節で再定義として示したように、広義のエキゾチズムとは、異文化のものとして特殊性として感受されたものが、「魅力的」「楽しい」などといったプラスの印象、いわば「明るさ」として受容された時に起こる情緒およびエキゾチックなものと情緒との心理的つながりのことを指すと言える。では、前節で挙げた大城（2005）の示す異国性を表象する5つの特徴のうち、明るさとして捉えることができるのはどれかと考えると、・・・の3つであると考えられる。「亜熱帯のサンゴ礁の離島県」は、日本で唯一の亜熱帯性気候に恵まれたサンゴ礁を醸成する美しい海や、沖縄ならではのさとうきびやパイナップルといった特産品にその特徴が象徴されている。これは観光リゾート空間としての沖縄の存在を一番に裏付ける、観光の目玉とでも言えるような大きな素材として知られていると言えるだろう。また、「現在に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」は、歌や舞踊などの伝統芸能や、豚を多く使用したりゴーヤーなどの特殊な食材を用いるなどした独自性のある食文化や、紅型染めや琉球ガラスなどに代表される伝統工芸などに象徴されている。非常に多岐にわたる沖縄の伝統文化は、本来日本本土とは別国家としての体裁をとってきた事実を背景として受け継がれてきたものであり、工芸品などに関しては土産物としての人気も高く、これも観光地としての1つの武器となっている。そして、「琉球王国に象徴される独自の歴史」とは、が沖縄の特殊性を表象する特徴として沖縄という空間に潜在していることの所以であり、歴史的背景要因として考えることができる。

沖縄が日本の一地域であるにも関わらず、日本の他の地域と比較しても特殊な存在としての位置付けを与えられているのは、歴史上は沖縄は別国家であったという事実と、そのことに裏付けされた文化的側面において、その内容が日本で自国の歴史として周知されているものからは一線を隔したものだからである。すなわち、ここで・・・と、沖縄エキゾチズムを示す「明るさ」として呈示したものは、すべて「異国エキゾチズム」の部類に属するということが分かる。異国エキゾチズムに印象付けられるものとは、理解不能の部類よりも日常空間において「ふつう」とされているものに近く、またその異国性を魅力として“想起させる”ことができるものであるから、それは何らかの形で個人の意識の内にイメージを形成することが可能なものであると言って良い。そして、そのイメージとは

個人の意識内における異国に関するイデオロギーとほぼ同様であると言える。イデオロギーと異国エキゾチズムの関連性については、エドガー(2005)も言及している通りである。異国に関するイデオロギーとは、人々が異国に関して抱く知的観念形態のことである。これについてエドガーは、「イデオロギーの風土は(異国)エキゾチズムの発展を形成し、推進し、または障害になったりすることがよくある」と述べている[エドガー 2005: 166]。そしてその例示として、彼は次のように事例を挙げて説明している。

例えば明治政府は「文明開化」というイデオロギーに基づいた政策で西洋の音楽を積極的に取り入れて、音楽教育や軍楽隊などを通じて西洋音楽を普及させると同時に、西洋音楽が文明的なものだという概念も普及させた。その結果日本人の耳も価値観も西洋音楽に傾き始め、音楽とその概念も徐々に魅力的なものになっていった。……(中略)……イデオロギーは(異国)エキゾチズムに様々な影響をもたらすものであるが、逆に(異国)エキゾチズムがイデオロギーに影響を及ぼすこともよくあるだろう。すなわち、ある国に対して(異国)エキゾチズムの魅力を感じると、知的な面でもその国に対して良いイメージを持ちやすくなるとうことである。[エドガー 2005: 166-167]

これを沖縄に当てはめて考えると、次のようになるであろう。すなわち、沖縄の独自性が異国性としての魅力を持つといったような形で、何らかの手段を伴って押し出されると、沖縄の自然風土や伝統文化が普及するにつれ、人々は沖縄という存在そのものに魅力を見出すようになる。その魅力というものは、沖縄の異国エキゾチズムを感受させる効果となる。逆に考えると、異国エキゾチズムが沖縄に見出されることによって、沖縄の特殊性はますます異国らしさを放つようになる。このようなメカニズムである。このように、異国エキゾチズムと異国に関するイデオロギーとは、相互に影響を及ぼし合っていると言えるのである。

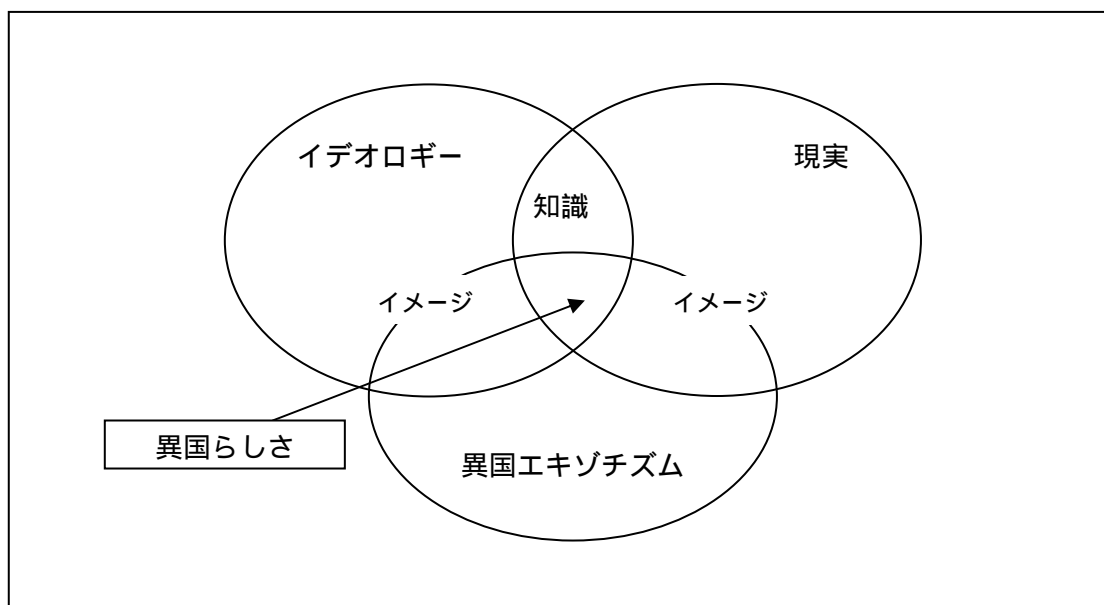
さらに、この両者に3つ目の観点として加えられるのが、現実に基づく知識である。異国エキゾチズムはイメージとして個人の意識内に感受されることが可能であると先に述べたが、イメージを生み出すにはそれに応じた現実に基づく知識が前提条件となる。知識は何らかの手段で人の意識に蓄積されるものであり、これは異国に対するイメージを描き出す要因となる。なぜなら、獲得された知識は何にも先駆けて異国と人の意識とをコネクトする役割を持つからである。その中で生み出されたイメージ像は、イデオロギーとほぼ同等の効果を持って、異国エキゾチズムの創出に影響すると言える。そのため、知識がどこから舞い込み、それによってどのようなイメージ像が形作られるかは、異国エキゾチズムを語る上で非常に重要な問題となってくる。イメージは個々の意識の中で肥大化していくため、もし蓄積された知識が現実に沿っていない場合、間違ったイメージ像から異国エキゾチズムを描き出してしまう可能性があるからである。

エキゾチズムの制作者は実際の国の「本物らしさ」をこめた表象を作るために、対象国に関する一般

知識（と場合によっては専門知識）をよく活用しており、その知識はある程度現実に基づいていることが多い。[エドガー 2005: 166]

これもエドガーの論文の引用であるが、異国エキゾチズムと現実との関係性を端的に述べていると言える。異国エキゾチズムの形成には現実に基づく知識が関与していると述べたが、現実はいデオロギーの形成にも影響しているだろう。イデオロギーの根本にはイメージが内在し、イメージは異国エキゾチズムを規定する。そして2つの要因を結びつけるイメージはやはり現実から生まれるからである。エドガーの挙げた3つの要因は、3つがそれぞれの内部において、イメージを介してつながり合っていると考えることができるであろう。このように、異国エキゾチズム、現実に基づく知識、イデオロギーという3つの要因を伴って、異国は「異国らしさ」として印象され得ると言える（図-3）。

図-3



以上を踏まえて、沖縄に関してイメージを語りなおすということは、特殊性として先に挙げた5項目のような沖縄の潜在的特徴が、異国エキゾチズムの形成にどのような関わり方をしているかということ問い直すことにつながると考える。では、実際に沖縄に向けられるイメージの視線というのはどのようなものなのであろうか。次章より、その検討に入りたい。

第2章 沖縄エキゾチズム “異国エキゾチズム”

2.1 観光リゾートとしてのイメージ(1): 観光業の現在

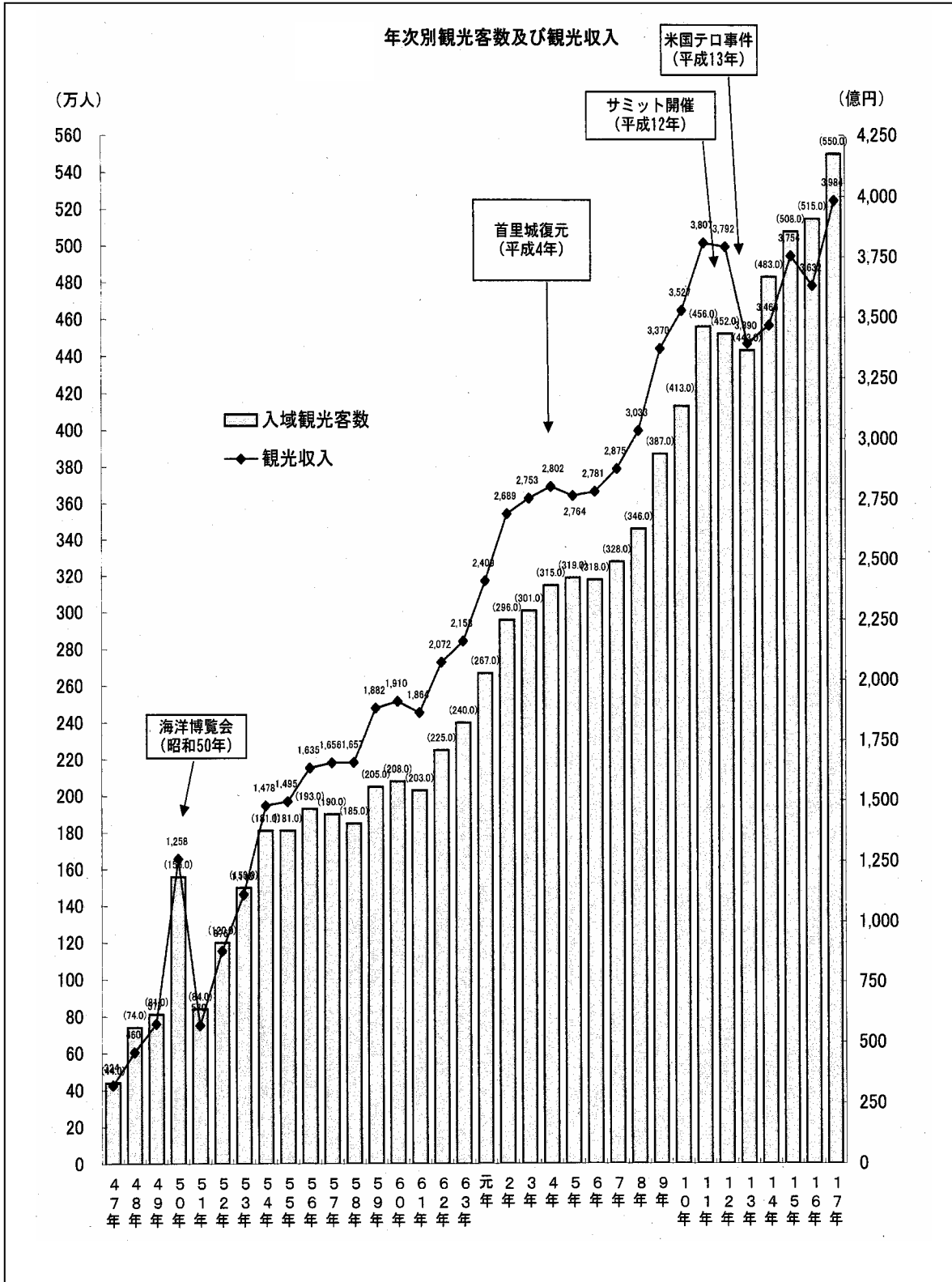
沖縄にまつわるイメージとして、一般的に最も普及しており、また最も長い時間をかけて定着してきたものは観光リゾートとしての沖縄イメージであろう。そこで、沖縄の異国エキゾチズムを形作るものとして、まず本章では第一に観光リゾート地としての沖縄の変遷を述べていきたい。

さて、沖縄の観光リゾートイメージについて考察する上で、まず沖縄観光の現況について触れておこう。ここでは沖縄県庁の観光商工部観光企画課作成の観光統計を参考に検討を進めていく。この統計は、県庁観光商工部によって定期的に集計・発表されているもので、観光客の動向や観光業の施策展開などについてまとめられている。具体的には、沖縄を訪れた観光客の入域数を始め、満足度や、主にどの場所を観光したかなどをデータとして参照することができるため、観光客の沖縄訪問の目的意識等を知ることが可能である。また県の取り組みとして今後どのような観光施策を行うべきかといった方向性も明らかにされていることから、観光業を発展させていくために沖縄のこういった側面を意識的に押し出そうとしているのかといった、沖縄イメージにつながる意図を読み取る手がかりにもなると言えるであろう。

まず、沖縄には年間どの程度の観光客の入域があるのだろうか。2006年に発表された、2005年版の観光要覧から抜粋したグラフが次ページのものである(図-4)。これは1972年の本土復帰から2005年にかけての入域観光客数と観光収入の年次別推移を表したものである。ここで言う「入域観光客数」とは、来県する県外客および外国客の数を指す。これを見ると、1972年に44万人であった入域観光客数は、現在に至るまでほぼ右肩上がりの状況であることが分かる。2005年には550万100人を記録し、前年比+6.7%で過去最高となった。例外として入域者数が落ち込んだのは、沖縄国際海洋博覧会(海洋博)が開催された1975年の翌年と、9.11アメリカ同時多発テロの起きた2001年の、ほぼ2回のみである。最近では修学旅行客も年々増加しており、年間40万人を超えるという。こうした沖縄観光の現状について、観光要覧では次のように見解がなされている。

平成17年の入域観光客数は、沖縄の自然風土、独自の音楽、芸能文化などに引き続き全国の関心が高まり、沖縄人気が続いていることを背景に、航空路線の増便や機材の大型化による提供座席数の拡大、宿泊施設の新設、官民一体となった誘客キャンペーン展開などが奏効し、誘客目標の540万人を10万人上回る、550万100人と、過去最高を記録した。例年になく台風の影響が少なかったことも幸いした。(「平成17年版観光要覧 沖縄観光の現状と施策展開」より)

図-4

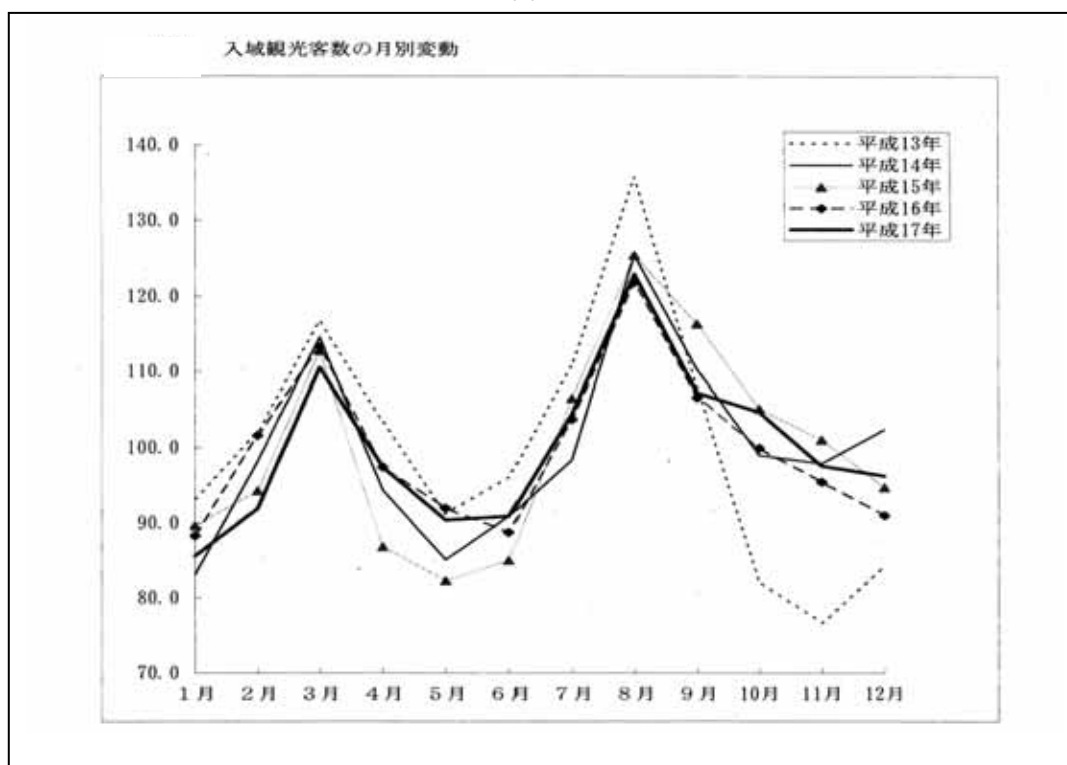


(「2005年版観光要覧」より抜粋)

このように、沖縄観光は県外からの関心の高さと観光キャンペーン展開の相乗効果で、順調にその人気を継続させていることが伺える。また、ここで挙げられている「沖縄の自然風土、独自の音楽、芸能文化」などは、観光業の武器として継続的に発信されているものであると言えるだろう。また、「官民一体となった誘客キャンペーン」という言葉からは、観光業に携わる民間のみならず、県を挙げて観光発展に尽力していることが見てとれる。観光業は県の経済基盤となっているため、県庁側も多くの観光振興策を講じてその発展に向けて取り組んでいる。

また、沖縄への入域観光客数の月別変動を見ると、8月と3月にピークがあり、12～2月、5～6月がボトム期となっていることから、長期休暇の時期に観光客の入域が集中していることが分かる。(図-5)

図-5



(「沖縄県観光振興基本計画」より抜粋)

では、実際にデータとして公表されている、観光客の沖縄旅行内容とはどのようなようか。2005年度のデータでは、次のように発表されている。

- 1位 観光地巡り (72.1%)
- 2位 ショッピング (44.4%)
- 3位 海水浴・マリンレジャー (34.1%)
- 4位 保養・休養 (17.6%)

5位 戦跡地参拝 (16.3%)

図-2のグラフで、沖縄では8月前後の夏季がピーク期になっているにもかかわらず、「海水浴・マリレジャー」が旅行目的の第3位であることは意外にも感じられる。沖縄にとって、夏季シーズンが年間で一番の繁忙期となるのは海を観光の大きな目玉の1つとしているからであると当然のことのように考えてしまうが、予想に反して旅行内容の第1位は観光地巡り、第2位はショッピングとなっている。沖縄の海開きは主に4月~10月頃が一般的であるということもあり、海のオフシーズンにはそうした内容が旅行目的の中心となるため、年間を通すとこうした結果として表れていると考えることもできる。加えて、こうした結果の要因となっているものには、近年の旅行形態の多様化も挙げられるだろう。沖縄旅行はリピーター率が年々増加しており、個人旅行者も増加傾向にあることから、そのニーズも多様化しているのが現状である。それに合わせて、これまでと違う形の沖縄旅行をいかに提案するかは観光業の目下の課題となっている。そこで、県の観光振興計画でも挙げられているのは、「質の高い沖縄観光の実現」と「オフシーズン対策の強化」である。観光資源となり得る地域特性は潜在しているものの、そこにどのような付加価値の高さを実現するかという点が1つであり、また海のオフシーズン対策として、新しい観光目玉の開発・提供によっていかに観光客を取り込むかがもう1つの重要課題となっている。

観光客の旅行目的に関連して、宿泊施設を除いた観光客の立ち寄り先としては、次のものが挙げられている。(2005年度「観光客移動利便性向上対策調査」より)

- 1位 那覇市内・国際通り (54.7%)
- 2位 首里 (42.9%)
- 3位 国営沖縄記念公園 (38.2%)
- 4位 万座毛 (23.8%)
- 5位 ひめゆりの塔 (19.0%)
- 6位 おきなわワールド (15.2%)
- 7位 平和祈念公園 (12.3%)
- 8位 美浜アメリカンビレッジ (9.9%)
- 9位 沖縄アウトレットモール (8.7%)
- 10位 琉球村 (8.5%)

ここで挙がっているものを旅行目的別に分類すると、2位・3位・4位・6位・10位が「1位・観光地巡り」、1位・8位・9位が「2位・ショッピング」、5位・7位が「5位・戦跡地参拝」となっている。ここには海岸・ビーチや宿泊施設の項目がないため、旅行目的の項目全てを網羅してはいないが、挙げられているものに関しては旅行目的をほぼそのまま反映した形となっている。このようにして見ると、観光スポットとして開放されている施設が沖縄には多くあることが分かる。またショッピングに関しても、現地の名産品などの土産物のほか、沖縄は国内で唯一免税品が購入できるということもあり、観光地巡りとともに旅行目的として大きな魅力となっているのは間違いないだろう。県としても、観

光客の増加要因を、「沖縄の音楽、文化、芸能、食材等への全国的な関心の継続」を一番に挙げている。また、立ち寄り先としては5位・7位に挙げられている「戦跡地参拝」であるが、旅行目的として見るとその意識は低いようである。ここで言えることは、旅行目的・立ち寄り先は、必ずしも結果としては一致しないということである。すなわち、たとえその場所に立ち寄っていたとしても、それが旅行目的となるほど大きな要素を持っているかという点で考えると、必ずしもそのままの形で反映してはいかないということである。なぜなら、沖縄への旅行目的とは結果論ではなく、あらかじめ情報を集めた観光客の意識の中で決められているものだからである。中でも旅行の主目的となりやすいのは、県側としても観光資源と捉えているもの、すなわち海や「沖縄の音楽、文化、芸能、食材等」など、沖縄の明るい側面に傾倒する。

観光客の満足度を調査した項目のなかで、沖縄観光の全体的な印象として、96.2%の人々が「満足」と答えているという。うち、何に満足をしたかの上位3項目が、観光地の感想、沖縄らしさ、観光施設の感想、となっているのは興味深い。この3項目にほぼ差はなく、旅行目的・立ち寄り先と照らし合わせてみると、沖縄を訪れる観光客は主に、観光地巡りやショッピング、海水浴・マリンレジャー等を通して、沖縄観光に満足と「沖縄らしさ」を感じていると言っていることができるだろう。目的を達成することを満足と捉えるとすると、目的意識とそれに対応する満足度という項目から、沖縄観光に関して観光客が感じた「沖縄らしさ」というものは、「期待したものが満たされた」ことの満足感であると捉え直すことができるのではないだろうか。すなわち、観光客それぞれの目的に合わせ、沖縄を観光する際に期待していたものというのは、海水浴にしろ観光地巡りにしろ、「沖縄らしさ」の体感にあったと、このデータから推測することができる。

間接的にはあるが、最近の観光統計から見ても、現在の沖縄観光に観光客が求めているものとは、「沖縄らしさ」という名の特殊性であると解釈することが可能であろう。「沖縄らしさ」とは観光客によってあらかじめ抱かれている沖縄に対するイメージの包括である。観光業は県の基幹産業であり、観光業の視点からイメージ像を探ることは沖縄のエキゾチズムを理解する上で大きく占める要素を探ることであると言える。次節で、観光業の発展によって起こった沖縄イメージの誕生とその変遷について述べていきたい。

2.2 観光リゾートとしてのイメージ(2): 観光イメージの誕生と変遷

イメージの誕生を読み解くにあたっては、その最大の要素となる観光業の興りについて述べなければならない。沖縄の観光業が盛んになるにつれて、全国的に浸透していった沖縄イメージとはどのようなものだったのだろうか。沖縄が戦後観光リゾートとしての地位を確固たるものとしていったことの歴史の変遷を述べていきたい。

沖縄が太平洋戦争において日本で唯一の地上戦場となったことは周知の事実であるが、

それ以来沖縄は本土復帰を迎えるまでアメリカの施政権下にあったため、日本本土の住民にとっては「外国」とされ、渡航にはパスポートやビザが必要であった。戦後 20 年来、外貨政策のため観光目的の海外旅行が日本では認められていなかったが、1959 年 6 月、日本政府は他の外国に先駆け沖縄渡航の制限を緩和し、翌年には県外から戦後初の訪問団 86 名が渡航した。訪問団の主目的は「沖縄戦没者の慰霊」としてビザ申請にも明記され、4 泊 5 日の日程で那覇 1 泊、名護 1 泊、那覇 2 泊というスケジュールの中、本島南部戦跡巡りやパイナップル畑訪問が行われた。この時沖縄訪問に必要な費用は 1 人あたり 6 万円で、当時のサラリーマンの平均月給が 2 万円であったことから、参加は高所得者に限られた。しかしながらこの沖縄訪問の成功は後の沖縄観光に大きな影響を与えることとなり、ここで辿られたルートはその後のモデルコースとなっていく。60 年代の沖縄観光は、パックスツアーの充実が進むなか、戦跡参拝と舶来品ショッピングが目的の中心となっていった。この時期の日本では、高度経済成長の中で国内観光がブームとなり、そうした流れの中で 60 年代、砂糖・パイナップルと並び観光は沖縄の三大産業の 1 つとして定着していったのである。

沖縄県庁では、こうした観光地としての沖縄の発展をどのように見ているのか。2005 年版観光統計に記載された歴史的概要は次のようである。

- ・ 復帰前は慰霊訪問団が中心
- ・ 本土復帰後、美しい海を主な観光資源として大きく発展
 復帰の年の観光客数 44 万人 → 平成 17 年 550 万人
- ・ 昭和 50 年 沖縄国際海洋博覧会
- ・ 昭和 52 年～ 団体包括割引運賃、航空会社の沖縄キャンペーン開始
- ・ 平成 7 年頃まで、国内景気や円相場の動向に影響されながら増加
- ・ 平成 8 年頃から、航空運賃の自由化やパックスツアーの低価格化が進み、急激に増加
- ・ 平成 12 年 九州沖縄サミット
- ・ 平成 13 年 NHK「ちゅらさん」放映、沖縄人気のはしりに
 ★9.11米同時多発テロの影響により大きな打撃
- ・ 平成 14 年～ 沖縄人気、観光客数は順調に回復、過去最高を更新中
 観光収入の回復は遅れている

ここでの県庁観光商工部の見解としては、復帰前の状況は一言で「復帰前は慰霊訪問団が中心」とまとめられているが、先に述べた通り、設備的には未熟であるものの、戦跡参拝の一方で同時に現在人気観光地として定着するに至る、その萌芽は復帰以前からも見ることができるのである。つまり、沖縄の観光業は、本土復帰を契機として発展を見せたのは事実であるが、観光地としての役割を与えられたのは復帰より以前である。

沖縄はこのように、復帰以前からも日本本土からは観光地としての視線を注がれていた

と言える。本土復帰という出来事を境に、それが確たるものとなっていくにはどのような要因があったのであろうか。この問いに関して多田治は、「見せる・見られる」存在としての意識の誕生を語る（多田 2004）。パイナップルやさとうきび畑、青い海に戦跡など、観光資源となり得る素材は元来多く沖縄に存在していた。しかしながらそれらは、観光地としての県外部からのまなざしを意識した形で存在してはいなかった。沖縄の特殊性は、文化や自然に多く潜在していたが、それは「見る・見られる」対象ではなく、素材としてそのまま生活の中に溶け込み、いわば“生きられていた”のである。

沖縄県民の生活に溶け込んでいた素材が、観光のための資源として県外部すなわち本土に向けて発信されるようになったのは70年代に入ってからである。それというのは本土復帰が1972年に決定したことによって、より本土の目線の届くところに沖縄が位置付けられていったことに端を発する。その中で沖縄の本土における役割は「観光地」と設定され、県内で“生きられていた”潜在的な特殊性が、徐々に規格化され「展示的価値」を帯びてくるのである[多田 2004: 139]。そのプロセスに効果的に働いたのはメディアによる宣伝であったが、それに先立ち、どのような経過で沖縄における潜在的な特殊性が「見る・見られる」ための特殊性へと変わっていったのかについて考えたい。ここでは、設備等のハード面における変化の経緯について記述する。

実際に沖縄に国土開発の波が押し寄せるのは、1969年11月に沖縄返還が決定した前後と、1970年1月の通商産業省による沖縄国際海洋博覧会構想をきっかけとする。当時、60年代前半から、日本本土では全国総合開発計画・新全国総合開発計画に則り、国土全体を開発する動きがあった。首都圏・近畿・中部・北海道・東北・北陸・中国・四国・九州の9ブロックに日本本土を分割し、経済成長推進のために工業化や交通・通信網の整備が図られた。沖縄も本土復帰が決定してからは、日本の一地域として「列島改造」計画の一環に組み込まれていった。

しかし沖縄の開発に取りかかるにあたり、本土では当時、急速な国土開発の見返りとして起こった数々の公害が問題視されていた。そのため沖縄への開発のコンセプトには、「自然の景観を損なわない」ということが明示された。とりわけ自然の美しさの開発の可能性を見出された沖縄にとって、「自然の景観を損なわない」ことは必須条件であったと言える。沖縄復帰決定の前後から本土政財界によって沖縄の経済開発が構想され始め、インフラの整備、工業化、観光開発が方向性として固まった。そのようにして沖縄開発の議論が高まるなかで、沖縄国際海洋博覧会、通称「海洋博」の誘致が提案され、ここに海洋博を一つの目標とした観光開発が目指された。開発の主導権は本土の大手資本が握る形で進出してくる。具体的には、沖縄本島に関しては北部・中部・南部にゾーニングし、それぞれの特色を観光と結びつけて県外部に向けて「見られる」対象として素材を客体化していくプロセスがなされた。その前段階として、海洋博の開催地には本島北部に位置する本部半島が選ばれ、その開催地決定を受け、沖縄振興開発計画においても、海洋博を機会に本部半島に形成されるリゾート・ゾーンを核とする本部半島を拠点とした北部圏のリゾート開発を

方向付けることが明記された。ここで、「リゾート・ゾーン」「リゾート開発」という言葉が登場することから分かるように、沖縄は、「青い空、青い海」という、県民にとっては生活空間である「日常」の場であったものを観光資源として生かすという観点での開発が目指されていったのである。ここに「亜熱帯の観光リゾート」としてのイメージ誕生の端緒があると言えるだろう。「亜熱帯」を強調するということは、単にリゾートイメージを作り出すのみならず、その先に沖縄の異国性を強調するという効果を持つ。そして、「青い海・青い空」に代表される沖縄の特性が「異国エキゾチズム」として、明るさに限って視線が注がれるようになったとき、それは意図されたものであったのかという点も問題になってくる。意図して作り出された異国エキゾチズムとは、沖縄という空間を本土目線から見て「異国」として見えるように仕向ける戦略性があったことの表れに他ならず、それはすなわち、沖縄に異国エキゾチズムを見出させることに何らかの効果を期待する考えがあったと捉えられるからである。

本土復帰と、その直後に計画された海洋博との2つのイベントが重なり合うようにして沖縄の観光化は進められていった。本土復帰は開発へ向けてのきっかけであって、海洋博がその手段であると考えれば、観光リゾートイメージの誕生にあたって、海洋博にはどのような意図があったかを読み解く必要が出てくるであろう。では実際に、海洋博の開催に際する意図はどういったものであったのだろうか。海洋博の総合テーマは、「海 その望ましい未来」である。より詳細を語ったものとして、海洋博基本理念の全文を引用したい。

沖縄国際海洋博覧会理念（全文）

はてしなくひろがる宇宙空間の一角に、白雲をまわって青く輝く地球は、全人類の共同の運命をのせて飛びつづける宇宙船である。その地球は、“水惑星”の異名が示唆するように、3分の2が海でおおわれている。そして海は、すべての生命の発生のふるさとであり、わたくしたち人類をはぐくむ母である。

海の幸、山の幸という古い表現がある。このことは、わたくしたちの祖先が海を資源の宝庫とし、それによってその恵みに感謝してきたことを教えている。また人類社会は、遠い地域との往来、民族の移動、文化の発達、物資の交流によって、めざましい発展をとげてきたが、それは海洋に航行の道が開かれたからにほかならない。このように、海をはなれて人類の歴史を語ることはできないが、人口の膨張と欲望の多様化に伴い、海洋の利用と開発はますます必要となり、人類の海への依存度はいっそう深まるばかりである。そして、海にはまた多くの可能性と魅力が内蔵されている。

海洋科学は、最近100年の間に、おどろくべき海の実態を明らかにし、その構造と変化の跡を教えてくれたが、海中にはなお多くの未知のなぞが秘められている。とくにその大部分をしめる広大な深海は、冷たい常闇と重圧にさえぎられて、ある意味では、月よりも遠い存在である。しかし、人類は海底に眠る資源にあこがれ、その開発と海洋空間の利用をめざして、飛躍的に進歩発達した科学技術を動員してこれらの障害の克服に取り組んでいる。

海は陸地に比べれば、はるかに広大ではあるが、その海も有限の空間であり、かつて無尽蔵と考えら

れていた海洋資源にも、おのずから限度のあることを忘れてはならない。自然に育ったものを捕獲するだけでなく、みずから育ててこれを採る栽培漁業への転換の必要が提唱されているのも、このためである。なお、青い衣をまとい、光る太陽のもと、あのように輝きと美しさを誇ってきた母なる海も、ひたむきな産業の開発に伴い、その固有の浄化作用の限度をこえて漸次に汚染され、病める海にかわろうとしている。

人類はいまやこの危機に目覚め、深く反省し、新たな観点から英知を結集して、明らかにして豊かな海を再現する必要に迫られている。それには、平和的な国際協力のもとに、海洋の望ましい未来を求めて、環境の保全と改善にふさわしい開発の方途を見いだすことが必要である。

ともあれ、海と人間との対話をとおして、自然との協調をはかり、最大限に海洋のめぐみを楽しむことによって、人間の真の幸福をもたらす新しい海洋文化の樹立を指向して、この沖縄国際海洋博覧会を開くのである。海の望ましい未来像の探求は、人類の当面する共通の課題であり、それがこの博覧会のめざす目標でもある。

沖縄は、黒潮の流れにうかび、古代から民族の文化交流の中継地としての役割を果たしてきたが、さんさんたる亜熱帯圏の陽光のもと、いまなお汚れを知らないさんごの海にかこまれている。この海を舞台に、世界の人々があい集い、この祭典をとおして理解と愛を深め、感激とよろこびをともにすることが、わたくしたちの心からの願いである。

沖縄における海洋博は、基本理念全文を通して、文字通り沖縄の海に焦点をしばってあり、さかんに「海と人間との共生」を訴えている。第1段落から第2段落にかけては、一般論的事実を述べることで、海洋博理念への共感を呼び込む効果となっていると言える。全体を通しては、海の尊さを語りかけると同時に、海洋資源や栽培漁業などという言葉を挙げ、「海洋の利用と開発」の必要を述べることによって、沖縄の海を資源としてまなざす視線を明らかにしていると言える。とりわけ第4段落の「海も有限の空間であり、……海洋資源にも、おのずから限度のあることを忘れてはならない。……輝きと美しさを誇ってきた母なる海も、ひたむきな産業の開発に伴い、……漸次に汚染され、病める海にかわろうとしている。」とは、全国総合開発計画に則り日本本土で産業化を一気に推し進めた結果引き起こされた、当時の深刻な工業汚染を省みる形で、その反省として盛り込んだ文章であると考えられる。沖縄の本土復帰以降の国土開発は「自然の景観を損なわない」ということがコンセプトとされたことと既述したが、まさにこの文章はそのことを象徴的に示していると言えるだろう。また、本土を挙げての国土開発に沖縄が組み込まれたことを明らかにすることで、本土復帰を印象付け、沖縄が日本の一部となった事実を改めて内外に向けて発信する意図を伴っていたのではないであろうか。もちろん、そのことが実際に日本国内に認識付けられたかどうかは別問題である。それは海洋博の反省点を考察することで見てくるので後述したい。

さらに、基本理念本文の各所に注目していきたい。ここでは“沖縄らしさ”の表現とともとれるキーワードが多数登場する。「黒潮」「亜熱帯」「さんごの海」など、沖縄の海の特徴

を印象付ける言葉を並べる部分では“亜熱帯の海”という観点から、また、「民族の文化交流の中継地としての役割」という部分では“世界各国の特色を織り交ぜた文化”という観点から、沖縄の異国エキゾチズムを印象的に表現しているように捉えることができる。やはりこれも、観光リゾートとしての設定のもとに開発を進めるなかで、ステレオタイプのイメージをそのまま発信することで、誘客を有利に進めるための装置になっていたと言えるであろう。さらに第6段落から最終段落にかけては、海洋博の開催と沖縄の海の展望とを結びつけて、「海の望ましい未来像の探求」を示唆している。こうして海洋博の開催を正当化することによって、沖縄について「海」を中心とした開発を行うこと自体を正当化する意図があったと捉えることができる。海洋博の開催は日本内外に沖縄の変化の展望を注目させるきっかけとなり、その後の沖縄イメージ形成に影響力を及ぼしたことは言うまでもない。

さて、海洋博の開催地に本部半島が決定したと同時に、沖縄の振興開発のため、県は本土政府に次のような要請をした。

本島南部には水産センターを設け、開発の遅れた水産業の推進を図る。

本島中部には国際海洋会館・国際会議場を設置し、国際交流の場とする。

宮古諸島地域には栽培漁業ゾーンを設置し、養殖基地としての立地条件を生かす。

八重山諸島と久米島には学術研究センターを設置し、貴重な自然環境を生かす。

慶良間諸島には海洋性レクリエーションセンターを設置する。[多田 2004:86]

要請の内容はさておき、ここで、諸地域の特色を客体化し「見られる」ものへと変貌させていくプロセスが踏まれようとしていることが、上述の通り分かる。各地域にイメージの枠をあらかじめ形作り、それに当てはまるように開発を推し進めていくという、空間のテーマ化が図られている。

結果的に海洋博自体は、当初目標 450 万人とされた入場者数を 100 万人下回る、348 万人の入場にとどまった。海洋博を沖縄の開発に向けての筋道として、沖縄県民にとって生活するための空間を観光資源として加工していく行程がなされたわけであるが、海洋博そのものに予測されていたほどの経済的効果は上がり、図-4で挙げたとおり、観光客の入域数も翌年大幅に減少した。翌年のリゾートホテルの稼働率は 20%を下回り、転廃業者も続出した。とはいえ、海洋博を除外すれば、1974年から1976年にかけては観光入域数はむしろ微増している。しかしながら海洋博開催に合わせて、県内では大規模に観光インフラが立ち上げられたため、その後の観光客の激減は県民にも動揺を与え、ポスト海洋博を危惧する意識が広がった。そうした海洋博不況の深刻さから、当時は経済的観点で海洋博の失敗を嘆く語りが多くなされていたようである。しかしこれは経済効果としては期待外れの結果であったとしても、文化的観点で考えると、その影響力は確かなものであったと多田(2004)は述べる。それは海洋博こそが、以後の観光立県・沖縄の基盤を形作り、方向付けていく契機となったからに他ならない。多田は海洋博のもたらした影響について、次のように言及している。

海洋博直後の状況はまさに、お祭りのな非日常が、日常化されていくプロセスである。社会学者デュルケムの視点を借りれば、祭りは社会を活性化し、新たに方向づける機能を持つ。明らかに海洋博の前と後では、沖縄の観光産業や人々の意識は、大きく変容していた。海洋博という聖なる祭りの濃密な期間が、その後の観光沖縄の俗なる日常を産み出し、新たに方向付けていった。この非日常から日常へ、
聖 から 俗 へ、モードを飛び越える際に感じられた落差こそが、海洋博の「後遺症」として知覚された。そう感じる側も、すでに海洋博が築き上げた、観光沖縄の枠組みの内部にいたわけである。[多田 2004: 150-151]

海洋博の影響として多田が指摘しているのは、海洋博後の不況を危惧する県民自身に、既に沖縄の観光リゾートとしての役割付けが認識し身体化していたということである。イメージの効果は県外のみならず、県民にまで影響を及ぼしていたのである。

では、日本の一部として、その中で「観光リゾート」という役割が与えられたとすると、沖縄の本土復帰によって沖縄の位置付けは認識上も日本の一地域として浸透していったと言えるのだろうか。海洋博の開催に際して、沖縄の本土復帰を国内外に印象付けるという意図も、その基本理念に暗示されるものの1つとして挙げた。そのことによって、「沖縄は日本の内部である」という意識を植え付ける効果を期待したのではないだろうかとも先に述べた。しかし実際は、海洋博を軸として執り行われた観光開発によって誕生した沖縄イメージとは、「日本の内部」としての沖縄ではなく、むしろその異国性をより強調する結果となっていたと考えられる。沖縄における異国エキゾチズムの構築にも関係してくる異国性の強調と観光イメージとの結びつきについて次節で述べるとともに、そのことに関連して観光開発の弊害という観点からの批判的見解を紹介しながら考察を続けていきたい。

2.3 観光リゾートとしてのイメージ(3): 開発への批判的視点とイメージの考察

観光リゾートイメージは、沖縄にまつわるイメージ像の中にどのような形で異国性を強調していったのか。また、そこから生まれる異国エキゾチズムとはどういったものであったのか。観光開発は沖縄のインフラ整備を進めたものの、様々な弊害も生んでいる。その事実と批判的見解について述べつつ、異国エキゾチズムの要因となる観光リゾートイメージについて顧み、考察を加えていきたいと思う。

本土復帰を契機として、まずは沖縄を日本の一地域として内外に認識付けるために、形から本土の列島改造計画に組み込んでいく意志を明らかにすることで、内実も日本の一部として開発を推し進めていくきっかけとした。その内容とは、主に海の美しさを全面に押し出すことで沖縄のイメージを構築し、生活空間として県民に“生きられていた”亜熱帯の海という素材を、リゾートにあるべきものとしてふさわしい展示的価値を持つ観光資源

へと読み替え作り変えていくものであった。そうした開発推進の軸イベントとして開催が決定された海洋博に付随して、沖縄各地域に対してはそれぞれテーマが割り当てられ、それに基づいた新たな空間作りを産業開発という観点から推し進める計画が県側から要請された。海洋博という一大イベントを中心とした、沖縄全土を挙げた改造・開発の計画はこのような形をもって動き出そうとしていた。そして、その開発の方向性とは、沖縄の現状に根ざしたものというよりも、県外すなわち本土の開発主体により与えられたイメージに支配されていたと言える。前節で挙げた、海洋博開催地の決定にともなって県側（当時は琉球政府）から政府に要請された内容というのは、本土の開発主体のイメージする沖縄像を県自ら作り上げるための働きかけであったと考えられるだろう。そうすることによって県が期待したものは、沖縄という空間の近代化であったからである。まず初めに観光地としての役割が用意され、亜熱帯の気候、青い海、特色ある伝統文化などといった沖縄の特殊性に、「見せる・見られる」客体として成り立たせるための操作が加えられ加工されていく。その結果は、リゾートホテルや各種テーマパークの建設、ビーチの人工的整備、小売を中心とした零細企業の濫立といった部分に象徴的に表れている。

このように、その土地の潜在的な素材を生かしながらそれを産業として成り立たせるという方針自体は、経済の自立化・活性化という面で考えると一般的なことであり、一見批判の余地はないように思われる。沖縄に限らず、こうした方針は大型の観光地から小さな村興し・町興しに至るまで、現に日本各地で執られている。問題は、果たして観光地としてのその将来に自立の展望が見出せるかということであろう。言い換えれば、観光地として大成することの利潤が、県外部と県内部で相互的であるかどうかということが重要だと考えるのである。沖縄に関して言うと、海を主体とした観光開発が、本当に沖縄の本質に根ざしていて、本土資本の手を離れたとしても県経済が自立していけるのかということである。

沖縄は、海洋博で多くの入域観光客を見込んだことから、インフラの整備が急速に進められたため、結果的に建設業は発達した。しかしながら、経済基盤の確立という点では、復帰から35年が経過した今日でも足場が整っていない状況であり、残念ながら産業開発による県経済の自立や相互的な利潤というところには達していないと言える。それはすなわち、産業基盤作りの発端としての観光開発に何らかの問題があったと考えるのが妥当である。では、開発の進め方にはどのような問題があったのだろうか。

研究者の間で一様に言われている開発の推進にあたっての問題点、それは、開発が本土目線で行われ、沖縄特有の事情に配慮されていなかったという点である。いくつか、そのことについて言及しているものを引用したい。

「本土との格差是正」「国民的標準」というとき、沖縄振計*は明らかに、沖縄に一定の尺度を持ち込んでいる。沖縄や県民が到達すべき標準点があり、本土や他の国民はすでに到達している、とする暗黙の見方である。これこそ、沖縄における開発のエピステーメーの作用だ。外在的に設定された基準が無条

件に良いとされ、そこに到達していない 沖縄 は「低開発地域」として、数量的に測定される。そして、開発 の正当さが承認される。

こうした 開発 の知は、一見政治イデオロギーに関与せず、純粋に技術的・経済的な、生活や産業の基盤作りを行うように思える。しかし、開発 はそれ自体、政治性を帯びた幻想である。この幻想は、インフラや経済効果という物質的な結果に直結して、現実のなかに根を張っていく。それによって、社会を新しい一定の方向へと形作っていく。沖縄計は、復帰後の沖縄に 開発 の幻想を持ち込み、目指すべき「標準」へと沖縄社会を走らせ、型にはめ込んでいくような、知 の権力装置として作動していたのである[多田 2004: 45]。 (「沖縄計*」……沖縄振興開発計画。)

復帰時にはまだ豊かであった沖縄の自然、サンゴ礁、川、野山、イノリの漁場は、その後の25年間に「整備」や「開発」の何において、強奪され荒廃させられた。豊かな自然の中での貧困が、開発して金持ちになるより高潔だというのではない。それはただ「本土並み」を追求した結果であり、また本土の基準と方法を、気候風土や環境条件の異なる沖縄にそのまま持ち込んだ結果だということが問題なのである。

このような無理な開発を続け、本土並みを追及した結果いったい何が得られたのであろう。復帰後25年しても沖縄には発展する製造業は少なく、失業問題は遅々として進んでいない。また...(中略)...これまでの開発は環境に多大な負担を与え、持続不可能というだけでなく、自然環境の破壊に社会構造の改悪を伴っていた[マコーマック・敷田 2000: 244-245]。

復帰後は沖縄振興開発特別措置法に基づいて三次にわたる沖縄振興開発計画がつけられた。第一次計画は、本土との格差是正のため、優れた地域特性を生かすことによって自立的発展の基礎条件を整備することが計画目標に掲げられた。...(中略)...第二次計画では臨海型の大規模工業の表現はないものの、新規工業の開発導入や臨空港産業の検討が述べられ、第三次計画でも組立型工業や先端技術関連産業の積極的誘致活動や臨空港産業の立地促進が述べられている。第一次計画では自立的発展の基礎条件の整備が目標であったが、第二次計画では、自立的発展への新しい段階にきているがその基礎条件は確立されていないと述べられ、第三次計画では自立的発展の基礎条件の整備は十分でないとして述べられている。なぜ自立的発展に進んでいないのか。それは、振興開発計画が沖縄という地域の実態に合わせた開発計画ではなかったからである[高原 2000: 106]。

当時の日本本土では、「列島改造」がうたわれ国土開発が進んでいた背景があるため、沖縄においてもこの開発の動きを波及的にあてはめる形で推進がなされたものと考えられる。しかし、当然ながら、沖縄は本土とは気候風土も違えば、複雑な歴史的背景のもとに成り立つ社会状況も本土のそれとは大きく異なる。沖縄と本土との決定的な違いとして挙げられるのは、米軍基地の有無である。1950年、日本本土からの安価な基地建設資材と労働力の確保ために、アメリカ政府は1ドル=120B円の単一為替設定に踏み切った。その政策は、一方で基地建設に安い資材と豊富な労働力を動員し、他方で県住民は本土から安い生活物

資を手に入れ、また同時に日本本土側にとっては外貨獲得に貢献するという相互利潤を得ていた。しかしながら、この経済政策は、長期的な目線で見るとき、製造業等の産業の育成を困難にし、また基地依存・輸入依存の経済体質を定着させてしまう要因ともなった。

72年の復帰後、三次にわたる沖縄振興開発計画が策定されたが、上述の通り、これは本土の開発計画の後追いになっていた。これは、「本土並み」という言葉が盛んにさげばれ、経済水準・社会資本の水準を日本本土のレベルに持ち上げることに最も重点をおいた結果である。前章でも触れたが、海洋博開催の都合もあり、インフラの整備は本土並みの目標としていた水準まで割合とスムーズに進んだようである。また、この時海洋博での多数の入域観光客を見込んで、本土資本がリゾートホテルの建設ラッシュに湧いた。そのため沖縄のリゾートホテルは80%以上が県外の所有である。海洋博を契機に、沖縄の観光業の将来性に注目が集まり、観光関連産業が沖縄では飛躍的に発展した。現在、小売業・サービス業といった第三次産業が沖縄経済の大きな柱になっていることは、この時代から殆ど変化を見ていないのである。

観光業に尽力した結果、「見せる・見られる」客体としての沖縄が次々と形を成していく。リゾートホテルに隣接するプライベートビーチなどは良い例で、本来の自然海岸や森林郡を切り崩したり埋め立てるなどして建設されたホテルに、人口の自然海岸をビーチとして整備するといったことが実際に行われている。しかしながら、外部から沖縄をまなざす視線は、あくまで観光リゾートとしての沖縄を期待しているのであり、その部分では、リゾートを建設する立場とそれを享受する者との間で双方に満足を得ているといえる。観光地としての沖縄を享受する観光客は例えばガイドブック、写真集、テレビや雑誌などを通して、沖縄に一定のイメージを抱いて訪問する。そしてそのイメージをイメージ通りに追体験し、自身をイメージの主演としてその空間に身を置くことで満足感を得るのである。すなわち、「観光」というものを仲立ちとして、実情より先に抱かれたイメージを持った観光客が、観光リゾートとしてイメージそのままに「作り出された」沖縄を体感するとき、その双方向的な満足によって、演出された異国エキゾチズムの沖縄は完成を見ると言える。

しかしここで、この「双方向的満足」の外部に放られてしまう立場の人々がいる。それは沖縄を生活空間とする沖縄県民である。自身の生活空間が観光リゾートとしてのイメージを向けられる一方で、主に米軍基地の存在を発端とした数多くの問題の影響を被っている状態にあるのが沖縄県民の立場だ。もちろん、県民の中には、小売業で生計を立てたりサービス業に従事するなどして、観光業の恩恵を受けている人々も多数存在することは確かである。しかしながら、沖縄に横たわる数多くの問題は、観光リゾートとしてのイメージの視線を投げかけられることによって、「異文化情緒」ではない部分として県外部からの視線から逃されてしまっていると言える。沖縄という空間に身を置くとき、人は各々の主観で沖縄をまなざす視線を持つことになる。そこには大きな「イメージ」の壁があり、イメージに支配された意識が現実との間を行き来することは非常に困難である。つまり、「沖縄＝観光リゾート」というイメージを抱きながら沖縄をまなざす視線は、そこが県民によ

って“生きられている”土地であるという事実を忘却させ、県民の存在や生活のリアリティなどあたかも存在しないかのように扱ってしまうのである。

観光客が持つ主体的なまなざしの周りをイメージの壁が覆っていて、そこから透かして見る沖縄の姿というものが、現状の問題にフィルターをかけてしまっている状態である。復帰後の開発にあたって「本土並み」という言葉が盛んに用いられたことも、多田が指摘する通り、本土が標準であり、沖縄が低開発地域であるという前提のもとである。そのようにして本土に遅れをとった存在として沖縄を扱うということは、沖縄の特殊性を認めたのではなく、実際は特殊性を本土の基準に合うような形に利用し作り変えただけなのである。そこに素材としての沖縄の原風景が見出せるかと言えば、それは生きられているそのままの形ではなく、本土資本の介入によって加工を余儀なくされた形で存在していると言える。開発の手が加えられることによって沖縄に「亜熱帯のリゾートらしさ」を強調したことは、沖縄の異国性を強調する効果を伴っていた。なぜなら、沖縄がここで与えられたのは、日本の中での“役割”であり、日本の一地域としての生活のリアリティではなかったからである。沖縄に対して向けられる観光リゾートイメージが生み出すものは、それゆえ異国エキゾチズムであると言えるのである。県民は、本土主体で作られた沖縄イメージと、それをまなざす県外の人々の姿と、体感している生活空間としての沖縄の現状という3つのものを見つめ、自身の位置付けを模索している状況であると言える。異国エキゾチズムとは、楽しさや美しさといった、「明るい面」に特化して描かれる異国らしさに対する好奇心・関心である。そのため観光リゾートイメージと異国エキゾチズムの関係性を考えたときに言えることは、県外部から向けられる視線とは、イメージに彩られて異国性を強調されることによって生じる異国エキゾチズムを見、また異国エキゾチズムをイデオロギー形成の素材とすることでさらに異国性を印象付けるといふ、異国イメージ深化のスパイラルに入っていくと考えられるのである。本土復帰以降の大規模な観光開発によって誕生した沖縄の「観光リゾート」イメージは、沖縄にまつわるイメージ像の中で現在も中心的なイメージ像であるが、そこにはこのような経緯があり、異国エキゾチズムの概念との関係性を問うことで沖縄への視線の政治的効果を再発見することにもつながると言える。

2.4 芸能に長けた地域としてのイメージ(1): 芸能イメージの変遷と現状

沖縄への観光リゾートとしてのエキゾチズムイメージは、沖縄の基幹産業となった観光業を活性化させ、その人気も現在も上昇し続けていることは、統計からも明らかである。しかしながら、沖縄に付与されたイメージ像とは、第1章で挙げた特殊性を表象する特徴の中の「亜熱帯のサンゴ礁の離島県」ととどまらない。沖縄が新たな側面でクローズアップされる、その1つは「芸能に長けた地域」としてのイメージである。

これは、特殊性を表象する特徴の「現在に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」に対応

するものとして捉えることができるだろう。現在、沖縄は芸能の面でメディアに露出する頻度が非常に高い。また、芸能人として「沖縄出身」であることを取り沙汰されることは、他の地域の出身芸能人よりもはるかに際立っており、その影響が、実際その活躍の場も多岐にわたっているという印象がある。もはや沖縄出身ということは一種のブランド的価値を帯びているようにすら感じられる。観光リゾートとしてのイメージがあらかじめ定着していた沖縄に対して、どのようにしてこうした「沖縄＝芸能に長けた地域」といったイメージ像が生まれてきたのだろうか。

エドガー（2005）は、沖縄に関するエキゾチズムに芸能、とりわけ音楽のイメージが入り込んできたのは、喜納昌吉の1976年のヒット曲、「ハイサイおじさん」を先駆とすると言う。彼は沖縄民謡を元にした独特のメロディと沖縄方言（ウチナーグチ）が特徴的なポップスを歌う。また、同時期にデビューし人気を集めたりんけんバンドも、三線や島太鼓といった沖縄独自の楽器を現代楽器と融合させた音楽や、沖縄の伝統衣装に身を包むなどのパフォーマンスが特徴であり、二者の音楽はネーネーズ等と共に「ウチナー・ポップ」とも呼ばれる。彼らの表現方法は確かに「現代に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」と結びつくだらう。しかし、沖縄ではもともと音楽や芸能は風土として盛んであり、むしろ生活空間に古くから根付いているものである。彼らはその中で大きな人気を集めたものの、現在のように沖縄出身ということ自体がブランド化するような、全国レベルでの商業エンターテインメントの起爆剤とはならなかった。そして同時に、沖縄という地域が芸能に特化した地域であるというイメージ認識も、現在のような形での普及はされていなかったと考えられる。ではきっかけはどこにあるのかと考えたときに、私はそれを沖縄アクターズスクールの全国的人気に見るのが妥当であると考ええる。

沖縄アクターズスクールは、1983年に沖縄県那覇市に開校された芸能養成スクールで、これまでに数多くの歌手、モデル、タレントなどを輩出してきた。現在は宜野湾市の沖縄本校と大阪校の2校を持つ。沖縄アクターズスクールの存在を全国に知らしめたのは、SPEED、安室奈美恵、MAXなどといった女性歌手・アイドルユニットが同時期における活躍を見せたことをきっかけと考えてよいであろう。彼女らが先の「ウチナー・ポップ」と一線を隔していた点は、その表現方法が、沖縄出身ということを強調したものではなかったということにある。彼女らが発信した音楽は、ポップスやヒップホップ、ロックなどにジャンル分けのできる、アメリカ文化に起源を持ったいわゆる「今時の音楽」であったのである。

金城（2006）は、沖縄のジャズ・ロックは、米兵の影響で鍛えられており、リズムに強いと述べる。嘉手納基地周辺に並ぶ、米兵を対象とした飲食店・バーなどはアメリカの大衆文化を反映していて、コザ地区は現在でもその中心地である。基地が日常空間に存在することで、常に「戦争」というもののストレスと隣り合わせに生きる沖縄の若者たちは、基地米兵の厳しい耳と戦いながら、ジャズやロックの感覚を鍛えてきた。そのため、主として商業メディアを介してアメリカ音楽を取り入れてきた日本本土のポップスなどは、

土壌が大きく異なるのだと言う。

確かに沖縄アクターズスクールから輩出されたアイドルグループなどは、どちらかと言うとダンスブルで、リズムに強いといった印象がある。しかし重要なのは、本土とは起源の異なる沖縄のジャズやロックなどに触れている県内の若者たちが、本土で「今時の」ポップスというフィールドに置かれて、成果を上げているという事実である。

ちょうどSPEED・安室奈美恵ら歌手・アイドルグループの人气が熟した頃の1999年、財団法人雇用開発推進機構が行った「沖縄の芸能・文化の可能性 芸能・文化の就業及び雇用創出に果たす役割」という調査報告がある。これは文字通り、「沖縄の芸能・文化が『産業』として成立し、雇用を創出・拡大していくためには、どのような条件（環境）整備が必要か」といった目的意識に基づき、「芸能・文化に係わる方々の意識調査をすることで、課題や要望等を把握し今後の本格的な調査への足掛かりとする」ことを目指して行われた調査である。この調査におけるインフォーマントへの質問項目は次のようである。

- (ア) これまでの活動状況について
- (イ) 現在どの程度のビジネスになっているか
- (ウ) ここ数年の沖縄の芸能・文化を取り巻く環境の変化について
- (エ) 職業としての展望はあるか
- (オ) ギャラや給料、待遇等の労働環境
- (カ) 後継者の育成について
- (キ) スタッフ・実演者のプロ意識について
- (ク) 県の戦略的産業化（エンターテインメント）の可能性・展望への見解
- (ケ) 公的支援に対するイメージ
- (コ) 観光業ほか県経済への芸能・文化の貢献、効果について
- (サ) 他、自由意見

インフォーマントはプロデューサー、舞台監督、演出家、俳優、芸人、映画監督など、様々な立場から県内の芸能に携わっている人々から抽出されている。全員に共通する見解として挙げられているのは、「沖縄の芸能・文化の独自性に起因する価値の優位性」である。その独自性は、歴史的背景に裏付けられている特殊性で、第1章で挙げた特徴「琉球王国に象徴される独自の歴史」でも表現されている通りであるが、そうした背景要因から生まれた「現在に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」が、現在県内で芸能活動中の人々にも肯定的に捉えられているということだろう。沖縄のその芸能表現の独自性は現代の表現者自身誇りを持っており、実際それを本土にはない価値の優位性であるとして捉えている。しかしそうした沖縄の伝統芸能をエンターテインメント産業して成立させるには、様々な困難があり多くの課題が投げかけられている。その課題とは大きく分けて2つの観点から分類できるだろう。1つは芸能を志す県民自身に関するミクロな問題、もう一方は市場や

システムなどに関するマクロな問題である。

前者は、沖縄の生活文化に芸能が根付いていることが仇とも言えるようなもので、生活に密着しているからこそ、「職業としての芸能に対する意識、価値、評価を希薄化させている現状がある」という点である。プロ意識といったものが、表舞台で活動する者にも裏方の者にも希薄で、ビジネスと捉える目線に欠けているのだという。そのため、芸能活動を行う者は多いが、その活動範囲も目的意識も沖縄県内において完結してしまっているという現状があり、目線が県外部にまで向いていかない状況なのである。

後者に関しては、沖縄のマーケットの小ささや芸能に対する評価の低さ、宣伝等の流通システムの未発達に問題意識をおくものである。沖縄における芸能活動で大きな制約となっているのが、その需要が県内対応型であるがために、沖縄の小さな市場で行わざるを得ないということである。その上、沖縄の芸能に対する評価の低さに起因する、低い料金設定やギャラ設定の低さが相まって、沖縄における芸能ビジネス成立の阻害因子となっている。また、沖縄の芸能を県外部（日本に限らない）に発信していくために必要なプロデュース機能が欠如しているということも、産業化を妨げる大きな原因と言える。沖縄アクターズスクールは、その成功により沖縄で行われている芸能の資質・可能性をアピールした。しかし、それは「単に沖縄出身の有能な人材が本土の芸能ビジネスの流通機構に乗って売り出されているだけである」と、この調査を統括して真栄平（1999）は述べている。

すなわち、この調査を通じて明らかになった沖縄芸能の産業化にまつわる課題と、先に挙げた沖縄アクターズスクールに始まる沖縄出身芸能人の台頭とを照らし合わせると、現在の沖縄芸能ブームとも取れる現象は、本土とりわけ「東京」を発信源とした「今時」の流れに乗っているに過ぎないということになる。ここで改めてイメージのまなざしという観点に立ち返ると、沖縄が芸能に長けた地域としてのイメージ像を抱かれ、沖縄から音楽などの芸能が発信されることそのものが“沖縄らしさ”となっているのも、東京という流行の発信地にアクターズスクールから発せられた芸能表現がうまく合致したということがきっかけと言える。つまり、まず初めに「沖縄の伝統芸能ありき」ではなく、「東京における流行ありき」なのである。それが良いことか悪いことかは今ここで問題にされるべきことではなく、注視すべきはそうした経緯で説明できる沖縄イメージが、エキゾチズムとして成り立つかどうかということであろう。

これまでの芸能イメージ誕生の概要と変遷を受けて、次節でエキゾチズムの概念と結びつけながら、その現状と課題、さらには芸能イメージから生まれると考えられるエキゾチズムがどのような性質のものであるかについて言及したい。

2.5 芸能に長けた地域としてのイメージ(2): 芸能イメージのメカニズム

私は前節の冒頭部分で、芸能に長けた地域としてのイメージは、特殊性を表象する特徴の「現在に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」に対応するものとして捉えることができる、と述べた。しかし現在の沖縄芸能の人気があるのが、東京における流行に乗ったからであるとしたら、そこには沖縄の特殊性・独自性は反映されていない。「芸能に長けた地域」としてのイメージが生み出す沖縄への情緒は、「異文化を魅力的に思い浮かばせる」エキゾチズムと呼ぶことは果たしてできるのだろうか。

第1章で広義のエキゾチズム及びそれに内包される異国エキゾチズムとノスタルジアの概念についての再定義を述べた。そしてその際、沖縄に潜在する独自性は「異国エキゾチズム」に分類できるということも説明した。第1章の図-2からも明らかなように、異国エキゾチズムとは「へん」「わけがわからない」と「ふつう」との中間に存在する意識である。そのことは自動的に、異国エキゾチズムが意識される際には、「ふつう」と「わけがわからない」への認識が前提ということになる。そしてここで言う「ふつう」とは、沖縄の異国エキゾチズムを考える際には「本土」ないし「東京」を指すことは明らかである。今問題にされている沖縄芸能の形が、東京目線で見たととき「異文化を魅力的に表象するもの」の中でも、沖縄の特殊性を表象する「異国性」を持っているかどうか問われるということだ。

その前段階として、まず現在の「沖縄芸能」の内容について考察しておく必要があるだろう。アクターズスクールの活躍以後、沖縄芸能は現在こういった形で人気を集めているのか。現在沖縄から発信されている芸能は、その表現形態によっていくつかのタイプに分けることができると考えられる。

まず、東京の流行に表現の基盤を置くタイプ。これは前節で既述した通り、いわゆる「今時」という現代性を発信しているものを指す。アクターズスクールはこれにあたり、現在の沖縄芸能ブームのきっかけとなったのもここに分類される芸能人の活躍があったからである。例を挙げると、ORANGE RANGE、Kiroro、HY、DA PUMPなどがそれに当たると言える。

次に、俳優・タレント・芸人など、表現に沖縄の特殊性を必要としないタイプ。音楽に関しては特にアーティスト自身の独自性が反映されてしまう分野であるため、音楽以外の芸能分野で活動する人々がここに分類される。しかし“沖縄らしさ”を表現に必要としないということは、より東京の流通機構に集約されるということを示す。これには仲間由紀恵、ガレッジセール、国仲涼子、山田優などが該当する。

また、沖縄の特殊性を専ら表現するタイプ。これはごく近年になって人気を集めているタイプで、伝統色の強い音楽表現をすることが特徴である。ここに分類される表現者たちは沖縄音楽独自の楽器やゆったりとしたリズム、ウチナーグチを織り交ぜるなどの工夫を表現の中で行うなどしている。彼らの活動は伝統音楽の普及に一役買っているが、特徴

的なのは、その人気に火が点いたのは沖縄芸能ブームが軌道に乗ってからであるということである。この点については後に言及しよう。ここに該当するものは、例えば BEGIN、夏川りみなどである。

さらに、沖縄出身ではないが、沖縄を題材にした作品等で人気を集めているタイプ。音階や歌詞内容、使用する楽器などで“沖縄らしさ”を表現しているものがここに入る。沖縄への関わり方はそれぞれ違うが、担い手が本土の表現者ということで、彼らにとっての「沖縄の音楽は表現の幅を広げるための素材にすぎない」という指摘もある[DeMusik Inter. 2006: 183-184]。その一方で、THE BOOM の「島唄」や、森山良子の「さとうきび畑」などのように、歌詞の内容が平和や戦争体験を綴ったものになっていて、その注目に伴って、本土でそれを耳にする人々に対して新たな沖縄認識を与えられるきっかけになり得ると考えられるようなものもある。

それぞれ表現方法は大きく異なるが、共通して言えることは、の例を除き、メディアに露出される際に「沖縄出身者」ということがクローズアップされていることである。この事実そのものに不思議はないのだが、なぜ、「沖縄出身」ということだけが、日本の他の地域と比べて際立って取沙汰されるのか。それは、良い意味でも悪い意味でも、沖縄が東京にとって特別な存在として見なされているからだとは私は考える。そしてその特別視は、アクターズスクールに始まる沖縄芸能ブームに由来するというよりは、むしろより原点である、観光リゾートイメージに端を発するのではないだろうか。

それというのも、現在のように芸能面で脚光を浴びるまでは、沖縄は一様にリゾート地としてのまなざしを主流に向けられていたという事実がある。そこにプラスされるような形で芸能面でも注目を集めるようになっていったが、イメージの出発点はあくまで「観光リゾートとしての沖縄」という位置にあると言える。それゆえ、沖縄という空間は日本の他の地域に比べ、「東京」にとって外的空間としてまなざされる傾向がもともと強かったということが考えられる。本土で人気を集めている沖縄出身芸能人の活躍の拠点が大体は東京にあるにもかかわらず、そうした認識的距離が強調され続けているのは、先に挙げた多様な芸能表現が1つの要因となっていると捉えることができる。つまり、上で4つのタイプを挙げたうちの、・ は流行の発信地「東京」の存在に基盤を置き、・ は沖縄の特殊性に表現の根本を置くものであるという、表現基盤の二者性が現在の沖縄芸能には存在すると考えられる。前者によって、沖縄芸能は日本の流通内部に身を置かれながら、他方後者によって、沖縄は日本の外部としてのまなざしを受け続ける。しかしながら、沖縄の伝統芸能の普及は、雇用開発推進機構の調査でもその価値の優位性がインフォーマントに共通の見解であったように、それ自体は肯定的に受け取られて然るべきものであるし、沖縄芸能が東京経由の流通システムに組み込まれていくことを嘆く声もある。そのため、二者のどちらが優勢になっても沖縄芸能に関する課題点は据え置かれてしまう。現在、2つの表現基盤が存在することによって日本の内部者と外部者という2つの視点を持つというジレンマを抱えながら、同時にバランスを保っているという状況なのである。これが真

の沖縄芸能の現況と言えよう。

以上のように沖縄芸能の現在を捉え直すと、「沖縄は芸能に長けた地域である」というイメージ像が、どういった意味を持つかが明らかになってくるであろう。沖縄は、芸能文化においてその伝統性を強調する限り、「観光リゾート」イメージに裏付けされた異国らしさを印象付けるイデオロギーを抜け出すことはできない。ここで言うイデオロギーは、異国エキゾチズムとイメージとによって形作られているものである。広義で捉えられるエキゾチズムの概念そのものとしては、「良いとも悪いとも言えないもの」である上、そこで表象されるものも異文化を「魅力的に」印象付けるものであるから、ここで沖縄の芸能が異国エキゾチズムとして感受されることについて否定的になる必要はないかもしれない。芸能に長けた地域という特性がイメージ化されること自体にマイナスの意味合いが含まれているとはいえないし、それは異国エキゾチズムとなる上では魅力として意味付けられているということになるからである。

しかし先に挙げた現代の沖縄芸能の4タイプの分類も、視点が東京にあるということをお忘れてはならない。つまり、沖縄県内では芸能は日常生活に密着した文化であり、担い手も多く存在する。しかしながらその担い手たちの活動のフィールドが県内で完結してしまっているために、地の素材としては「価値の優位性」を持っていたとしても、それを県外にまで発信していくための目標意識やプロデュース機能に欠けているという点がネックとなっている。それゆえ、沖縄から芸能を産業として“売り出す”ためには、どうしても東京の流通機構に含まれざるを得ない。将来的には沖縄に独自のプロデュース能力を養成できるような機関を作るなど、産業化への可能性は様々に模索されていこう。しかし現在の状況で考えると、東京を経由して流行現象となっていく「今時」の中に沖縄の芸能が回収されていくことは、沖縄の芸能が東京を標準としたサイクルに侵食されていくことを意味する。それが進んだとき、沖縄は確かに他の日本の地域と同様なまなざしを受けるようになるかもしれない。しかし同時に、沖縄芸能の独自性を失うことにつながりかねないのである。

現在の沖縄には、伝統性・独自性を強調した形の沖縄芸能と、「今時」であり沖縄らしさが特別必要とされないものとの2つの形式があるということは既述した。ではその二者は同時発生的なのだろうか。その答えは、表現タイプ別に現代の沖縄芸能を4つに分けたうちの沖縄の特殊性を専ら表現するタイプ、の箇所に示した文章によって否定される。すなわち、「彼らの活動は伝統音楽の普及に一役買っているが、特徴的なのは、その人気に火が点いたのは沖縄芸能ブームが軌道に乗ってからである」という点によって、沖縄芸能の伝統性・独自性が現在本土でも受け入れられているのは、東京を基盤として流行したアクターズスクールの人気が先にあったことを発端とすると言えるからである。だから、近年沖縄芸能がその伝統性においても本土で人気を集めているのは、その前段階として沖縄芸能の現代性が人気を集めたからなのである。

だから、「沖縄は、芸能文化においてその伝統性を強調する限り、“観光リゾート”イメ

ーに裏付けされた異国らしさを印象付けるイデオロギーを抜け出すことはできない」と先に述べたが、ここで言う「芸能文化の伝統性」とは、東京を基盤とした流通の中に含まれているもので、沖縄の素材ではないのである。観光イメージにプラスされる形で定着した沖縄の芸能イメージはその現代性において人気を集めたが、「沖縄」そのものに対する異国エキゾチズムの意識が観光イメージによって本土の人々に根付いていたため、その意識を経由して、現在は芸能の伝統性というところにも注目が集まるようになった。沖縄は芸能に長けた地域であるというイメージは、そうした流れの中で定着してきたものであると言える。

このように、沖縄芸能の伝統性が異国エキゾチズムと結びつけられるということが実際に起きている。そしてその異国エキゾチズムは観光リゾートイメージを発祥としている点で問題である。芸能イメージは、観光イメージのように本土主導で作り変えられたわけではないと一見捉えてしまいがちであるが、芸能イメージ自体、観光イメージを背景に持つ異国エキゾチズムを前提として生まれたものなのである。観光イメージと芸能イメージとは、こうして異国エキゾチズムという概念を通じて共存関係にあると言える。今後の芸能イメージのあり方としては、既述した「表現基盤の二者性」という観点で考えられよう。現代性を表象する沖縄芸能は、東京に基盤を置かれることで沖縄と本土との認識的距離感を縮めるように作用するが、特殊性を主張することが出来ない。一方伝統性を表象する沖縄芸能は、特殊性を強調することで価値の優位性を主張できるが、沖縄に対する異国エキゾチズムをより浸透させてしまう。それぞれにメリット・デメリットをはらんだ2つの形の芸能が両立しているわけで、このバランスがその他の面における沖縄イメージの影響によってどのように左右されていくかということが、今後注目に値すべきことであろう。またこうした沖縄芸能を産業化させるための具体的策が講じられることで、現在のあり方にあらたな展開が見られる可能性も考えられると言えよう。

第3章 沖縄エキゾチズム “ノスタルジア”

3.1 癒しの島としてのイメージ(1):「癒し」が求められる現代社会

多様化する沖縄イメージの誕生として、芸能に長けた地域としてのイメージの次に挙げられる沖縄の特徴とは、「癒しの島」としての側面である。これは、沖縄の特殊性を表象する特徴「亜熱帯のサンゴ礁の離島県」や「現在に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」に裏付けられる点では観光リゾートイメージや芸能に長けた地域としてのイメージと同様である。しかしここに「癒しの島」という新たな観点を介入させることにより、本土からまなざした沖縄の位置付けそのものを変容させる可能性があるとは私は考えている。「癒しの島」というイメージ像の誕生には、沖縄の特殊性の域にとどまらない、全国的な現象による影響が関係していると言える。観光イメージに始まり、芸能イメージをも定着させてきた沖縄であるが、多様化する沖縄イメージとしての新たな側面である「癒しの島」はいかなる特質を持っており、沖縄にまつわるエキゾチズムにどのような視座を与えているのだろうか。

2001年、NHKで朝の連続テレビ小説『ちゅらさん』が放映された。観光客数の増加にしても現在の沖縄芸能ブームにしても、昨今の沖縄人気の高まりが背景にあることは言うまでもないが、近年その傾向が顕著になっていることに関して、何か起爆剤となったものが存在するのではないだろうかと推測することは当然の考えである。そして研究者の間では、この『ちゅらさん』に現在の“沖縄ブーム”とでも言える現象のきっかけをみる見方が多い。やはり、注目度の高い国営放送で沖縄が題材として取り上げられたことは注目に値する上、何よりこのドラマが高視聴率を獲得した人気ドラマとなり、放送終了後にも続編や総集編などの放映が続いたことも大きいと言える。ここで映し出された沖縄像は新たなイメージの誕生に寄与し、近年の沖縄ブームはこれを走りとするというのが、その概要である。いくつかその見解を引用したい。

NHK朝の連続ドラマ『ちゅらさん』は、2001年4月2日から9月29日まで計156回にわたって放映された。「沖縄らしさ」の記号満載のドラマは、沖縄文化の今を考察する上で多くのことを示唆するものだ。ドラマは小浜島生まれの主人公・古波蔵恵里が上京し、家族や周りの人に支えながら看護婦として成長していく様を描いたものだが、彼女には同時に孤独な都会人たちを癒す役割も与えられている。今や沖縄をめぐる言説で「優しさ」とか「癒し」がキーワードとなった感があるが、それがここでも再生産されているわけだ。ドラマで多用される背景が観光ポスターなどで定番となっている「癒しの島」さながらの風景であることは言うまでもない。そこに描かれているのは、郷愁が惹きつけられる地点として演出を凝らした旧き良き沖縄の原風景とでも言うべきものだ。[田仲 2002: 262]

近年、沖縄が全国的にアピールされ、浸透した契機として、2000年7月の九州・沖縄サミットや首里城2000円札の発行、2001年4～9月のNHK朝の連続テレビ小説『ちゅらさん』の放映（さらに2003年春の『ちゅらさん2』、2004年秋には『ちゅらさん3』が放映予定）が挙げられる。サミット報道や『ちゅらさん』では、沖縄の 青い海 や独特の文化が、ビジュアルな形で強調されていた。こうした報道や描写が沖縄への関心を高め、 青い海 のリゾート、健康食品、泡盛、三線などの人気につながっていく。[多田 2004: 5]

前者は『ちゅらさん』で描かれた沖縄の風景が、癒しのイメージを表象する装置となっていることを指摘している。また、後者は『ちゅらさん』を始めとした沖縄のメディアへの頻出が、沖縄へのイメージをより強く印象付ける作用となり、現在の人気につながっていると述べている。どちらの見解も、やはり近年の沖縄への注目が、それ以前のものとは違った形であるというところにおいて一致していると言える。確かに、近年の沖縄人気は、観光リゾートとしての魅力を一様に謳っていた復帰後のものとは内容を異にするものであろう。それが本論文の問題意識の起点ともなっている。イメージ誕生の時系列としては、これまで挙げた順に「観光リゾート」イメージ 「芸能に長けた地域」イメージ 「癒しの島」イメージとなるわけであるが、これが前の2つのイメージと比べて新しさを持つ理由は何か。私はここに、沖縄にまつわるエキゾチズムの中でも、「ノスタルジア」の意識が起こってきたことを挙げたい。観光イメージと芸能イメージを結びつけるものは「異国エキゾチズム」であるから、その点で癒しの島としての沖縄イメージは、前の2つとは性質を違えるものである。ではその内容とは実際どのようなものなのだろうか。

大方の研究で、現在の沖縄人気は大体2000年以降、メディアへの露出が頻発した時期に端を発するということが言われている。この時期のメディアへの頻出は、内容も語られ方も多様化した点で、それ以前の報道のされ方とは一線を隔していたと言える。観光イメージのところでも述べた通り、前時代の報道表現では、沖縄の異国エキゾチズムを感受させる作用となる、特殊性を“外的”なものとして顕在化するような描かれ方が一般的であった。しかし癒しの島としてのイメージがクローズアップされてから、メディアに登場する沖縄は、「郷愁が惹きつけられる地点として」描かれるようになった。それは、本土の東京という「日常」空間からはどこか逸脱したポイントを持っていることの象徴に他ならない。そこに隠れた日常との距離感は、ノスタルジアの概念で言うところの「時間的な距離感」である。本土と沖縄との距離の質が、異国エキゾチズムの空間的距離ではなく、ノスタルジアの時間的距離として、ここでは想起されることになる。

しかしここでノスタルジアを沖縄の空間に考察する以前に、沖縄人気の着眼点が、なぜ「癒し」という側面であったのかということにまず注意を払う必要があると私は考える。「癒し」を印象付ける装置が『ちゅらさん』で映し出される風景にあったからであるというのは端的な答えだが、それではなぜ、『ちゅらさん』で強調されたのが「癒し」でなくて

はならなかったのか。観光リゾートとしてのイメージが既存していたにもかかわらず、なぜ「癒し」という新しいイメージ像が浮かび上がってきたのか。それを考えるには、沖縄そのものの特殊性にとどまった思考では不十分で、「癒し」が『ちゅらさん』の時期から現在に至るまで受容され続けてきたことの背景要因にまで考えを巡らせる必要があるだろう。沖縄人気は現在のような過熱を見せるより以前から、日本には「癒しブーム」というものが存在した。癒しは一つの文化現象として、一過性のブームに留まることなく語られ続け、現在も「癒し」という言葉を見聞きしない日はないほどである。では一般的に、「癒し」が現在渴望されるのはなぜだろうか。

そもそも「癒し」という言葉が多用されるようになったのはいつ頃からかと考えると、「癒し」という言葉は広辞苑を引いても載っておらず、あるのは「癒す」という動詞のみであることから、比較的言語表現として用いられるようになってのは最近のことであると考えられる。「癒す」の名詞形である「癒し」は、注目度が上がるに従って、地位を獲得し定着していった言葉なのだ。ヒーリングミュージック、アロマセラピー、心のケア、健康食品にサプリメント、「癒し系」タレントなど、様々な分野でキーワードとなっている「癒し」であるが、癒しブームはより以前の「健康ブーム」を起源に持つもので、80年代末頃には目立つ現象となったようである。それ以降10年以上流行であり続けているわけだが、「癒し」に関心が集まる理由として、端的に挙げられるのは「社会」のあり方である。60年代の高度成長で日本経済がいよいよ活気づいていた時代と相反して、バブル崩壊後の不況が続く低迷期に、ストレスフルな社会が浮き彫りとなった。現代社会の個人化、現代人の個人主義の徹底は、対人コミュニケーションを希薄化させ、社会不安のみならず精神的不健康をも引き起こしていったと言える。このような社会の現状について、島園（2002）は次のように述べている。

現代社会ではかつて自明のものであった共同性がたいへん弱いものになっており、個々人は生活空間を支えるべきつながりの欠如に脅かされている。……(中略)……安定したつながりを提供したのは、家族であり職場であり地域共同体であったが、そのいずれもが、今日、不安定になっている。[島園 2002: 19-20]

共同性という、かつては自明であったものの強さが失われた社会では、人々は対人関係におけるつながりの欠如に脅かされている。ここで言うつながりとは、単に人との関係性という意味ではなく、個人にとって生きる上でもっと大きな要素となる、自身の生活の基盤となるような関係性のことを指す。そうした関係性は、これまでは家庭や職場、地域共同体で当たり前のように見出すことができたが、現代社会ではどのコミュニティにおいても心許ない状況にあるという。

「癒し」とは、そのような生活を取り巻く様々なフィールドにおける不安定さが絡み合っただけでスパイラル状となったストレスからの、一時的な逃避として求められたものであると

言える。そして、そうした癒しを求める社会風潮の中に、沖縄の空間から切り取られる風景や伝統といったものが、うまく合致していたと考えられる。とはいえ、「癒し」とは、非常に多くの分野で使用されているキーワードであること、そしてその癒しがどのような性質から現代人に「癒し」として感受されているのかということも、そのものによって様々であるため、一口に括って考えることは難しい。「癒しブーム」の一部として沖縄の存在を位置付けることは確かに可能であるが、沖縄の持つ特性の何が「癒し」として機能しているかについては、やはり沖縄の特殊性を表象する要素に目を向けるより他ないのである。

沖縄という空間に見出された「癒し」とは、どのような特性を持っているのだろうか。「癒し」を求めるまなざしも、これまで考察を加えてきた観光リゾートイメージや芸能イメージと同様に、沖縄に潜在していた素材そのものに照射されるものであることは間違いない。しかし、先に述べたように、それら2つのイメージと異なる点は、「癒しの島」としてイメージ化される沖縄に向けられるのが、観光リゾートや芸能に長けた地域としてのイメージが誘発させる異国エキゾチズムではなく、「ノスタルジア」の意識であると考えられることにある。これは第1章でその概念について定義した通り、日常で「ふつう」と捉えられるものから何らかの“距離”が発生するという共通項によって「広義のエキゾチズム」として括られる部分があるが、その“距離”の内容の違いから、「異国エキゾチズム」と「ノスタルジア」とでは大きく性質が異なる。ここで今一度「ノスタルジア」の概念について振り返るとともに、沖縄にまつわるエキゾチズムのあり方を変容させる「ノスタルジア」の特質は沖縄のどこに見出せるのか、またそのノスタルジックな側面と「癒し」を表象する特性との関係性についても焦点を当てて論じていきたい。「ノスタルジア」というキーワードの中に、沖縄の位置付けを変える大きな要因があると私は考える。

3.2 癒しの島としてのイメージ(2): 沖縄の「癒し」の要素とノスタルジア

沖縄の癒しイメージとノスタルジアとの結びつきを語るにあたって、まずはノスタルジアの概念について詳細な解釈を加えたい。ノスタルジアとは、第1章で示した通り、以前には「ふつう」であったものに、「伝統的」とであるという価値観が付与され、その存在そのものの伝統性が魅力として映し出される現象のことを指す。エキゾチズムとは日常からの距離感から誘発される心理のことを指し示すが、ノスタルジアと異国エキゾチズムが違う点は、その距離感の質の違いである。すなわち、異国エキゾチズムとは空間的に日常から隔絶したものに対して向けられる好奇心・関心であるが、ノスタルジアとは時間的に日常から離れたものに対して抱かれる憧憬の念である。時間的に離れた、とはすなわち、日常を過ごしている「今」に対しての「過去」である。そのため、ノスタルジアで感受される情緒とは、「郷愁」とも言い換えることが可能であろう。

郷愁の対象となるものはしばしば、自国文化の「昔らしさ」や「純粋さ」を象徴するも

の姿である。例えば、琴や三味線の音楽は、江戸時代においては特に「日本」を連想させるものではなかったが、西洋音楽の普及の結果、それらは「邦楽」として区別され、西洋と対象をなす「日本」の魅力を表象するようになった。この場合は、邦楽が「昔の日本」を想像上の場所として象徴付ける装置となり、郷愁の対象としての価値を持ったという意味でノスタルジアを表象した、と言えるのである。

このように考えると、沖縄の空間には「昔の日本」を彷彿とさせるような要素が内在しているというふうに考えられる。そしてその要素が「昔の日本」を想起させる装置として作用することによって、沖縄は特定の要素のみならず、空間そのものがノスタルジアとして意識され得るのである。そこで、昔らしさを印象付けるような沖縄の潜在的要素を、ここでいくつか挙げてみたい。

まず、沖縄の空間が本土と異なる点として、電車がいないということがある。鉄道という鉄道としては、「ゆいレール」と呼ばれるモノレールが2003年に開通したのみで、後にも先にもこの1路線だけしか存在しない。ゆいレールが那覇空港から首里までの約13km27分を結ぶ以外は、本島のどこへ出向くにも交通手段は自動車やバス、タクシーなどしかない。離島ともなれば、一日何往復とない船での渡航が必要となる。日本の他の地域とは一線を隔した「島」としての存在は、定刻に地下鉄が何本も行き交うような「都会の便利さ」とは隔絶されているように感じさせる。

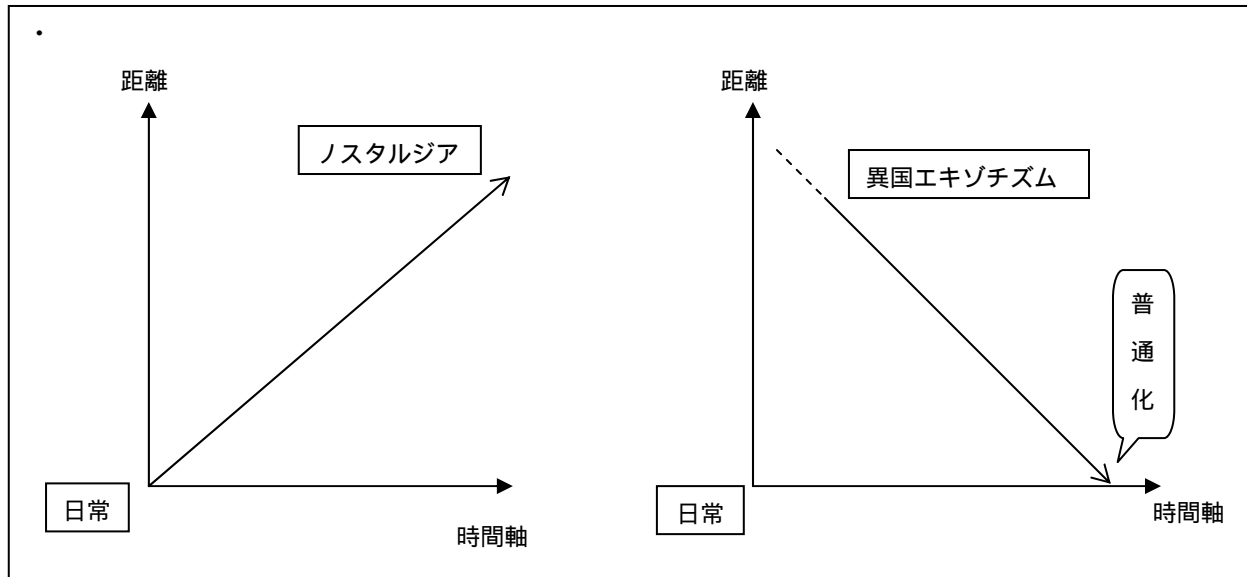
また、高層ビルなどのない沖縄は、那覇市内の国際通りでさえも、一昔前の商店街を思い起こさせるような光景である。それは決してさびれたものではなく、常に多くの人で賑わっているさまは、あたかも「昔の」日本の活気溢れる商店街がそのまま再現されたかのように感じさせる。商店街と言えば、地域を基盤としたコミュニケーションが盛んな場所の代名詞のようであるが、那覇の国際通りもまた、市場と隣接するなど人と人との対話に飢えない場所である。そうした光景は、「人の温かさ・優しさ」を彷彿とさせる効果となって郷愁の対象となっていく。

それに拍車をかけるかのように、那覇市街を抜けると、広がるのは美しい海と自然の景観である。そうした、市街を抜けるとすぐに目に入ってくる景色もまた、「田舎」をイメージさせる装置となるであろう。人ごみにごった返していないのんびりとした風景に、それをまなざす本土という主体は、現実世界には見ることのできない「昔ながら」の風景に思いを馳せるだろう。そして時には、そこに自身の故郷の風景を映し出し、自身の想像の中に描かれる憧れの世界をノスタルジアとして感得するのである。このような特徴を挙げることのできる沖縄の空間は、本土からそれをまなざす人々にとって、実際の距離以上に「なかなか近付けない」といった印象を生み出しているのではないだろうか。さらにその距離とは、時間的なものであると同時に、時間的距離の中に内在する「ふるさと」という場所への空間的距離をも印象付けていることだろう。これは異国エキゾチズムのそれとは異なるもので、ノスタルジアの中に地方の故郷への郷愁が浮かび上がる際に感じ取られるものと考えてよい。

沖縄の空間の中に見出されるノスタルジアの要素は、以上のようなものを代表的とする。さて、こうした要素と「癒し」ブームとの結びつきのなかで、沖縄の「癒しの島」としてのイメージを捉える行程に入っていきたい。

ノスタルジアの概念は、「癒し」ブームに強く関連付けられるものである。それというも、「癒し」が現代社会で渴望される理由として、前節で現実逃避のための想像世界としてのあり方を説明したが、人々はノスタルジックなものに一種の現実逃避を求めているということがある。ノスタルジアはエキゾチズムの一種ではあるが、その想像空間へは時間的に隔絶されているため、距離を近付けることは永久的に不可能であると言える（図-6左）。異国エキゾチズムであれば、それが「普通化」という現象を経ることによって、日常世界にだんだんと近付いてくる可能性がある。異国エキゾチズムは絶えず生まれ受容されていく普遍的現象であるため、普通化もそれに呼応して起こってくるものだからである（図-6右）。ノスタルジアはそれに反して、一度「ノスタルジア」として感知されたものが普通化されることはまずないと言ってよい。たとえ過去から時間を逆行してノスタルジックな事物が現代の生活に舞い戻ってきたとしても、それは「ノスタルジックなもの」としての印象を抜け出ない。第一、過去から事物が抽出されて現代に再現されること自体、癒しブームの高まりのゆえになされることであろう。

図-6



ノスタルジアは日常の過去化とも表現できる。元々は日常的で現実的で当たり前なコト・モノであったにもかかわらず、それそのものの姿に近付くことは永久的にできないジレンマがそこにはある。それどころか、時代を経るにつれて、日常の世界からは遠ざかってしまう一方である。その距離の短縮化の不可能性こそが、ノスタルジックなものへの憧

懐の根幹となるのである。

さらに、ノスタルジアは周辺領域をも凌駕する。すなわちノスタルジアは、その象徴としてまなざされる事物のみならず、事物を内包する時代背景やその時代にまつわる様々なものごとに対しても向けられる。例えば、現存するわらぶき屋根の家を見て、そこに田舎の過去の風景を思い浮かべたとする。するとその風景の中に見出されたノスタルジアは、わらぶき屋根のみならず、例えば田畑やあぜ道、家の中の囲炉裏、家族の団欒の様子など、様々なものを同時に思い起こさせる。そしてその中に過去の自分の姿を想像することで、時代の追体験が試みられるのである。ノスタルジアは、過ぎ去った時代という永遠に戻ることはできない場所に対して、それを思い浮かべる人の想像世界を形成していくものだということが言える。

ではなぜ過去のものに対して癒しが見出されるのか。それは過去を「旧き良き時代」と呼ぶように、昔らしさといったものが一般的に“良いもの”であると解釈されるからであろう。「あの頃はよかった」といったような原点回帰の語りはまさにそのことを象徴している。とりわけ近年は、昔返りの風潮というものが高まっている。そのことは例えば、映画『ALWAYS 三丁目の夕日』が大ヒットしたことなどに象徴的である。この昔返り風潮に特徴的なのは、その時代を知らない若い世代にもその内容が受け入れられているということである。この場合、彼らにとってその内容は経験された過去ではなく、「昔」に対するイデオロギーによって描き出される想像上の過去である。そのため、そこに感じ取られる心理も、若い世代にとっては疑似体験的な郷愁であるということが言えるだろう。しかしここで言えることは、今やノスタルジックなものを見聞きすることによって「癒し」を享受する姿勢というものは、世代を問わず起こってきている現象であるということである。

沖縄もこうした現象の中で、様々な潜在的素材からノスタルジアを描き出している。では、実際に沖縄に向けられている原点回帰の希求、そこでなされる「旧き良き」時代の追体験とは実際どのようなものなのだろうか。

3.3 癒しの島としてのイメージ(3): 沖縄に希求される原点回帰のイメージ

沖縄に見出されるノスタルジアの要素と「癒し」が求められる現代社会の風潮について前節までで述べたところで、次に癒しのイメージとノスタルジアとの関連について論じていきたい。人々が沖縄という空間と対面するにあたってノスタルジアを感じ取るとき、それは沖縄イメージのどのような側面が影響しているのだろうか。

沖縄に向けられるノスタルジアの意識について、エドガーは、「多くの人が『日本人』としてのアイデンティティを探究することによって、アメリカ化された日本の主流文化から離れた地方伝統にインスピレーションを求めたことの表れである」と述べている[エドガー 2005: 180]。戦後、日本ではアメリカ文化が大量に輸入され、それらが次々と普通化されて

いった。日本の主流文化がアメリカナイズされていく動きのなか、反動で日本の伝統文化（当時にとっては日常的な文化）が「ふつう」なものとしての位置付けを逸し、ノスタルジアとしてまなざされるようになっていく。沖縄もそうした動きの中で、日本人としてのアイデンティティを象徴するものの一つとして組み込まれた存在である、というのが彼の主張である。彼はこの議論においては音楽的領域に特化し、喜納昌吉の『ハイサイおじさん』にはじまる沖縄芸能ブームと、青森の津軽三味線ブームとを並べて、両者を「国内エキゾチズム」として示している。彼の言う「国内エキゾチズム」は、概念の中身としては「ノスタルジア」と同義であるが、本論文では「国内エキゾチズム」という言葉は誤解を生む表現として使用しないため、「ノスタルジア」という表現のみを用いるものとする。後者の津軽三味線は、確かに日本の伝統文化として、日本人のアイデンティティの探求心を満たす役割を与えられて受容されたであろう。とりわけ地方伝統というものは、日常的な文化からは時間的のみならず空間的にも距離を置くものであるため、ノスタルジアを表象する代表的な事物と考えることができる。では、前者の沖縄芸能に関してはどうか。前章でも述べたように、沖縄に介在する前提的なイメージは、異国エキゾチズムを強調する観光リゾートとしてのイメージである。第2章5節の後半部で既述の通り、芸能イメージは観光リゾートイメージを発端とした異国エキゾチズムの中から生まれたものであるため、それが表象するものは主に異国性である。そのため、沖縄のポピュラー音楽に日本人としてのアイデンティティの探求を見出すことは難しいだろう。『ハイサイおじさん』のヒットは本土復帰より数年後の1976年であるから、異国エキゾチズムとしての沖縄の位置付けは、現在よりもさらに確固たるものであったと考えられる。

ではなぜ、先程のエドガーの一文をここで引用したか。彼の主張の、続く一文に注目したい。それによれば、「これは、自分が生きている社会から離れたところに『自分』を探し出すため、(異国)エキゾチズムとノスタルジアを混交する現象といえよう[エドガー 2005: 180]」とある。すなわち、地方伝統に日本人としてのアイデンティティについてのインスピレーションを求めるという行為は、自分の生活拠点となる現実・日常的空間から離れたところに「自分」を探し出すことであり、それはしばしば、地理的に離れた「異国エキゾチズム」と時間的に離れた「ノスタルジア」とを混交させる、という意味である。「癒し」を求める社会風潮の発祥と、それを沖縄の空間に見出す主体の存在は、本土ないし東京にある。沖縄は東京と地理的に離れているため、観光リゾートという亜熱帯性気候に裏付けされた異国エキゾチズムの意識に支配されてきたが、これはノスタルジアからは独立した視線であると考えられる。なぜなら、異国エキゾチズムとノスタルジアが、沖縄では「混交」しているのではなく、「共存」していると考えられるからである。

沖縄の特殊性を表象する特徴として第1章2節で挙げたものの中で、エキゾチズムとして捉えられ得る特徴とは、「亜熱帯のサンゴ礁の離島県」と「現在に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」であるということ、本章の冒頭部分で述べた。特に、エドガーが日本人のアイデンティティの本質を見出すための要素として述べたものは、「現在に受け継が

れた琉球王朝文化の伝統」という特徴に集約できるが、これは前節でも述べた通り、リゾートイメージを構築する要素として内在されるもので、異国性を表象するものであるとしてこれまで論じてきた。沖縄をノスタルジックに感じさせるものとは、前節でいくつか実例を取り上げたが、その内容から、「原風景」、「人間の温かさ・優しさ」、「穏やかな時間感覚」などといった言葉で表されるものであって、これは東京の現代社会を象徴するキーワードとは性質的に真逆ともとれるものである。これらが、東京という都会で日常生活を送る人々にとって憧れの対象となるのは、沖縄の空間を表すキーワードが「旧き良き」時代を彷彿とさせるからである。それは例えば「故郷」のような、“普段どこでどのような生活をしていようとも、そして自分がどんな人間であっても必ず受け入れてくれる場所”といったイメージで描かれる癒しの装置として機能すると言える。このようなイメージを思い起こさせるような沖縄の要素は、「癒し」としてまなざされる時、主体自身の内部に蓄積されている過去の風景と重なり合うようにして、逃避の想像世界を形成していく。そして先に述べたように、現在の「昔返り」風潮においては、過去の風景とは必ずしも主体者によって経験されているものとは限らない。過去の風景とそこに関連付けられる時代背景そのものが想像上のものである場合もあるため、「昔」というものに対して、現在作り出されるイメージ像は、かなりイデオロギーに侵食されている。すなわち、経験に知識が先立つという状況が、観光イメージ形成時と同様、ここでも起きているのである。

つまり、「癒し」の要素は沖縄に潜在するものであるとしても、それを「癒し」という言葉で表現するのは県外の他者なのである。本土住民によって感じ取られている「癒し」とは、本土からの目線で描かれたイメージ像の追体験である。「自分の故郷を懐かしむ」、「旧き良き時代に思いを馳せる」といった心理を象徴するものとして、沖縄に見出されるノスタルジアの展開と実例を述べたが、これは主体者のイメージする「癒し空間」という枠の中に、沖縄の風景・光景をあてはめた鋳型としての存在なのである。なぜなら、本土住民は、沖縄の空間の中で実際に生活したわけでもなければ、そのリアリティを知る由もないからである。経験が知識に先立つというのは、その所以である。

エドガーは、「癒し」とエキゾチズム（広義における）との関連を次のように説明する。

「ヒーリング」や「癒し」という概念は、エキゾチズムを商品化する新型イデオロギーだといえるだろう。これまで同様、エキゾチズムは聞き手を楽しい「別世界」に連れて行くものだが、「ヒーリング」音楽の場合その「別世界」は現代日本のストレスから一時的に逃避し癒される場所として思い描かれているといえるだろう。[エドガー 2005: 181]

エドガーがこの議論の内に展開したのは、アジアン・ポップスの異国エキゾチズムがしばしばヒーリングミュージックとして商品化されるといった内容であるが、この主張を沖縄の空間に見出されるノスタルジアに応用して考えると、納得の余地は十分にある。今や沖縄をめぐる言説で、「癒し」というキーワードはなくてはならないものとなった。「癒し」

は現代の日本社会において大きな市場を得るようになってきているため、沖縄の存在も癒しを象徴するツールの一つとして、市場において商品化されていると考えるべきである。沖縄を癒しの空間としてイメージすることは、沖縄を商品として、「癒し」のモデル空間としてのブランドに当てはめて消費するという行為に等しい。「癒し」というキーワードが沖縄に対して普段用いられる際には、「観光リゾート」イメージと並立されるが、そこで表象されるエキゾチズムのあり方は、本土からの視線の位置付けにおける「内部」・「外部」という視点で見たときには両極端である。「癒しの島」としての沖縄イメージは、ノスタルジアとして、本土からまなざされる際に自身の内部にその空間を投影するものである。反して観光リゾートイメージや芸能に長けた地域としてのイメージは、沖縄が形式上は日本にありながら、「外部」であることを強調する効果を持っている。特に観光リゾートイメージに関して言及すれば、日常生活を脱出し距離をおくという点で、「癒し」イメージとは広義のエキゾチズムの概念に定義されている範囲で共通項を持つが、沖縄という、自意識の外部空間に自身を投影するという意味において、ノスタルジアとはその距離のあり方が本質的に異なるのである。同じ「美しい海」を表すにしても、そこに介されるまなざしは、自身の「外部」として空間的距離をおいた位置付けをとられるか、時間的距離という観点から「内部」空間に投影されるかによって、それぞれ内包する意味は異なるものとなり得る。それは、異国エキゾチズムとノスタルジアの本質の違いでもある。そこに求められるものが、異空間にある異質なものへの憧れという外意識か、アイデンティティの探求という内意識かという、出発点の差異がそこにはある。

「癒しブーム」という、東京で作り出された流行現象は、観光リゾートとしてのあり方や沖縄芸能と同じく、県外部から見たイメージに彩られているのであり、沖縄の空間のリアリティがどこにあるのかということが、次の段階として問題になってくる。これまで挙げてきた3つのイメージ像、「観光リゾート」、「芸能に長けた地域」、「癒しの島」という本土目線による規定のうちに、一体どれだけのリアリティが含まれているのだろうか。そして、それらが沖縄を「魅力的に表象する」エキゾチズムであるという前提をここまでの議論で得たとすると、残る沖縄の特殊性を表象する特徴である、「沖縄戦の体験と平和思想」、「アメリカ統治体験と現在の基地問題」の存在余地はどこに見出されるべきなのだろうか。さらに、イメージの視線でまなざされる沖縄と、沖縄の現実とのギャップはどれほどのものなのだろうか。イメージの誕生と変遷、イメージ像から描き出されるエキゾチズムについてここまでの議論を進め、それらが全て本土からの視線によって形作られているものだということが明らかになった。それならば、本土の視線からは抜け落ちてしまう現実というものも、沖縄の空間には存在するはずである。それはどのような作用によって抜け落ちてしまうのか。抜け落ちてしまう沖縄の現実が存在するという事は、どのような問題を生んでいるのだろうか。こうした数々の問題意識をもとに、次章を論じていきたいと思う。

第4章 イメージによるまなざしの功罪

4.1 東京を経由するイメージとリアリティ

第3章までで、エキゾチズムとして享受される3つのイメージ像を、「異国エキゾチズム」と「ノスタルジア」という、エキゾチズムの2つのあり方から考察を行ってきた。第4章からは、この2つを広義のエキゾチズムとして総括し、その概念が沖縄に対する言説として当然のごとく用いられてきたこと自体に問題を提起する。まず1節では、イメージとそれに伴うエキゾチズムの形成のされ方に関して、それが東京を中心とした本土主体で行われているということの作用について、掘り下げて議論を展開していきたい。

「沖縄をまなざす」ということを考えた時に、その主体となるものは2通り考えられる。「内部（沖縄県内からのまなざし）」と「外部（本土ないし東京からのまなざし）」の2つである。これまで前提のように語ってきた「エキゾチズム」であるが、沖縄に「空間的距離感」をおく異国エキゾチズムを見るも、「時間的距離感」をおくノスタルジアを見るも、その決定権は本土の目線にあると言える。はじめに、私はここで「内部」・「外部」という概念や、「沖縄」・「本土（東京）」といった表現の二項対立に、差別的な意図を加えるつもりは全くない。あくまで比較対象として示す際のツールとしてこのような名付け方をするのだということ、あらかじめ断っておく。

さて、日本という1つの国を考えた時に、東京はその中心都市として、あらゆる分野の司令塔的な役割を持つ。政治、経済、商業など多岐にわたるが、中でも形を持たないながら最も影響力の大きなものとして、「メディア」の存在が挙げられる。あらゆる形で張り巡らされる情報ネットワークは、今や国内に留まらず全世界へと広がっている。

沖縄の本土復帰の1972年から今日に至るまでの35年間、情報のあり方は目まぐるしいまでの変革をなした。今や沖縄旅行の手続きが、携帯電話1つで完了してしまう時代である。沖縄のイメージの形が、観光リゾートから芸能、さらには癒し空間へと変容してきたのも、ひとえにメディアのあり方が変化してきたことの影響が非常に大きい。本土復帰もなく、沖縄が観光リゾートとしての役割を模索していた頃、その売り出すポイントというものも年単位のキャンペーンのような形で、本土住民の意識を一定方向に導くような標準的モデルが示されるのが一般的であった。しかし現在では、観光スポットとしての沖縄の立場は確立されていて、2005年版の観光統計からも明らかなようにリピーター率も年々増加していることなどから、多様化するニーズに合わせてより多く、バラエティに富んだ観光企画がなされるようになっている。そして情報提供の手段も、それに合わせて多様化を見せてきている。何度訪れても満足できる観光地として、新たな魅力を提案していくことは、今後の観光業展開の課題となっていくであろう。そうした中で近年新たな方向性として注目されたのが、「癒しの島」としての沖縄イメージであった。そして、「癒し」

をブーム化させた仕掛け役もまた、メディアなのだ。

人々が沖縄を語ろうと試みる時、その語りの内容は、ガイドブックやインターネット、テレビや雑誌などによって、事前にコンタクトされた情報に影響を受けているだろう。その中で、ある程度のイメージ像は自ずと各人の中に形成されていく。本土ないし東京という、沖縄県外からのまなざしは、沖縄の本質に向けられているようでいて、実際はメディアの介入を非常にダイレクトに受けているのである。メディアの操作性とも言えるこの状況は、沖縄にまつわるイメージの形そのものを左右し、どのような側面を印象的に見せるかについての主導権を握っている。そしてそのことは、エキゾチズムの形成にも大きくかかわってくると言えるのだ。

一般に、私たちをとりまく事物を、イメージ像を描くことなしに捉えることは不可能である。事物そのものの性質や、それが表象する時代などについて、常に意識の中には何らかの想像が思い描かれるものだ。それは、その事物や時代が本人にとって経験されたことであれ未経験のことであれ、起こり得る意識である。そこには知識とイデオロギーの影響があるため、たとえ未経験のものであっても、イメージを形成することは可能なのである。このことは、第1章3節で一般論として、また前章で癒しやノスタルジアと結びつけて説明した。沖縄に関して言えば、「沖縄」という言葉に接したとき、瞬間的に頭の中に浮かび上がってくるものがイデオロギー（「沖縄とはこういうものだ」という語り）で、次に浮かび上がってくるものがイメージ（「沖縄と言えば」といった言説でイデオロギーの象徴を述べるもの）なのである。もちろん何が一番沖縄を表象していると感じるかについては各々見解が異なるであろうが、どのようなものであれ、その事物にまつわるリアリティとは、イメージされたそれと実際のそれとの両者に常に存在すると言える。例えば「美しい海」であれば、美しい海としてイメージされるものと、実際に存在する海との両方にリアリティがあると考えられるのである。イメージで語られる部分までもがリアリティとなり得るのはなぜかということについて、多田（2004）は次のように述べている。

そもそもイメージとは実体がないため、とらえどころがないものという印象がある。それにわれわれは、「それはイメージにすぎない。本当の現実とは別のところにある」といった、「イメージ/現実」=「虚像/実像」という、二分法的な発想をしがちだ。確かに、そう考えることが妥当な場面も多い。しかし他方で、現代ではイメージが非常に重要な役割を果たしていることも、政治やマーケティングをはじめ、各分野の常識となっている。イメージは一概に「現実を反するもの」とは限らず、それ自体が現実を構築する力をもっているものである。[多田 2004: 8]

事物の内部には常に、イメージの視線で語られる部分と現実の部分とが存在するものがあるが、イメージは現実と対比されるものとして、しばしば虚像と見なされてしまいがちである。しかしながら、イメージは現実には先立ち、現実を構築する力を持っている。というのは、知識が生み出すイデオロギー、イデオロギーが作り出すイメージは、現実には先回

りしてインプットされ、主体者の意識の中に事実として認識されるような“現実像”を作り出す効力を持っているからである。このような操作がメディアによって行われることによって人為的に作り出される事実のことを「擬似イベント」と言う[多田 2004: 9]。擬似イベントが生まれる際には、現実とイメージとの関係性について、従来考えられるメカニズムとはベクトルの向きが逆になる。すなわち、現実をメディアが報道し、それがイメージ化されるという、通常想像されるようなプロセスではなく、イメージの方が能動的に現実を生み出していくという逆向きの事態が起こるのである。上述したような、たとえ未経験のことであっても意識の中に何らかの想像図を描くことが可能であるというのは、まさにこのメディアなせる「擬似イベント」の作用である。すなわち、人がある事物に関して直接的なコンタクトを取るより前に、メディアが事物の実際と人の意識とを橋渡すのである。そのことによって、事物の現実像に裏付けられた知識がさらに人の意識の内に芽生え、その知識がさらにイデオロギーを生み出すというようなサイクルが生まれるのである。

現在、情報流通の多様化に伴って、イメージも大量に生産されることが可能となった。近年、沖縄に関するイメージに変化が見え、本土からの沖縄への注目度が格段に上がってきたのは、こうしたメディアの多様化が要因となっているのである。また、イメージとは決して虚構ではなく、現実に基づいて形成されていることから、沖縄をめぐる観光・芸能・癒しの3つのイメージ像もまた、これまで現実と照らし合わせてきた通り、全て実在するものに裏付けられている事象であると言える。このように現実とイメージの両方に事物のリアリティが存在するという状態を、多田は「リアリティの二重性」と呼ぶ。そして、イメージは単純なものであるが、現実には複雑なものであり、両者はパラレルな状態で存在すると述べている[多田 2004: 10-11]。これまで見てきたように、イメージが表象するものは「異文化を魅力的に思い浮かばせる」エキゾチズムである。すなわち、イメージによって描き出される情緒とは「魅力的」な側面、つまり「楽しい」とか「美しい」などといった、“明るさ”に限られているのである。“明るさ”に限定されたエキゾチズムは、メディアの作り出したイメージが描き出す「擬似イベント」であるが、そのイメージは現実にも裏付けもあるものであるため、決して虚構ではない。しかしながら、現実には“明るさ”のみで語りきれぬものでもないのである。特に沖縄に関しては、米軍基地問題や戦争体験といった、まさに大城(2005)の挙げた特徴の・で示されている事柄が現実の中に存在するのである。そうした“暗さ”を内在するという意味で、現実とは複雑なものであり、逆に“明るさ”のみを表沙汰にするイメージの方は単純なものである、というのが多田の指摘していることなのだ。

以上のことを踏まえて、ここからは、沖縄をめぐるイメージ像とメディアの効果について、より具体的な領域に踏み込んで考察を加えていきたい。本論文では、第2章から第3章にかけて、沖縄についてのイメージ像を、観光・芸能・癒しの3つに分けて説明した。これをエキゾチズムの概念から分類すると、「観光・芸能イメージ 異国エキゾチズム」、「癒しのイメージ ノスタルジア」となる。概念上このような分類ができるが、それぞ

れのイメージの起こりを時系列にのせると、観光 芸能 癒し、となるのである。その意味で、誕生の順序からイメージ像は3つに分けられるが、概念としては異国エキゾチズム・ノスタルジアの2つである。この部分を誤解のないようにしておきたい。

さて初めに、観光リゾート・芸能に長けた地域としてのイメージから誘発される、「異国エキゾチズム」の形成についてである。この2つのイメージの誕生については、まず観光リゾートとしてのイメージが確立し、後に芸能のイメージが付与されていくという形である。観光地としてのイメージは、沖縄の空間がエキゾチズムとしてまなざされるものとなる根本を形成したものであるが、それはメディアのみならず、政財界や民間企業も一体となって行われた、戦略的宣伝の効果であった。この変遷については、第2章において説明済みであるので参照されたい。端的に表現すると、官民一体となった一方的なイメージの供給が、県外から沖縄をまなざす立場にいる本土住民に向けてなされたのである。それは、沖縄を売り物として「見せる・見られる」存在へと推し進めるプロセスであった。そのため、当然ながら沖縄の特殊性の中でも、「明るい部分」を抽出し、それを観光の武器として押し出すような宣伝方法を仕掛けていくことになる。作り出されたイメージ像が、それを視聴する人々にうまく受容されるように、いわば「綺麗な」部分を切り取って発信していくことは、イメージそのものを演出していくという行為である。沖縄に関するイメージが、メディアによって「楽しい」であるとか「美しい」ものとして演出されたまま確立し、さらに擬似イベントとして本土住民にとっての沖縄の現実を形成したことは、観光統計の調査結果に登場する「沖縄観光に満足した点」の項目で、「沖縄らしさ」という回答が大多数を占めたという結果に反映されていると言えるだろう。イメージとは、無心に与えられた情報から作り出されているのではなく、そこにはメディアの意図的な操作が介入している可能性があるということを考えなくてはならない。

とはいえ、こうした現象が見られるのは、決して沖縄に限ったことではない。観光地として地域の外部から人を呼び寄せたり、何らかの要素によって報道された経験があるような場所には、必ず何らかのイメージの視線が存在し、そのイメージはメディアによる演出を受けたものとなっていると言える。どんな場所でさえ、それがたとえ東京であったとしても、イメージの視線から逃れることは不可能である。とはいえ、演出されたものといえどもそのイメージは決して捏造ではないのである。むしろ、それが観光地などであった場合、その地域の「良い部分」をクローズアップした形での報道のされ方をするのが一般的である。そのケースの場合、地域産業等にプラスの効果も見込まれることなどから、どちらかと言うと現地の住民からも好意的に受け取られている場合が多い。

しかし、報道のされ方に対して好意的であるということは一方で、メディアに情報操作されている可能性があるという事実が意識上に顕在化されにくいということの意味する。それは、メディアの報道の仕方が「明るい部分」に限定されているということの操作性を、特別、危険視する必要が他の地域にはないからである。ではなぜ沖縄に限って、イメージがメディアの操作によって演出されるということに対して、問題が提起されるのだろうか。

沖縄がイメージによって語られることを危惧する理由は2つある。1つは、沖縄の日本における位置付けが「外部」にあるか、「内部」にあるかという、日本の他の地域には存在しない概念が考えられるということ、そしてもう1つは、イメージの枠から追いやられてしまう「暗い部分」の現実が存在するという事実である。

前者は、本土の目線によって規定される、沖縄の所属に関する「外部」・「内部」である。このことについて、その概要は前章3節の最後部で既に述べているが、もう一度説明すると、本土復帰以降、沖縄は形式的には日本の一地域として組み込まれたが、果たして真に沖縄は日本の一地域として、他の地域と区別されずにまなざされているか、という問題である。答えは否だ。既述の通りであるが、異国エキゾチズムが意識されればされるほど、沖縄の「外部」性は強調される。それは「沖縄は異国である」という認識を何よりも強調する装置として、メディアに演出されたイメージが作用していることの証拠に他ならない。「内部」性は、ノスタルジアの効果によって浸透を見せる可能性があるが、沖縄に定着した異国らしさのイメージは根深く、全国的に普及しているため、強く印象付けられていると言えるだろう。沖縄の「外部」性・「内部」性については第5章で考察するため、詳細はそこで言及したいと思う。

そして後者は、演出されたイメージが示す沖縄像というものが、「楽しさ」「美しさ」などといった「明るい部分」に特化されているという反面で、影をひそめている「暗い部分」が存在するというところに疑問を投げかけるものである。それは単純化されたイメージと現実の複雑性の問題でもあると言える。両方ともリアリティであるにもかかわらず、本土住民には現実の「暗い部分」への認識が欠如している。そのことによって起こり得る問題とはどのようなものであるのか。

メディアによって演出されたイメージに関する2つの問題点を受けて、東京のメディアに作り出されたイメージが沖縄でどのように感受されているかについて、次節で考えていきたい。

4.2 イメージとエキゾチズムの身体化

これまで、沖縄をまなざし、イメージする人々の主体を、ひとえに本土ないし東京に置いてきた。しかし、沖縄にイメージを持つ主体は、果たして本当に本土の住民だけなのだろうか。この節はこの疑問を出発地点として、論を展開させていきたい。その際、沖縄県内に居住する人々を、ここでは「県民」と表現する。また、それに対して本土など県外に居住し、いわゆる本土目線を通して沖縄に対峙する人々のことを「本土住民」と表現することとする。

さて、県民の内にも沖縄をイメージ像でまなざす視線は存在するのだろうか。県民は居住地が沖縄であるため、居住空間としての沖縄に何らかのイメージを持つということは考

えにくいという見解に陥りがちである。しかし、県民にもイメージは受容され、リアリティの二重性の再生産は、ここでも確かに起こっていると見える。田仲（2002）の主張をここで引用したい。

「沖縄ブーム」にはリゾート沖縄のイメージを宣伝する装置としての外向けのベクトルよりも、むしろ内向けのベクトルの方がより強く、それは島人たちの日常意識の有り様に深く関わっているのではないか。つまり、「美しい自然」、「癒しを与える文化」という言説がメディアを介して流通していくうちに、全てが「ハレ」の時空に置かれた「祝祭空間」のなかで、沖縄が「沖縄」を演じる、ということがありはしないのか。[田仲 2002: 259]

田仲が指摘していることは、メディアによって作り出されたイメージ像は、本土住民に対してよりも、むしろ県民に対して、より強く働きかけているのではないかということである。すなわち、県民の沖縄に対する視線も、描かれたイメージ像の中にある「明るい部分」に支配されているということだ。それは県民自身が、本土メディアが敷いたイメージのレールの上に実際の沖縄を重ね、「『沖縄』を演じ」ている可能性があるということを示唆している。

ではなぜ、このようなことが起こっていると考えられるのか。その答えは、県民自身の“存在の二重性”にあると私は考える。この二重性とは、県民の、「まなざされる客体」としてのあり方と、「まなざす主体」としてのあり方の2つである。まず、「まなざされる客体」という方のあり方に関してであるが、これはこれまでの議論の集約とも言える考え方である。すなわち、沖縄という空間の存在そのものと沖縄県民の存在を一括りに「沖縄」と名指して、その一括りでの「沖縄」が、本土住民の目からイメージを介してまなざされるという形である。この場合、これを「沖縄」側の視点から捉え直すと、「まなざされている自己」というふうな受動的な表現となる。さらに県民に特化して考えると、県民は沖縄という空間の存在そのものとセットのものとしてここでは定位付けられる。つまりそれは、県民の存在が、イメージ上の沖縄空間の中に、「沖縄」に含まれる要素の1つとして回収されていくことを意味する。

一方、「まなざす主体」という方の県民のあり方は、県民が本土住民と同じ位置から沖縄の空間を眺める状態のことを指す。この場合、県民と沖縄の空間そのものは、存在として隔離され、対峙するような形となる。このときは、たとえ県民といえども、沖縄そのものをまなざす視線は本土住民と同様にイメージの影響を受けている。前節で述べたように、一般にどんな場所であっても、イメージの視線から逃れて存在するということは不可能だからである。それは、その場所が居住空間として、じかに生活されている場合でも同様である。なぜなら、たとえ自身の生活空間に関することであっても、居住民は、それにまつわる報道のされ方に本土住民と同じように触れているからである。そのため沖縄県民も、メディアによって演出された、彼らにとっては日常の場である沖縄という空間に対するイ

イメージ像に、本土住民と同様に常に接触しているのである。そして当然、そこで享受されたイメージ像は、県民の意識の中にも「擬似イベント」の効果を発揮し、事実であるとして知識化されていく。現実が先か、イメージが先か、などといった根本的な疑問には人は盲目的である。それが操作されたもので疑いの余地があるか否かの、正しい判断が可能な位置から一番近いところにいるのは居住民（ここでは県民）であるが、それでも一般に、与えられた情報というものに人々は正しさの基準を置くからである。それは、こうして現代のように情報流通が多様化されるほどに、情報は黙っていても提供されるものだという受動的姿勢への依存度が高くなっていくという現状にも、原因があると考えられる。

以上のことから、県民は沖縄の内部に生活し、自身の存在と空間そのものを「沖縄」という言葉に集約されながらにして、同時に外部から沖縄をまなざすという、存在の二重性を持つということが言える。このことに関しては、本土住民のみならず県民自身までもがメディアによって作り出された沖縄イメージを受容している、と沖縄に向けられる視線の全てを危惧する研究も多い。県民による沖縄イメージの受容は、「イメージの身体化」などと表現できるもので、県民自身が沖縄を消費することに盲目的であるということを目指す。これに関する批判的な意見としては、次のような主張がある。

青い空、青い海に囲まれた「南海の楽園」が私たちを誘う。記号化された自然のイメージから土地の記憶が捨象され、新たな意味を与えられて島の人々の前に立ち現れる 原風景 としての沖縄。コマースリズムに乗って再生産された歌や踊りや工芸品などが風景に彩りを添える。翻訳 され名前を与えられることで編成された風景が内在化されていくプロセスの中で、視る者の位置もまた定位されていく。つまり、イメージに沿うように幻視される「沖縄」に「沖縄人」が呼び出され、政治的なものがそこから抜け落ちていく。沖縄文化が称揚される「ブーム」の陰で進行しているのはそんなプロセスだ。[田仲 2002: 264]

沖縄人一人一人の身体に宿っているかの如く語られる沖縄アイデンティティという「内部」が、その実、それを都合良い文化的差異性という参照枠にして、自らを日本という同一性に固定しようとする沖縄の外部（者）によってこそ篡奪されているのかもしれないということが想起されなければならないだろう。……(中略)……極端な話、沖縄アイデンティティという内部性は、常にそしてあらかじめ、日本をはじめとする沖縄の外部によって他有化されていると考える必要があるようにすら思えるのである。[新城 2004: 189]

本土メディアの甘言に乗せられ、「スローライフだ」「癒しだ」「ちゅらさんだ」とおだてられ、わが身の本当の姿を顧みることさえない。オリエンタルな文化だけが持てはやされ、基地問題などを置き去りにしたまま、うまく本土側に絡めとられている危機感を自覚することもない。[与那覇 2002: 267]

これらの言説が危惧しているのは、本土メディアの操作によって沖縄の特殊性の「明る

い部分」だけに視線の焦点が絞られた結果、そこから「抜け落ちていく」あるいは「置き去りに」される事実が存在するという点である。また、新城や与那覇の主張では、そのように「明るい部分」だけを浮き彫りにすることで沖縄が本土にとって「都合良い」存在になっているということに、県民自身が無自覚であるということに対して警鐘を鳴らすものである。「明るい部分」に報道が限定されることの危険性については次節で後述するが、ここに政治的作用が介在する可能性が見え隠れするのである。

メディアによって演出されたイメージは、これまで、本土復帰からの35年という年月をかけて、徐々に浸透していったものである。その身体化のプロセスは、県民の意識下においても例外ではなかった。物事には「イメージ」と「現実」の二重のリアリティが存在するということを述べたが、その現実の部分にあって、イメージの部分にはないものをまなざすことができるのは、県民だけなのである。もちろんこれまでも、多くのメディアで報道されているイメージ像の沖縄空間に関して、これは誇張であるとか、違和感を覚えるなどといった感覚を持った経験は県民にもあるだろう。しかし、生活空間であるという意識に裏付けられた、イメージに描かれない現実を見ようとする意識の幅というものが、年月を経るにつれて、イメージの幅に押されて狭まってしまったように感じられる。つまり、イメージの受容によって、「暗い部分」の現実のリアリティに対峙する県民の意志が弱まってしまっているということだ。それは、唯一沖縄の実情をじかに知る県民の発言意志を脆弱化させてしまうことになるといった意見につながり、そしてまなざしの照射を免れた沖縄の現実の「暗い部分」は、将来的にもその改善へと意識が向けられていかないといった危険性を物語る。これは前時代的には、とりわけ本土住民の意識について言えることであった。しかし現在では、イメージによって描き出される沖縄像に、本土住民のみならず沖縄県民までもが安住してしまっただけで、現実の「暗い部分」に対する視線の盲目性を、さらに深化させてしまったと言える。県民による沖縄イメージの身体化は、こうした部分において“罪”となり得るのである。

これまで県民自身が沖縄をまなざす視線のイメージ化について、ひとえに危惧する内容を語り続けてきた。しかし県民の視線は、演出されたイメージの介入を受けながらも、なお沖縄の実情を日常生活として生きているという事実がある点で、内部目線を完全に失ってしまったわけではないのである。ただ沖縄という空間のイメージの固定化が進むにつれて、今ある沖縄空間の現状というものが、県民自身の内部に固定化されてしまったのだと考えることもできる。すなわち、自分が生活する空間に、基地問題をはじめとした課題が山積しているということが、県民にとって日常化されてしまっているというのがその実である。確かに、実情に視線を向けることが必要であるという意見はもっともだろう。しかしながら、“実情を明るみに出さなければ、沖縄の真のアイデンティティを語ることはできない”といった議論には、疑問を呈したい。なぜならそれは、沖縄のイメージ像としてクローズアップされている「明るい部分」の中に、沖縄のアイデンティティを見出すことを拒否するという暴力性をはらむ危険性があるからである。「明るい部分」と「暗い部分」の

両方に現実はあるが、「明るい部分」をまなざそうとする視線の中には、「暗い部分」から目を背けようとするまなざしの暴力の故意性は見られない。どちらかと言えば、「暗い部分」に視線が照射されないのは、能動的な故意ではなく、受動的な必然なのである。すなわち、明るさに特化した情報が知識化されることによって描かれたイメージ像は、やはり明るさにはしか焦点が当てられないため、「暗い部分」が見えないことは無知の反映であり、そうした情報の与えられ方しかされないことからくる必然なのである。見方を変えれば、「明るい部分」に絞られた視線というものは、沖縄に対してプラスを志向するまなざしである。確かに、本土住民が沖縄を見ること、そしてそうしたまなざしで見られている県民がそれに対して否定的になりはしないことに、沖縄の実情を隠蔽してしまえる都合の良さが垣間見えるといった考え方も一理あるだろう。しかし県民はもはや、まなざされる客体としての存在ではなく、自ら沖縄に対峙している存在なのである。そうした県民自身の能動性を鑑みないことには、それこそ県民という存在を捨象した研究として、暴力性が問われてしまうことになりかねない。

研究者が危惧するのは、イメージが受容されればされるほど進む、現状とイメージ像との乖離である。これまでは、「本土」対「沖縄」という地域の二項対立の中に、そこに所属する「本土住民」対「県民」が位置付けられて対立図式を生んでいたが、現在ではもはや、「本土 本土住民」対「沖縄 県民」という単純構造では語ることはできない。県民の意識・視線は、これまでの議論で明らかになったように、着々と本土住民の意識・視線の位置へと近付いていっている。しかしこのことは、見方を変えれば、県民は本土という空間の存在と沖縄の空間の存在とを、イメージのまなざしによって橋渡しをしていると考えることができるのではないだろうか。これはどういうことかと言うと、イメージの視線というものは、これまで本土主導で作られ、主に本土住民に受容されてきたと考えられてきた。しかしながら、沖縄にまつわるイデオロギーは、県民の中にも無数の情報を通して蓄積されているのであり、情報が反映されたまなざしというのはイメージ像を抱かずにはいられない。とはいえ沖縄を生活空間とすることでしか見えてこない現実の「暗い部分」に対し県民が盲目的であるかということ、そうではない。そういった問題点は生活の一部として“生きられている”沖縄の「素材」であり、これはイメージの影響を受けないと点で、県民にしかまなざしを照射されない日常のリアリティとなっているのである。それは、現在では観光資源として定着したような沖縄の特殊性が、本土復帰以前には「素材」として“生きられていた”ことと同様である。県民の視線は、沖縄の暗い現実を見ることを放棄したのではなく、明るい部分を活性化させるための手段としてイメージ像を獲得したと言える。すなわち、県民は本土住民の視線の効果によって存在の二重性を語られるという受動態ではなく、積極的に「まなざしの二者性」を語り出すような可能性を持っていると考えることができるのだ。それが、イメージの視線のみを持つ本土目線と、イメージと現実との両方を視線の中に持つ県民目線の二者性ということになる。本土目線のあり方をも理解している県民は、自身の存在を本土側に結びつけつつ、リアリティを発信し

ていく能動性を秘めている。

私はここに、イメージの視線の持つ“功”の可能性を考えていきたい。そのことは、これまで“罪”の部分ばかりが取り沙汰されてきた「イメージ」に、新たな論点を加えることができるものだと考える。そしてこの可能性を探ることこそ、沖縄と本土という地域的位置付けの乖離そのものを解消へと導いていくことにつながるのではないだろうか。ここで、乖離として指摘されているものとは、これまでの説明にも登場したように、イメージの裏に存在する沖縄の実情、すなわち「暗い部分」である。イメージの持つ“功”の可能性を考える手がかりとして、次の段階でこの「暗い部分」の内容について言及しておく必要があるだろう。

4.3 イメージに隠蔽される現実と県民意識

沖縄イメージに隠蔽される現実、これは第1章で挙げた沖縄の特殊性を表象する特徴の「沖縄戦の体験と平和思想」、「アメリカ統治体験と現在の基地問題」の部分に集約されるものである。こうした、沖縄の現況として問題化されているものを一般的に「沖縄問題」と言い、これについては様々な研究がなされている領域である。とりわけ、「アメリカ統治体験と現在の基地問題」に関しては、米軍基地の存在によって派生的に生じている数々の問題があり、非常に多くの研究者によって、多岐にわたる分野から扱われているのである。派生的に生じている問題とは、例えば経済問題、産業の未発達、治安の悪化、雇用・失業問題、環境汚染などが挙げられる。米軍基地の存在を起点として、網の目状に広がった数々の問題は、沖縄のあり方を大きく規定し、また規制していると言える。そのため、イメージの視線から抜け落ちた陰の沖縄像として、沖縄問題とりわけ基地問題を取り上げることは、県民の持つまなざし・存在の二重性を語り、イメージの可能性、さらにはエキゾチズムの展望を探るためのプロセスとして、大きな意義を持つと言えるだろう。

まず、米軍基地の概要について説明したい。沖縄県には現在、国土面積の0.6%にすぎない面積の中に、日本全土における在日米軍専用施設の約75%が集中している。これはすなわち、県土面積の約11%、沖縄本島の総面積の約19%に相当する土地が米軍基地に占められているということになる。施設数としては37あり、軍人・軍属・家族数合わせて45,345人が米軍専用施設内で生活している(2004年9月現在)。また、基地収入は復帰時の倍ほどに増加しており、観光収入と並んで、県経済を支える大きな柱として依然機能しているというのが現状である。

さて今年2007年は、本土復帰から35周年にあたる節目の年である。5月15日をもって35周年を迎えるのを前に、沖縄では琉球新報社が電話による県民世論調査を実施した。その調査結果の全容が2007年5月8日の朝刊に掲載されたが、ここに復帰と基地、そして沖縄問題全般などに対する県民の意識が見てとれる。米軍基地に始まる諸問題に関して、事

実を羅列し問題点を浮き彫りにすることは簡単であるが、それはこの論文の趣旨にそぐわない。県民の意思を明らかにすることなく、イメージの功罪の本質を語ることはできないからである。そこで、琉球新報社の行った世論調査を、米軍基地に特化した設問に限定することなく、ここに引用したいと思う。現実の「暗い部分」の中でも最大の懸案である米軍基地について、実際に沖縄を生活拠点とする県民は、どのような意識を抱いているのだろうか。同調査の、質問項目と回答は以下の通りである。

【Q1】沖縄は、今年の5月15日で本土復帰35周年を迎えます。あなたは本土に復帰したことを現在どう思いますか。

- とても良かった 43.0%
- どちらかといえば良かった 39.3%
- どちらかといえば悪かった 3.1%
- とても悪かった 1.3%
- どちらともいえない 11.7%
- その他・分からない 1.5%

【Q2】沖縄が本土復帰してから良かったと思うことを、次の中からお選びください。

(3つまで)

- 道路や橋、港湾などが整備された 50.3%
- 医療福祉が充実した 27.4%
- 教育が充実した 20.9%
- 米軍基地被害が減った 4.2%
- (収入が増え)生活が豊かになった 10.6%
- 本土との交流情報量が増えた 46.1%
- 本土との一体感が増した 18.6%
- 良かったと思うことは特にない 6.1%
- その他・分からない 3.8%

【Q3】逆に悪くなったと思うことを、次の中からお選びください。(3つまで)

- 自然破壊が進んだ 46.3%
- 失業者が増えた 31.3%
- 米軍基地の被害が増えた 25.3%
- 教育環境が荒廃した 8.8%
- 産業が衰退した 4.8%
- 伝統・文化が薄れた 14.4%
- 離島などの過疎化が進んだ 8.6%
- 物価が高くなった 6.7%

悪くなったと思うことは特にない 1.1%

その他・分からない 4.4%

【Q4】沖縄にある米軍基地について、あなたはどのように思いますか。

現状のままでよい 15.9%

もっと拡張すべきだ 2.9%

もっと縮小すべきだ 45.1%

全面撤去すべきだ 31.3%

その他・分からない 4.8%

【Q5】普天間飛行場は名護市辺野古への移設が予定されていますが、あなたはどのように思いますか。

移設を進めるべきだ 16.9%

無条件で普天間飛行場を撤去すべきだ 22.1%

県外移設すべきである 16.9%

国外に移設すべきだ 36.9%

その他・分からない 7.3%

【Q6】米軍駐留の根拠となっている日米地位協定のあり方についてあなたはどのように思いますか。

現状のままでよい 9.8%

運用改善をすべきである 24.4%

根本的な改定をすべきである 34.0%

日米安保条約とともに破棄すべきである 21.3%

その他・分からない 10.6%

【Q7】国や県に今後、特に力を入れて取り組んでほしいものを、次の中からお選びください。(3つまで)

農林水産業の振興 22.3%

観光産業の振興 28.8%

戦後処理問題 14.4%

IT産業の振興 11.7%

教育文化の振興 24.4%

社会福祉の充実 37.6%

モノレールや鉄軌道、橋などの整備 15.2%

米軍基地の整理縮小と跡地利用 33.2%

自然環境保全の充実 28.6%

国際交流の促進 8.4%

その他・分からない 3.6%

【Q8】あなたは仲井真弘多知事を支持しますか。

- 支持する 35.9%
- 支持しない 15.9%
- どちらともいえない 46.1%
- 分からない 2.1%

【Q9】沖縄と本土の格差は縮まったと思いますか。

- 縮まったと思う 26.3%
- 変わらない 40.5%
- 逆に拡大したと思う 28.0%
- 分からない 5.2%

【Q10】高校教科書検定で「集団自決」をめぐる日本軍の強制の表記が修正削除されたことについてあなたはどのように思いますか。

- 歴史を曲げるもので許せない 76.2%
- それでいいと思う 7.7%
- どちらでもない 10.6%
- 分からない 5.6%

【Q11】あなたはどの政党を支持しますか。

- 自民党 27.4%
- 社民党 5.0%
- 公明党 3.3%
- 壮大党 3.1%
- 共産党 3.5%
- 政党そうぞう 0.8%
- 民主党 6.0%
- 国民新党 0.2%
- 新党日本 0.0%
- 自由連合 0.8%
- 支持政党なし 48.2%
- その他・分からない 1.9%

(『月刊「軍縮問題資料」』2007より引用)

この調査結果から分かることは、第一に、復帰して「とても良かった」という回答(43.0%)と「どちらかと言えば良かった」という回答(39.3%)の合計は82.3%に上り、本土復帰に対してかなりの割合の人々がプラス評価であるということである。第二に、復帰後の県民生活に関して、県民の問題意識の高い項目はやはり米軍基地についてである。この調査が基地問題関連に特化した質問項目で構成されているため、多少回答が誘導されている部分

もあろうが、米軍基地の存在が県民生活を圧迫している一番の要因となっていることは確かであろう。【Q4】・【Q7】などの結果を見ても、県民の圧倒的多数が基地の縮小・全面撤去を求めていることが分かる。特に基地の現状についての設問である【Q4】の回答を年代別に見ると、「縮小すべきだ」の意見は20代に最も多く、回答の56.8%を占めているという。本土復帰が35年前であるから、20代の回答者は復帰以前の沖縄を知らない世代であるが、そうした若い復帰後世代であっても、基地への不信や抵抗の意思は強いことがうかがえる。

普天間基地の辺野古移設に関する【Q5】の項目に関しては、調査対象者となった県民の居住地によっても見解が異なるものであるだろうが、興味深いのは沖縄以外の地域への移設に関して「県外移設」と「国外移設」の両項目があったなかで、「国外に移設すべきだ」が36.9%で、「県外移設すべきである」の16.9%の倍以上の割合を占めるということである。これは、基地によって日常生活が圧迫されることの不安・不満を県民がよく知っているため、基地というものの自体の存在を危惧する意識から、国外移設を希望する割合が高くなっているという捉え方をすることも可能である。しかし米軍基地が一向に縮小されないことを、本土との格差として県民が認識しているとしたら、この「国外移設」の意見が、多少「県外移設」に流れてもおかしくはないと考えるのである。日本国内の県外に基地を移設するということは、日本のどこかの地域に基地問題を生み出すということである。米軍基地が沖縄に存続することの原因を、基地問題に無知な本土住民の目線あるいはイメージの演出により生み出されたエキゾチズムという、沖縄の「明るい部分」だけをクローズアップする本土メディアの風潮に求めるとしたら、米軍基地の県外移設という、いわば苦難の共有とでも言えるような方向性にもう少し回答が集まってもおかしくはないであろう。しかしながら、県外移設ではなく国外移設が倍以上の割合で希望されているということは、基地問題を日本国内の他の地域に負担させることは、県民の総意ではないということである。すなわち、県民の意思としては、自身が「日本の一地域」の住民であるという意識から、国全体に対する平和思想を抱いているということが見てとれるのではないだろうか。本土復帰後35年が経過して、県民の多くは、認識上も日本の「内部」に沖縄を位置付け、自身の存在もその中に位置付けていると言えるのである。

この考察に関連する項目として挙げられるのが、調査結果の【Q2】の回答である。ここでは、「沖縄が本土復帰して良かったと思うことは何か」という質問項目に対する回答の第2位が、「本土との交流情報量が増えた」となっている。1位の回答「道路や橋、港湾などが整備された」の50.3%に対して、大差ない46.1%という半数近い割合を得ているこの回答は、県民の、沖縄にまつわるイメージの身体化とエキゾチズムの受容を色濃く反映しているものと言えるだろう。すなわち、この回答から読み取れることとは、本土で生産・消費されているイメージを沖縄も共有しているという認識があることの表れであると同時に、本土住民からの沖縄への注目度が増すに従って、県民の中に“本土から理解されている”と感じる意識が強まっているということである。【Q2】の回答では「本土との一体感

が増した」という回答も 18.6%を占めていることから、本土と沖縄との存在の一体感、すなわち、本土の「内部」空間として沖縄も位置付けられているという意識を県民が抱いているという意味で、上述した普天間基地移設に関する設問の解答項目である、「国外移設」の意思とつながっていくと考えられるのではないだろうか。

さらに、【Q3】の設問に注目したい。「沖縄が本土復帰をしたことで逆に悪くなったことは何か」という設問であるが、この回答の1位は、「自然破壊が進んだ」の46.3%なのである。さらに2位は「失業者が増えた」の31.3%で、3位によく「米軍基地の被害が増えた」の25.3%がくる。県民にとって、より差し迫った危機感として感じられているのが、米軍基地被害よりも、自然破壊・失業問題だということが言える。【Q7】の設問「国や県に今後、特に力を入れて取り組んでほしいもの」も、【Q3】と設問内容が類似しているが、ここでは1位が「社会福祉の充実」(37.6%)で、2位に「米軍基地の整理縮小と跡地利用」(33.2%)となっている。この「社会福祉の充実」という回答項目は、【Q3】の「失業者が増えた」という回答項目に対する改善策として対応しているものである。また、さらに【Q7】を見ると、3位に「観光産業の振興」(28.8%)、4位に「自然環境保全の充実」(28.6%)となっているが、これも【Q3】の回答項目における1位「自然破壊が進んだ」に関連付けられるものであることが明白である。【Q3】・【Q7】を総じて分かることは、米軍基地問題よりも県民にとって懸案となっているものとして、雇用・失業などの経済的問題や、環境破壊による観光業への打撃があるということである。

このことを、先に言及した【Q2】や【Q5】と結びつけて考えると、沖縄に現存する沖縄問題は、県民から見た場合、必ずしも本土との交流の中においては、アイデンティティとしての必然性を持たないと考えられるのではないだろうか。また、沖縄問題の改善に向ける意識も、基地という政治的問題をはらんだものよりも、失業不安や環境破壊への危惧などといった、より日常的な問題の方に指向されている。基地問題は、とりわけ本土との比較意識の中で格差を認識付けるものであるが、より日常に近い他の問題は、本土との比較における基準の低さが不満となるというよりも、基準の低さは県の内部的な問題として認識されていると考えられる。つまり、社会福祉や環境保全の不充実は、「本土のせい」という見方はされない部分の問題なのである。

すなわち、県民にとっても、本土住民と共有すべき沖縄認識というのは、現状のイメージ像の中にあるのである。さらに、沖縄に対峙する心理も、本土住民と県民が共有すべきものとして県民が感じているのは、イメージから生まれたエキゾチズム 異文化を魅力的に思い浮かばせること である、と考えることができる。メディアによって提供された情報に彩られて、沖縄はエキゾチックな空間であるというイメージから、「明るい部分」にひとえに注目が集められてきた。その「明るい部分」を肯定視する県民の視線は、本土住民のまなざしと性格を同じくするものだ。県民の意識が本土住民と異なるのは、「暗い部分」への認識が存在するか否かということである。この「暗い部分」に対して、本土住民の視線が注がれていないことに沖縄問題の未解決の原因を見、それを危惧する声は後を絶た

ない。確かに、イメージ像が描き出すエキゾチズムとは、沖縄の特殊性の魅力的な部分のみを謳っており、ここで現実の隠蔽がなされているという指摘は決して間違いではないであろう。しかし、ここまで問題を検討してきて考察できることは、沖縄問題の解決とイメージによるまなざしの照射を受けるということは、少なくとも県民目線で見るときには、別次元の問題として捉えられているということである。イメージは確かに“外向き”に作り出された沖縄空間であり、それに合わせて沖縄が「沖縄」を演じるということもあり得よう。しかし、その演じ方というのは、「明るい部分」に特化した沖縄空間を描くということであって、それは虚構でもなければ、「暗い部分」にあたる沖縄問題の未解決の原因でもない。

隠蔽された「暗い部分」にあたる現実と、イメージでまなざされるということの関係性が、県民の意識においては殆ど無関係なものとして捉えられている、という形で、ようやくここで明らかにされたと言える。そしていよいよ、沖縄エキゾチズムイメージの現状における可能性について、検討していきたい。

第5章 エキゾチズムの展望

5.1 異国エキゾチズムの描き出す“外部”

本論文の最終段階として、イメージとそれによって生み出されたエキゾチズムという概念の、沖縄における危険性と可能性について考察していきたいと思う。これまで述べてきたなかでも明らかなように、沖縄がイメージで語られるということ、それによって現実の「良い部分」のみが切り取られていくことに関して、先行研究では批判的な主張を繰り返すものがほとんどであった。しかし私はここで、あえて現状のあり方を肯定的にまなざすという視座に立つことで、沖縄の今後プラスの方向性を見出すことに挑みたいと思う。イメージとエキゾチズムの再検討を、第5章では試みていきたい。

沖縄には3つのイメージ像が存在するというのを、これまで述べてきた。誕生の時系列順に、観光リゾートとしてのイメージ、芸能に長けた地域としてのイメージ、そして癒しの島としてのイメージの3つである。そしてこれらのイメージ像を、私はエキゾチズムの観点から、「異国エキゾチズム」と「ノスタルジア」とに分けて考察を行ってきた。なぜ、エキゾチズムとノスタルジアを分けて考察する必要があったのか。繰り返しになるが、それは、本土から見た沖縄の位置付けを考察するためである。

広義のエキゾチズムとは、「異文化を魅力的に思い浮かばせるもの」として、沖縄という空間の特性から第1章2節において再定義した。その概念の中では、ある対象をエキゾチズムとして捉えたときに、エキゾチズムを思い描く「私」という主体の位置する日常と、「私」の生活する日常世界から離れた空間にエキゾチズム（を表象する対象）を思い描く、という構図が出来上がる。すなわち、「私」の日常で語れる空間を無意識のうちに“内部”とし、エキゾチックに感じられるものの位置する空間を“外部”と見なしているということが言える。

沖縄の特殊性の「明るい部分」がエキゾチズムとして表象される、その異国的な要素は「観光リゾート」と「芸能に長けた地域」というイメージ像の中に存在する。すなわち、この2つのイメージ像を介してまなざされている沖縄は、それをまなざす本土住民にとっては、存在そのものが「異国エキゾチズム」として感受されるのである。それは、本土住民にとっての日常である「本土」という“内部”と、沖縄という異国性あふれる魅力的な空間を“外部”として捉える視線である。なぜ、観光イメージと芸能イメージの2つが表象する沖縄は、「異国」エキゾチズムなのか。それは、観光リゾートまたは芸能文化を印象付ける装置の性格に起因すると考えられる。

まず観光リゾートについて、そのアピールポイントの主要なものは、沖縄の特殊性を表象する特徴として大城(2005)が挙げたものの中の、「亜熱帯のサンゴ礁の離島県」であり出すことのできる、自然景観の美しさである。それは例えば、ハワイやグアムなどの

ような、海外リゾート地として人気の高い空間を彷彿とさせるものであると言える。もちろん、そのようなイメージを持たれる前段階として、そうした海外リゾートを模した空間を、本土復帰前後の観光開発によって沖縄の内部空間に作り出そうと試みたということが背景にあるが、沖縄について、「現実」と「イメージの演出」のどちらが先であったかということは、イメージを受容する人々（ここでは本土住民）にとっては、沖縄をどのように思い描くかという思考回路とは別次元の関心なのである。沖縄を“外部”のものとしてまなざす本土住民の視線は、メディアによって提供されたイメージ像を無意識のうちに受容しているのであるから、それが海外リゾートを模した空間として表象されていれば、「まるで海外のリゾート地のようだ」というイメージを抱いて沖縄を見つめるという、ただそれだけのことなのだ。そのメカニズムは非常に単純なものである。

芸能文化に関しては、出発点としてまず、沖縄がもともと亜熱帯のリゾート空間としてのイメージ像のもとに存在していたという事実がある。観光リゾートイメージが人々の意識に描き出す心理とは、沖縄に対して異国エキゾチズムを感じ取る情緒であるから、そのイメージを享受した上で沖縄に対峙する人々というのは、前提的に沖縄の異国性に対して関心を抱くように操作されているということがある。ここ10年来の沖縄芸能への注目は、本土を流通の上で統括する東京において「今時」とされる商業音楽の流れに、アクターズスクールが乗ったことをきっかけに火がついた。沖縄の伝統音楽の存在が歴史的にあったにも関わらず、全国的な人気は東京の流行りに基盤を置いた音楽の方に先に集まった。そのことは、この当時大衆に求められていたものが、「伝統」よりも、いかに「今時」に即しているか、という方であったということを物語っている。そのため沖縄芸能においても、歳月をかけて継承されてきた伝統性より、アクターズスクールが流行の最先端の音楽を発信するということの現代性に、関心が集まったのである。

とはいえ、そうして「今時」の音楽が発信されることによって、沖縄が本土住民から見ても“内部”と見なされるようになったか考えると、そうではなかった。本土の人々の目は、音楽性や表現そのものへの関心を逸れ、むしろ現代的な「今時」を表現して人気を集めているのが「沖縄出身のアーティストである」という方に向いていったのである。その意識とは、沖縄が本土に比べて後進的な地域であるという前提のもとに開発の手が加えられた、観光業の起源と質を同じくするものである。つまりそれは、「あの”沖縄に、流行りの音楽が出来るのか」といった、差別ともとれるような好奇の目である。沖縄が本土の住民にとって特別な存在であったのは、前時代的には本土の基準に追いつけない後進地域であるとする認識によるものであった。しかし沖縄の観光リゾート地としての成功は、沖縄の特殊性を「魅力」として描き出していききっかけとなる。そうした流れのなかで、沖縄出身であるということが、一種のステータスとなる時代が到来するのである。すなわち現在に至っては、沖縄出身であるということは1つのブランドとしての役割を果たしていると言える。その根幹にあるのは、芸能表現の中身の本質というよりも、その発信元である沖縄という空間そのものへの関心である。そしてその関心はどこからやってきたのかと

いうことを考えると、やはり観光リゾートという沖縄イメージの出発地点に立ち返ることになるのである。第2章5節で、表現の内容から沖縄の現代芸能の表現者を4つのタイプに分類したが、近年、商業音楽の流通機構の中にあっても、より伝統色を押し出したタイプである のような人々が人気を集めているというのは、本土住民による沖縄の伝統芸能への関心のようであり、実はそうではない可能性がある。否、伝統芸能への関心はもちろんあろうが、それは二次的なものであって、発端となる関心は「ブランド」としての沖縄の価値に向けられているのである。沖縄がブランドとして機能するようになることのきっかけは、観光リゾートイメージを背景に持つ異国エキゾチズムとしての魅力であるから、沖縄の伝統芸能に注目が集まるということも、その“外部”性が強調されているということの表れであると考えられる。沖縄の内部に視線が集まるにつれて、実はより日本の“外部”としての認識を本土住民に強調してしまっているという可能性があるのだ。この場合、観光リゾートとしてのイメージに集約される異国エキゾチズムは、沖縄の伝統芸能への関心という新たな要素を付与されてもなお、表象するのは日常と空間的に距離をおいた異国エキゾチズムなのである。そしてそれは、当初観光リゾートイメージのみで形作られていた異国エキゾチズムより、芸能イメージが確立するにつれてその異国性を強めている傾向にあったと考えることができるのである。

この時問題となってくるのが、沖縄問題という「暗い部分」における沖縄の特殊性に対する、本土住民からの見解である。沖縄が“外部”としてまなざされているうちは、沖縄に内在する基地問題をはじめとした数々の問題が、本土住民にとって“内部”化されていないのである。すなわち、日本の一地域としての沖縄の存在は、内実の伴わないものとして形骸化し、本土住民の意識の内では、沖縄という空間に対して無意識のうちに「異国」としての位置付けを与えてしまっていると言える。戦時中、沖縄が日本で唯一の地上戦場となったことも、戦後27年間にもわたってアメリカの統治下にあったということも、日本における米軍基地が沖縄に集中的に存在するという現状も、本土住民がそのことについて全くの無知であるということはない。しかし、イメージ像が形作られる上で強調されてきた「明るい部分」の陰となって、見えにくくなっているということは確かであろう。さらにそこには、「暗い部分」の現実を目を向けることを本土住民が拒否するきらいも、無きにしもあらずである。本土住民にとって、出来れば沖縄の「明るい部分」だけを見ていたい。そうした思いが、沖縄への旅行目的が主に観光地巡りやショッピングという、沖縄観光の現状からも見てとれる。

沖縄が本土にとって“外部”としてまなざされることの効果として考えられるのが、第4章でも取り上げたが、まなざしに起因する政治性である。その政治性とは、異国エキゾチズムの1つの性質であるが、沖縄が本土と空間的に切り離されて存在するというところにある。この効果は本土からのまなざしの中のみ見られるものであるが、沖縄の異国性を、本土における日常空間とは異質なものとして語ることは、沖縄が日本の“外部”であることを強調するという行為である。沖縄問題が本土住民にとって“内部”化されていか

ないということを中心に述べたが、それはすなわち、認識上「沖縄は“外部”であるから、基地（を中心とした沖縄問題）があろうと自分（本土）には関係ない」といったような方向性に陥りやすいということである。さらに、沖縄が観光リゾートとして成功を収めたことの効果としてその存在がブランド化していることについては、「観光業さえ順調であれば、本土は沖縄に十分貢献していることになる」という考えを生んだり、「“沖縄は特別である”という言葉で沖縄を別格として扱っていけば、県民もそれを誇りに思って現状維持に不満を持つことはないだろう」などといった意識を誘発しかねない。こうした心理が働くとき、本土の視線から捨象されるものがある。それこそが、沖縄県民の生活のリアリティなのである。

沖縄は、異国性を表象する様々な潜在的な事物をその空間内に持っているため、本土住民の視線はしばしば、異国エキゾチズムに思いを馳せることが、沖縄内部への関心とイコールになるはずであるという、短絡的な思考をしがちである。しかしながら実際は、異国エキゾチズムとして見えている沖縄というのは、現実には現実でも非常に表面的な部分である。それこそが「擬似イベント」、つまりメディアによって作られた、現実には裏付けのあるイメージ像なのであって、第2章3節で説明したが、イメージの枠で覆われたものの内部に入り込むということは、原則として非常に困難である。ここで言う内部とは、沖縄の生活空間のリアリティという意味である。リアリティに照射されない本土住民の視線は、本土の本質と沖縄の本質を意識内に結びつける術を知らない。本土と沖縄の空間的な距離感、認識の上において、永久的に縮まることはないのである。

異国エキゾチズムが描き出す“外部”とは、沖縄の特殊性を異国性として強調することで、本土と沖縄との存在の乖離を助長するという効果となって表れる。すなわち、沖縄の異国エキゾチズムとは、一般的な異国エキゾチズムとは異なり、永遠に「普通化」を見ない異国エキゾチズムであると言える。これは沖縄と本土との間に、意識上の“国境”を構築してしまっていると言えるのではないだろうか。そこに見える距離とは、実際の空間的距離はおろか、諸外国に関する異国エキゾチズムよりももっと、遠い距離を描き出しているのである。

5.2 ノスタルジアの語り出す“内部”

前節では、異国エキゾチズムの概念が沖縄の存在を永久的に日本の“外部”に押し出すものとして機能することについて述べ、“外部”として本土住民からまなざされる時に沖縄に影響する危険性を論じた。ではエキゾチズムという概念は、本土との距離感を強調するものとして、その概念の中に沖縄に対してメリットとなる要素を全く内包しないのであろうか。結論から先に述べると、その答えは“否”である。エキゾチズムの概念の中にも、沖縄の空間を新たな領域に位置付けるような可能性を見出すことが可能である。それは、

これまでも何度かその可能性を示唆してきたように、エキゾチズムの中でも「ノスタルジア」の概念における場合である。

観光リゾートイメージ、芸能に長けた地域としてのイメージについて、異国エキゾチズムとの結びつきを改めて述べたところで、残るもう1つの沖縄イメージとは、「癒しの島」としてのイメージである。これもエキゾチズムの一種であるノスタルジアとして、沖縄の「明るい部分」を表象していることに相違はない。しかし、これまでに言及してきた通り、ノスタルジアの根源となる「癒しの島」としてのイメージは、他の2つの沖縄イメージとは区別して考える必要がある。それは、「癒しの島」としてのイメージに介されたまなざしが、他の2つとは違うところに位置付けられるための要素を持っているからである。

癒しのイメージが沖縄に見出されたのは、「癒しブーム」の高まりの中にその興りを見たように、ごく近年のことである。というより、訪れる人々を癒すだけの潜在的要素はあったものの、それが「癒し」という言葉によって名指されるようになったのが最近のことであった、というふうに言った方が適切かもしれない。そして、この新生沖縄イメージが、エキゾチズムという概念が沖縄にとってデメリットとなってきたというこれまでのあり方を変容させると同時に、沖縄という空間の存在の位置付けを問い直すきっかけとなる可能性を持っているのではないだろうかという考えのもと、ノスタルジアの概念から語り出し、検討することを試みたい。

「癒し」というキーワードが1つのブームとなっていることの現状を、第3章で述べた。そのブームとしての現象は、東京で生み出され東京を拠点として流通するメディアの効力によって全国に普及したものである。ブームの中においては、どのような分野の、どのような事物の中の、どのような側面に関して「癒し」を見出すかは無限であり、「癒し」が誘発する効果も様々である。そうした中で沖縄に見出された「癒し」の要素とは、空間に潜在するノスタルジアにある。ノスタルジアとはすなわち原点回帰への憧憬の念であるため、沖縄が「癒し」のカテゴリーに集約されるとき、それは本土住民からノスタルジックな要素への郷愁を内包したまなざしを向けられているということだと言える。

沖縄が本土住民にとって、日本の“外部”であるか“内部”であるかといった議論にノスタルジアの概念と癒しイメージを持ち込むと、ここに沖縄の“内部”性を見出すことができる。それは、現代社会では沖縄に限らずノスタルジックなものに注目が注がれているなかで、沖縄の空間にノスタルジアを見出すことに、本土住民が何を求めているのかというところに理由があると考えられる。

昔を懐かしむという行為は、そこにあるノスタルジックな事物にノスタルジアを触発されることで、癒しの想像世界を見るということである。そしてそれは、実際には目の前にある何らかの対象をまなざしている場合でも、意識の中では自身の内面に目が向けられているのである。何度となく述べていることであるが、「自身の内面」とは、経験された事柄であるとは限らない。知識やイデオロギーなど、想像の域を出ないものに根ざされている場合も往々にしてあるが、それも自身の内面に蓄積された意識として、個人にとってはし

っかりと身体化されたものである。経験の記憶などに代表される、“かつては存在したもの”と実際に見ているものとの間に共通項を見出すことでノスタルジアを感受し、そこに心酔することで、時代の追体験を行うのである。そのため、沖縄にノスタルジアを感じるということも、主体者の意識内で“かつては存在したもの”として認識されているものと沖縄に実在するものとを重ね合わせるという行為によるものである。ここで言う「主体者」とは本土住民のことであるから、その意識内に認識されている“かつては存在したもの”とは、主に「故郷」や「田舎」などに代表される日本の原風景であるということが言える。沖縄の自然景観や人の温かさなどといったイメージ像に日本の原風景を見出すということは、沖縄を過去の日本の姿に結びつけるということである。

ここで、沖縄のノスタルジアの要因となる特殊性とは、大城（2005）の挙げた特徴で言うところの「亜熱帯のサンゴ礁の離島県」や、「現代に受け継がれた琉球王朝文化の伝統」である。ところがこれらは、ノスタルジアとしてイメージされるより以前に、時系列的に前の観光イメージ・芸能イメージの表象する異国エキゾチズムの要素としてイメージされてきたものである。この部分の矛盾に関して、どのように説明ができるだろうか。そもそも沖縄の特殊性を表象する特徴として大城が挙げたものは、沖縄の空間に潜在的にあるものであって、これに対して本来はイメージ付けも役割も与えられてはいないのである。しかしながらこれは、本土復帰後はじめに沖縄に対してあてがわれたフレームが「亜熱帯のリゾート空間」であったがために、沖縄の空間に潜在する要素すべてが、「亜熱帯リゾート」という異国的なイメージを表象するものとなってしまったのである。このようにして、沖縄の空間に潜在する事物が沖縄の異国性を強調する装置として定着したことから、沖縄という空間全体が異国エキゾチズムの形成要因として、これまで機能してきたのである。ところが、近年の「癒しブーム」に沖縄の空間が含まれていくとき、沖縄の空間のなせる機能の変容を見せてきた。それは沖縄の潜在的な事物に対して、癒しのイメージが付与されていくということである。すなわち、「サンゴ礁をたたえた美しい海」や、「現代に受け継がれた伝統文化」などから、異国エキゾチズムのイメージが剥がれ落ち、新たな意味付けを与えられていくというプロセスが、ここで起こっているのである。それは異国エキゾチズムを形成していた要素が、そのイメージを離れ一度素の形に戻り、再びノスタルジアを形成していくという方向性の変容である。

時間的に離れた日本を彷彿とさせるノスタルジアへの関心と、沖縄の異国エキゾチズムの構成要素が照らし合わされることによって、沖縄の異国エキゾチズムがノスタルジアに回収されていく。それは沖縄にとって、本土住民から沖縄を「日本の一地域」として捉え直されるきっかけになると言えるのではないだろうか。つまり、異国エキゾチズムの意識上では永久的に“外部”であった沖縄が、ノスタルジアの意識の上では、本土住民の日常の“内部”に存在付けられる。その過程で意識上の“国境”を取り外された沖縄は、本土住民の目線から見ても日本の一地域という“内部”空間としてまなざされることになる。それは、異質なものとして絶対的に日常の“外部”にあったものが、「かつて存在していた

もの」として自身の“内部”に思い起こされるものとなるという、位置付けの反転と言えるだろう。

このように、ノスタルジアとして沖縄が捉えられるときには、沖縄に対する本土住民の視線の焦点は、文化や自然の美しさなどといった表面的な部分から一步踏み込み、より沖縄県民の生活空間に近付いてくると言えよう。その根拠は、ノスタルジアに向かう視線が、自身の“内部”に向けられているということにある。内部にあるものというのは、既に身体化されているため、自分自身にとっては一点の曇りもないリアリティを持つものである。そしてこのリアリティとは、本土住民にとっての「かつての日本の姿」のことなのだ。これが沖縄の空間と結びついてくるとき、沖縄の空間は本土住民にとって、自身の内部に身体化された「かつての日本の姿」と同じほどのリアリティを帯びてくると言える。その上で沖縄の空間のリアリティとは何かと考えると、それは県民の生活のリアリティのことを指すのである。では、県民の生活のリアリティとは何を指し示すものなのだろうか。それは、沖縄を生活するための空間としてまなざすときに避けて通ることのできない、「暗い部分」をも持ち合わせた沖縄の現実である。米軍基地問題に代表される沖縄の負の現実、間違いなく県民生活を圧迫している。本土住民にとって“内部”として位置付けられた沖縄の生活空間に、日常的に沖縄問題による生活の圧迫が負担されているという事実。そうした認識は、沖縄における諸問題を、日本“内部”の問題として捉え直すことを本土住民の視線の内に迫るといふ効力となるであろう。つまり、沖縄の現状の諸問題が、県民のみならず本土住民の意識の中にも、「私」の問題」もしくは「日常の問題」として認識されるのである。ノスタルジアとしてまなざされる「癒しの島」としての沖縄は、沖縄という存在そのものの、まなざしにおける位置付けの変革を可能性付けるものなのである。

また、このことはさらに、沖縄県民の存在の二重性を解消することにもつながると考えられる。存在の二重性とは、「まなざされる客体」としてのあり方と「まなざす主体」としてのあり方のことであると、第4章において説明した。本土住民が沖縄を“内部”化するということは、同時に沖縄県民の存在を自身と同位置に置くということの意味する。すなわち、沖縄県民が本土住民と「日本」という一国家のまとまりの中で同位置に存在するものとして本土住民の目線からまなざされるとき、県民は「まなざされる客体」という立場からの解放を見えるのである。この時、芸能イメージの視線として表れた、「沖縄出身の者に“今時”の音楽ができるのか」などといった差別的意識も取り払われる。同時に沖縄出身ということのブランドとしての価値も失うことになるが、その好意的視線の一方にある政治的効果の危険性からも、沖縄は解放されるのである。

以上のことから考えられるように、ノスタルジアの可能性とは、沖縄をイメージ像で描きながら、同時にイメージ像から自身を解放していく効果となっていくところにあると考えられる。それは将来的には、沖縄の生活空間と本土の日常世界との距離を近付けることにつながると言える。これは、異国エキゾチズムの範疇では決して実現されることのなかった距離の縮小化を、“外部”から“内部”へという位置付けの反転によって可能に

した。そのことによって、もとは異国エキゾチズムの構成要素となっていた沖縄の空間に存在する事物が、本土住民の内部に投影されるノスタルジアへと、次々と意味付けを変容させていく。これは、「普通化」とは少し意味合いが異なる。異国エキゾチズムは、新しい異国エキゾチズムが受容されたり、年月を経ることによって日常に近付いていくが、沖縄の場合は、これまで異国エキゾチズムであった事物がノスタルジアに回収されることになるので、本土の日常そのものに距離が近付けられるわけではないのである。ただ、その距離の見出される部分が、空間的なものから時間的なものへと変容する、そのことを“外部”から“内部”へ、という言葉で表現しているのである。

だから、沖縄の特殊性を表象する事物についても、それが象徴するものは「異国性」ではなくなるものの、その独自性までを失ってしまうことはなく、それは沖縄の魅力として、永久的に価値を持ち続けるものである。そのあり方は例えば、京都における古都の街並みや白川郷の合掌造りのような、後世に残されるべき「日本の」宝としてのあり方と同様である。現実の「明るい部分」として表現されてきたそのような事物に加え、「暗い部分」までもが沖縄のアイデンティティとして、そしてそれは同時に日本のアイデンティティとして、語られるようになっていくというのが、これからの沖縄の存在のしかたとして期待されていくものであろう。

第4章3節で取り上げた、復帰35周年の節目に行われた県民意識調査において、多くの沖縄県民が「米軍基地の縮小・撤去」を本土との格差解消の要素として見ているということが明らかになった。米軍基地問題に代表される沖縄問題は、本土住民の自意識内に問題付けられたときによく、解決への方向性の第一歩が踏み出されることになると言える。そしてそのときこそ、ノスタルジアが本土と沖縄との格差を解消するものとして作用する瞬間なのである。

では、実際にノスタルジアが沖縄という存在の位置付けの変容の要因として効果的に働くためには、具体的にどのような働きかけが必要なのだろうか。このことについて、本論の最後に、次章で検討したいと思う。

5.3 メディアに見出される可能性

ノスタルジアが日本における沖縄の“内部”化の要因となるためには、具体的に何がなされるべきなのだろうか。私はここに、メディアの影響力というものを、沖縄の今後にとってプラスの可能性を持つものとして見出したいと考える。

メディアはイメージを演出するという操作性を持つものとして、沖縄の「現実」と「イメージ」の間の乖離を生んだ元凶として捉えられてきた。それは先行研究のみならず、本論文の議論の中でも同様である。沖縄に関するイメージの根幹にある観光リゾートとしてのイメージ像を作り出したのも、メディアによる宣伝効果であったし、沖縄芸能が東京の

「今時」に合致して人気を集めた、その「今時」というものの形を作っているのもメディアであるし、「癒しブーム」を過熱させているのもメディアのなせる効果である。確かに、メディアの影響力は、沖縄の特殊性を「異国性」としてイメージ化させるに至る、最も大きな要因であったろう。しかし、別の見方をすれば、メディアは大衆を扇動するだけの力を、それだけ持っているということになる。沖縄ノスタルジアの根拠となる癒しブームも、メディアによる宣揚なくしては現在のような全国的な普及とはなり得なかった。だから、沖縄に向けられたノスタルジアの視線が一過性のブームに終わってしまわないようにするためには、今またここで、メディアの力が必要となってくるのである。

沖縄の潜在的な素材の中で、「癒し」を誘発させるものとしてメディアが注目したキーワードは、「人間の温かさ」・「健康」・「長寿」・「伝統」・「原風景」などといったものである。私はここにさらに、「幸せ」というキーワードを加えて、沖縄における県民生活のリアリティの語り出しとメディアの作用とを結びつけて考えたい。なぜ「幸せ」をキーワードとして強調するか、それは、上記した「癒し」を誘発させる様々なキーワードを包括する意味合いの言葉であるということと同時に、それらの前提条件として根本を形成するものだからである。

沖縄の潜在的要素の中に見出される「幸せ」とは、沖縄の特殊性を表象する特徴で言うところの「沖縄戦の体験と平和思想」に基づくものである。生活空間としての沖縄に流れる、ゆったりとした時間感覚、温かく優しい人間関係、「なんくるないさ（「なんとかなるさ」の意）」といった言葉が象徴するような、日常生活とそこで日々を過ごす人々の大らかさは、すべて「幸せ」というカテゴリーの中に集約することができるだろう。

何を「幸せ」とするかの基準は、時代によって異なる。戦後から経済成長期の時代にあっては、「幸せ」の象徴は便利さや快適さなどにあった。そこでは、モノ不足の戦時下を経たことの反動として、いかに生活の豊かさを享受するかが、幸せか不幸せかを隔てる尺度となっていたからである。それは、手の届かないところにある理想に対して、それを掴みたいと願う欲求が、「幸せ」の獲得と直結しているからである。そのことは、「幸せ」の内容自体は異なるものの、現代においても思考としては同様である。「昔」を想起することに癒しが見出されるのは、「昔」の中にある何かが、現代の日常生活では得られない理想のものとして存在していることを意味する。そして、その理想形に手を伸ばし、それを掴もうとする過程に「幸せ」を覚えるという意識があるのではないだろうか。すなわち、現実の生活の中で当たり前のように享受している快適さや便利さは、前時代には理想とされたものであったが、快適さや便利さが既に獲得された現代では、それとは別のところに違った形での理想を求めている。それが、優しさや温かさなどといった、人間の内面的な部分にある大らかさなのである。そして、そうしたものを「幸せ」と捉えることは、明らかに原点回帰の思想だと言える。

ここで今一度、沖縄の空間に本土住民が見出す「幸せ」の内容について考えてみよう。すると、沖縄に見出される原点回帰的志向の中にある「幸せ」とは、大城（2005）が挙げ

た特徴のうち「 沖縄戦の体験と平和思想」の、中でも「沖縄戦の体験」が原体験としてある上に構築されたものであるということが改めて理解できる。戦争体験が原体験にあるからこそ、その後渴望された「幸せ」の形とは、戦争とは正反対の「平和思想」だったのである。このことは、先述した、「幸せ」の獲得が何によってなされるかの考察と結びつけることによって明らかにされる。平和に基づく「幸せ」とは、生活の安定とその継続というところにあるだろうが、これを脅かすものが「 アメリカ統治体験と現在の基地問題」なのである。ノスタルジアとして捉えられる存在としての沖縄は、本土住民の意識に“内部”化されるということを前節にわたって説明した。“内部”となった沖縄の基地問題は、ここでようやく、本土住民の目線から見ても生活に密着した日常的な問題としてまなざされる出発点に立つ。「日本の一地域における」日常問題としてこの問題が捉えられたときに、基地という治外法権的なテリトリーと、そこで起こった事件・事故の理不尽な事後処理が、本土住民にとっても日常の安定を揺るがす大きな問題として、顕在化してくるのである。

日常を平和に過ごしたいと願い、それを安定的に獲得しようとするのが、沖縄の空間における「幸せ」である。米軍基地問題などの沖縄問題が、そうした「幸せ」を脅かすものの元凶としてのまなざしを向けられるときによく、それがノスタルジアへの憧憬と結びついてくると言える。ノスタルジアはその性質として、沖縄問題という「暗い部分」の現実とイメージとの橋渡しを行う機能を持つが、それを本土住民の意識に植え付けるには、メディアの扇動力が大きな可能性として考えられると言えるだろう。ノスタルジックな沖縄の原風景が憧憬のまなざしを向けられるときに、この「幸せ」な日常空間がどのようにして構築されてきたかに思いを馳せると、その基盤に「 沖縄戦の体験と平和思想」があるということが明らかになってくる。そして、この“平和”という名の「幸せ」が何によって危ぶまれているかと考えると、その原因には「 アメリカ統治体験と現在の基地問題」がある。「幸せ」を失うということの不安や恐怖が浮き彫りにされればされるほど、それを失わないようにするための策が講じられるのが一般的であろう。だから沖縄に関しても、“平和な日常”という「幸せ」の非普遍性と貴重性を強調する報道表現をメディアが発信することによって、より本土住民の視線が沖縄の空間における平和の維持に向けて、真摯に向き合うということを試みるきっかけになると考えられるのである。「癒しブーム」の過熱化の中で、沖縄の空間に潜在する「癒し」の要素とノスタルジアを感得する情緒とを結びつけたその先に、安定した日常生活に見出される平和という形での「幸せ」がメディアによってさらに結びつけられたとき、それはメディアの構築するイメージの力が沖縄の本質へのまなざしに対してプラスの効果に働くことにつながると言えるのではないだろうか。メディアという情報の発信源は、知識、イデオロギー、そしてイメージという、沖縄を表象する様々な要因を作り上げてきた。その力は、東京という本土の中枢地点を經由しているという点で、その影響力は全国的に作用するものである。そこでメディアが沖縄の現状を「幸せ」という癒しの要素の1つと結びつけて語り出すことは、県民の安定的な生活の阻害要因となっている「暗い部分」の現実差し迫った危機感を本土住民に対して覚

えさせる機能として働くだらう。異国エキゾチズムとノスタルジアの表出の根幹にあったものは、これまでも常にメディアであった。だから、癒しの空間として当然のように「幸せ」を発信しているように感じられる沖縄の空間が、実は最も「幸せ」を渴望している空間であるという部分にメディアの強調する沖縄像を置くと、沖縄という存在は、数々の問題に圧迫された不安定な日常を脱出する、現状改善への方向性のまなざしを本土の視線の中から得るようになっていくのである。

終章 沖縄エキゾチズムの今後に向けて

沖縄に向けられるイメージの作用は、現実との間に乖離を生むものであるとして、研究分野においてはこれまで批判的な見解が多くとられてきた。では、沖縄の現実とは一体何なのだろうか。何をもって、沖縄の現実とは規定されるべきなのだろうか。それはやはり、実際に沖縄を居住空間としている沖縄県民にとって規定されるべきであり、その生活そのものが現実なのである。

沖縄と本土とを対立図式で扱うとき、それが沖縄に対する暴力となっではいけない。しかしながら、そのような視座を向けること自体がマジョリティ・マイノリティという概念の元にあり、差別的であるという意見もある。

私がこの論文を通して主張したかったことは、沖縄に対してイメージの視線が注がれることはもはや自明のことであるから、イメージによってまなざされるという沖縄の宿命性を、本土住民によるイメージの視線の方向性を変え、沖縄を“内部”として感得させることによって、何とか明るい展望へと導き出せないかということである。その方が、イメージを取り払うとか、本土と沖縄という図式で語り出すことをやめるなどということよりも、より現実的で有意義な語りとなると考えたのである。そしてそのことこそが、現状のあり方に一番近い方法で、沖縄を“外部”としてまなざす本土住民による視線を解消することにつながるのではないかと考える。

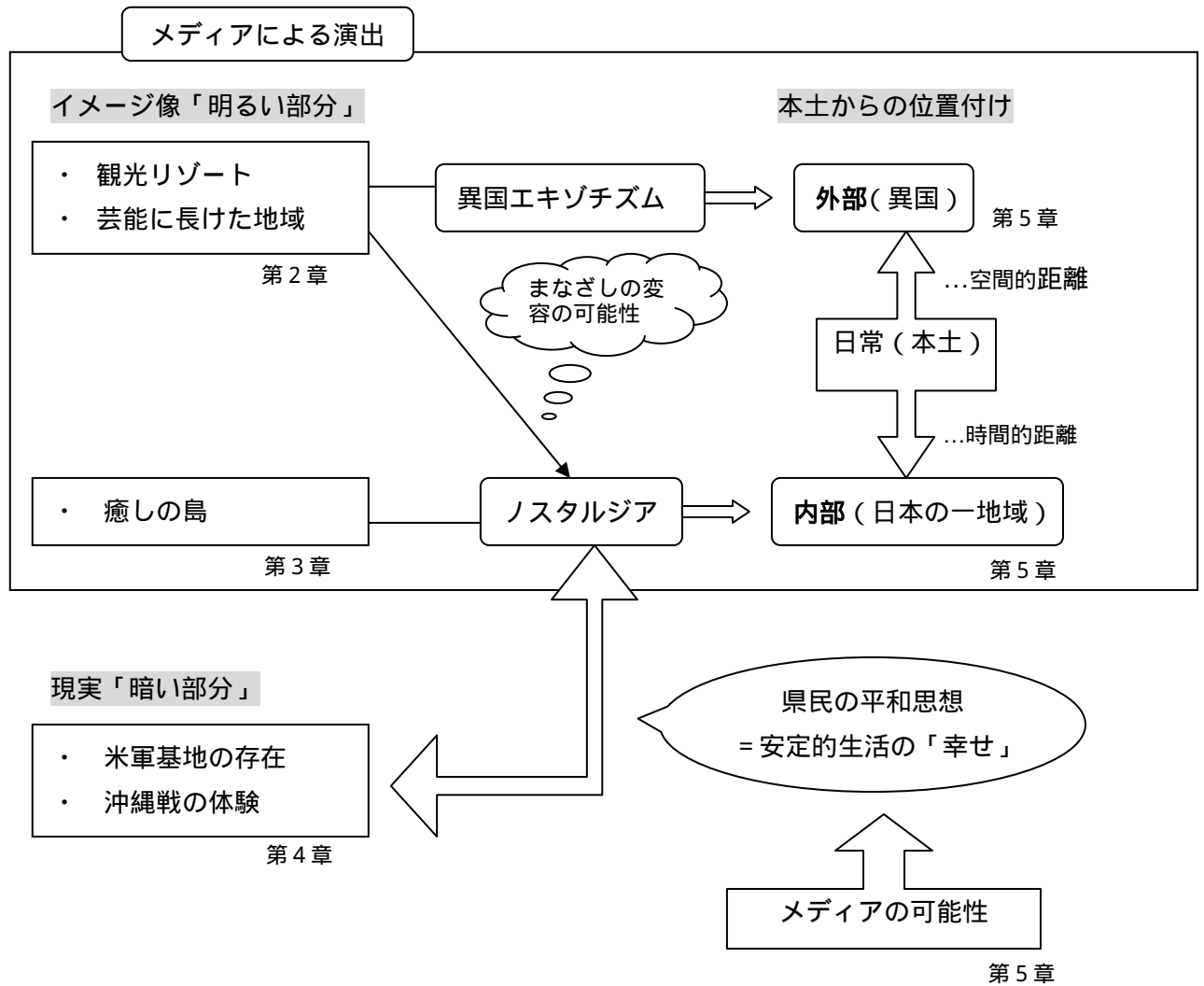
沖縄に対して抱かれる心理のなかで、異国エキゾチズムとノスタルジアの2つの意識が、現段階では共存している状態である。異国エキゾチズムもノスタルジアも、広義で「日常と距離を置く」という意味を持つエキゾチズムの中に含まれるが、エキゾチズムという概念で沖縄を語り出すということは、特殊性を表象する特徴が沖縄に存在するという事実を、前提として認めているということになる。なぜなら、エキゾチズムは空間的もしくは時間的に日常世界から離れた事物に対して抱かれる、憧憬の念だからである。エキゾチズムは沖縄の特殊性の、「明るい部分」の現実の特化して抱かれるという点で、政治的效果を生むものとして危惧されてきた。しかしながら、それは「ノスタルジア」という意味付けを獲得するときに限り、沖縄に存在する数々の「暗い部分」の問題を、本土住民の自意識に、「“私”の問題」として顕在化する可能性を持っているのである。ここに見出される沖縄の将来的な展望が、私がこの卒業論文を通して最も強く印象付けたかった内容である。

これまで、沖縄に潜在する特殊性とイメージ像、そこから生まれるエキゾチズムの意識について、メリット・デメリットという観点から様々な主張を述べてきた。しかし、沖縄の特殊性は、「明るい部分」であれ「暗い部分」であれ、過去・現在・未来において貴重な財産であると私は考える。だから、特殊性が注目を浴びるということ、それによってエキゾチズムが感じ取られるということは、本来的には否定されるべきではないと思うのである。批判の対象となるべきは、「暗い部分」の現実によって県民生活が圧迫されているとい

う事実であって、特殊性に裏付けられたイメージそのものではない。少なくとも、近年の「癒しの島」としてのイメージ像で語り出される沖縄に見出されるノスタルジアは、沖縄の負の現状を構築する原因とはならないだろう。

第1章の冒頭で、沖縄の特殊性を表象する特徴として大城氏の論文から5つの項目を引用したが、私はここに、「日本の原風景と人間の温かさ」という項目を新たに加えたいと思う。これは、「日本の」という言葉が含まれている点で、近年の癒しイメージに見出されるノスタルジアの功績であると言える。すなわちそれは、ノスタルジアとしてまなざされることによって、沖縄という存在が認識上も日本の一地域として内包されていく過程において、その先に沖縄問題の改善への道筋という展望を暗示しているものだからである。これをノスタルジアの功績として実現していくためには、今後、沖縄に対するノスタルジアの意識の流れが流行現象として終わってしまうことなく、異国エキゾチズムと共に沖縄の本質の中に定着化されて、新しい“沖縄エキゾチズム”というものを形作っていくことが必要である。そのことをもって、沖縄の特殊性は、それこそが沖縄の本質を描き出すアイデンティティとして、異国らしさも日本の原風景としての部分も真の魅力として発信されることができるのではないだろうか。

【論文構成図解】



【参考文献・参考資料】

- 新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編，2006，『地域の自立 シマの力（上）』コモンズ
- 新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編，2006，『地域の自立 シマの力（下）』コモンズ
- 新崎盛暉・大城将保・高嶺朝一・長元朝浩・山門健一・仲宗根将二・金城朝夫・安里英子・宮城晴美，1997，『観光コースでない沖縄 戦跡／基地／産業／文化』高文研
- DeMusik Inter.編，2006，『音の力．沖縄アジア臨海編』インパクト出版会
- 堂前亮平，1997，『沖縄の都市空間』古今書院
- エドガー・W・ポーブ，2005，「エキゾチズムと日本ポピュラー音楽のダイナミズム 大陸メロディを中心に」三井徹編『ポピュラー音楽とアカデミズム』音楽之友社，162-182
- 江上能義，1997，『現代沖縄の政治と社会』琉球大学文学部
- 藤田正，2000，『沖縄は歌の島 ウチナー音楽の500年』晶文社
- 我部政明，2003，『世界のなかの沖縄、沖縄のなかの日本：基地の政治学』琉球新報社
- 岩淵功一・多田治・田仲康博編，2004，『沖縄に立ちすくむ 大学を越えて深化する知』せりか書房
- 金城厚，2006，『沖縄音楽入門』音楽之友社
- 宮城辰男，1998，『沖縄・自立への設計』同文館出版
- 宮本憲一・佐々木雅幸，2000，『沖縄 21世紀への挑戦』岩波書店
- 岡本太郎，2002，『沖縄文化論 忘れられた日本』中央公論新社
- 沖縄タイムス「長寿」取材班編，2004，『沖縄が長寿でなくなる日』岩波書店
- 大城将保，2005，「平和の文化の創造と発信」石原昌家・仲地博・C.ダグラス・スミス編『オキナワを平和学する！』法律文化社
- 佐藤純一編，2000，『文化現象としての癒し 民間医療の現在』メディカ出版
- 島蘭進・田邊信太郎編，2002，『つながりの中の癒し セラピー文化の展開』専修大学出版局
- 多田治，2004，『沖縄イメージの誕生 青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社
- 田仲康博，2002，「風景の誘惑【文化装置としての「南島」イメージ】」海勢頭豊『琉球文化圏とは何か』藤原書店，258-265
- 内田弘美編，2007，『るるぶ楽楽 沖縄・石垣・宮古』JTBパブリッシング
- 山本英治・高橋明善・蓮見音彦，1995，『沖縄の都市と農村』東大出版会
- 与那嶺功，2002，「消費される琉球イメージ」海勢頭豊『琉球文化圏とは何か』藤原書店，266-267
- 財団法人雇用開発推進機構，1999，『沖縄の芸能・文化の産業化の可能性 芸能・文化の就業及び雇用創出に果たす役割』
- 瑞慶山茂，2007，『琉球新報』紙が伝える復帰35年の県民意識 県民の最大の関心は『基

地の縮小・撤去』と『福祉の充実』に集中」『月刊「軍縮問題資料」』320: 26-31

沖縄県庁観光商工部観光企画課，2005，「平成 17 年度版観光要覧」

(<http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/contview.jsp?cateid=233&id=12981&page=1>,
2007.11.26)

フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」，2007

(<http://ja.wikipedia.org>, 2007.11.24)